

小・中・高・大を連携し、すべての英語教育の"今"を知る。

英語情報

2017
冬号
WINTER

[特集] 児童生徒の学習意欲を高める10の方策

山梨県 韮崎市立韮崎北東小学校 矢巻 利之 先生



鳥取県 倉吉市立東中学校 山根 晃治 先生



佐賀県立佐賀農業高等学校 谷口 広賢 先生



英検

公益財団法人 日本英語検定協会



九州大学 緒方 一夫 副学長
(スーパースター 大学担当・熱帯農学研究センター教授)



英語情報

8

小・中・高・大をつなぐ『英語情報』をお届けします！

現行の学習指導要領により、小・中・高等学校の英語教育が「コミュニケーション」を軸として一本化したことを受け、小・中・高の接続がこれまで以上に重視されてきています。

また、高大接続改革も進行しており、大学入試の改革に注目も集まっています。そこで『英語情報』においても、各校種の先生方のお役に立つような情報をさらに充実させるため、2016年度より、小学校の先生方向けの情報紙『The Sensei Times』と統合し、英語教育に携わる全ての皆様のために、小・中・高・大をつなぐ総合情報誌となりました。さらなる拡充を図る『英語情報』にどうぞご期待ください。

『英語情報』について

◎発行回数は年4回。

春号：4月発行、夏号：7月発行、秋号：10月発行、冬号：1月発行の季刊誌となりました。

◎内容を拡充。

56ページの総合情報誌として、内容を拡充。授業改善に役立つ情報が満載です。

◎英語教育に携わる皆様のための総合情報誌に

次期学習指導要領も見据え、小学校から大学までの英語教育改革に関する情報や高大接続改革の最新動向をお届けします。

英語情報

英語情報 AR

『英語情報』専用アプリができました！ (無料) (iOS/Android対応)

スマートフォン&タブレットアプリで「AR」マークのついた画像をかざすと、授業に役立つさまざまな動画を見ることができます。

今号の動画は、発行日より3カ月間（予定）ご覧いただけます。

STEP 1 アプリをダウンロード

スマートフォンかタブレットを用意して、AppStore / Google Playで「英語情報 AR」と検索し、ダウンロードします。

英語情報 AR 検索

STEP 2 画像をスキャン

「英語情報 AR」を起動し、「AR」マークのついた写真が枠内に収まるようにスキャンしてください。



STEP 3 動画を見る

「スキャン完了」と表示されると、動画が始まります。「スキャン完了」と表示された動画は「履歴」画面より動画を選択すれば誌面から離れても動画をご覧いただけます。

※ iPhone/iPad → iOS 7.0 以上、Android → ver. 4.0 以上。
Android版は一部対応していない端末がございます。
インストール画面の動作確認端末をご確認ください。

※ カメラのピントが合わなかったり、光が反射したりすると、読み込みができない場合があります。
※ 読み込まない時は、カメラ位置を少し上下させて読み込み距離を調整してください。
※ 読み取りに時間がかかる場合はアプリを再起動し、再スキャンをしてください。
※ 動画の再生にはネットワーク環境が必要です。Wi-Fi、またはLTE環境を推奨しています。

英語情報

2017 冬号
CONTENTS



04



15



36



40

02 最新情報 02 NEWS & TOPICS

04 授業改善 04 特集

児童生徒の学習意欲を高める10の方策

監修：津田塾大学 学芸学部英文学科 准教授 稲垣 善律

08 特集事例 CLASS REPORT (高等学校編)

「AR」小さな成功体験を積み重ね、生徒の思考力・判断力・表現力を育てる
佐賀県立佐賀農業高等学校 教諭 谷口 広賢

「AR」生徒が自分の考えや気持ちを伝え合う言語活動中心の授業で話す意欲を引き出す
鳥取県 倉吉市立東中学校 教諭 山根 晃治

「AR」自分の気持ちを表現し、褒め合うことで意欲が高まる
山梨県 韮崎市立韮崎北東小学校 教諭 矢巻 利之

14 (連載) YUKIの使える CLASSROOM ENGLISH!!! 【最終回】
ハワイ東海インターナショナルカレッジ 准教授 大木 優喜子

「AR」15 (連載) 安河内 哲也先生が聞く【第10回】明日から使える! 英語で授業 7つの鉄則
宮崎県立日南振徳高等学校 教諭 富高 雅代

19 (Information) 英検二次試験の品質向上のため
英検協会とEnglishCentralが英検面接委員向けの「英語力向上プログラム」を共同開発

20 (連載) 大学入試から変わる日本の英語教育【最終回】大学入試は今後どのように変わり英語教育には何が求められるのか (特別対談)
上智大学 言語教育研究センター長 特別招聘教授 吉田 研作
文部科学省 初等中等教育局 教科調査官 向後 秀明
千葉県立長生高等学校 教諭 百瀬 美帆

24 (連載) 次期学習指導要領に向けて

(高等学校編) 【最終回】

「森から木へ」の授業のススメ

上智大学 外国語学部 教授 和泉 伸一

(中学校編) 【最終回】

「授業は英語で行うことを基本とする」への取り組み
生徒のために英語を使いましょう!

文教大学 国際学部・同大学大学院 国際学研究科 教授 阿野 幸一

(小学校編) 【最終回】

文字指導の取り入れ方、中1ギャップを生まないための指導 (小・中連携/接続)

琉球大学 教育学部 教授 大城 賢

30 英検情報 (Information) 英検 4技能化への対応

30 4級・5級スピーキングテスト

32 2級・準1級・1級のライティングテスト

34 大学入試改革

34 TEAP Hot News!
TEAP 活用事例 第10回：愛知大学

36 留学

36 (連載) 海外進学【第6回】
学問の自由を大切に、自分を取り巻く世界とつながる
武蔵高等学校中学校 校長 梶取 弘昌

38 国際化の取り組み

38 Super Global High School【第10回】
古くからの伝統を受け継ぎながら
新時代を切り拓く人材の輩出を
愛媛県立松山東高等学校

40 Top Global University【第10回】
「躍進百大」が目指すトップグローバル
研究・教育拠点創成への取り組み
九州大学 副学長 (スーパーグローバル大学担当・熱帯農学研究センター教授) 緒方 一夫

42 指導のヒント

42 (連載) 思考力・判断力・表現力を育む
ライティング活動のために【最終回】
清泉女子大学 文学部 英語英文学科 教授 大井 恭子

43 (連載) 柴原智幸先生のプレゼンテーション講座【最終回】
神田外国大学 外国語学部 英米語学科 専任講師 柴原 智幸

44 (連載) MASUMI先生の
夢中になれる英語 Game&Activity【最終回】
英語芸術学校 MARBLES 主宰 小口 真澄

46 Pick Up! 英語教育

「AR」46 第66回 全英連山口大会レポート
「TSUNAGARI」を全国へ広げ、今後の英語教育の在り方を考える2日間

52 教員研修

52 2015年度 英検 英語教員海外研修
帰国後の取り組み報告

●中学校英語教員研修 米国 モンタナ州立大学
沖縄県 座間味村立座間味中学 教諭 有銘 眞吾

●高等学校英語教員研修 英国 ケンブリッジ大学
新潟県立長岡高等学校 (研修当時：新潟県立三条高等学校) 教諭 湧井 知恵

54 わたしのオススメ本

News & Topics

英語学習指導などに役立つ最新情報をお届けします

INFORMATION

実用英語技能検定 2017年度試験日程のご案内

大学入試における英語試験の4技能化が進み、外部の資格・検定試験の活用が広がり、今後は高校入試においても4技能化が進むと予想されています。それに伴い、2016年度中に英検2級以上の受験者数が急増する一方で、団体受験をされる中学校や高等学校より、部活動の公式大会や学校行事等と試験日程が重複して受験することができず、公益財団法

人 日本英語検定協会（英検協会）には、別日程での受験をご要望される声が寄せられています。そこで、2017年度より実用英語技能検定（英検）の二次試験の日程を2日間設定することで、中学生や高校生の受験機会を増やすことができるようにいたしました。2017年度の試験日程は次の通りです。

■2017年度 実用英語技能検定 試験日程

試験日程		第1回検定	第2回検定	第3回検定
受付期間		3月10日（金）～5月12日（金） 〈書店締切:5月8日（月）〉	8月7日（月）～9月15日（金） 〈書店締切:9月8日（金）〉	11月21日（火）～12月20日（水） 〈書店締切:12月13日（水）〉
一次試験	本会場	6月4日（日）	10月8日（日）	2018年 1月21日（日）
	準会場（全ての団体）	6月3日（土）、4日（日）	10月7日（土）、8日（日）	2018年 1月20日（土）、21日（日）
	準会場（中学・高校のみ）	6月2日（金）	10月6日（金）	2018年 1月19日（金）
二次試験	A 日程	7月2日（日）	11月5日（日）	2018年 2月18日（日）
	B 日程	7月9日（日）	11月12日（日）	2018年 2月25日（日）

■二次試験のA/B日程の分けについて

団体申込

団体区分	1級、準1級	2級、準2級、3級
中学校 高等学校	A 日程	A 日程
小学校 その他団体		B 日程

- 団体申込において、中学校・高等学校の受験者は、全級A日程での受験とする。
- 小学校・その他団体の受験者は、1級・準1級はA日程、2級・準2級・3級の受験者はB日程での受験とする。
- ただし、学校行事や部活動など公的な理由でA、Bそれぞれの指定日程で受験いただけない小学校・中学校・高等学校からの団体申込受験者は、学校長からの書面でのご依頼を提出いただくことでもう一方の日程に変更可能とする。

大学入試や高校入試における英検のスコア提出に対応するため、中学校・高等学校の団体受験者には入試出願日程に間に合うよう、成績表が早く届くA日程での試験日を設定しました。

個人申込

年齢区分	1級、準1級		2級、準2級、3級
	東京・神奈川・千葉・埼玉・愛知・大阪・兵庫 に在住	左記以外	
20歳以下	A 日程	A 日程	B 日程
21歳以上	B 日程		

- 個人申込において、1級・準1級の受験者については、東京・神奈川・千葉・埼玉・愛知・大阪・兵庫に在住で、来年度、満20歳以下の受験者はA日程、満21歳以上の受験者はB日程での受験とする。それ以外にお住まいの方は年齢を問わずA日程での受験とする。（満年齢の算定方法につきましては、申込要項にて詳細をご案内いたします。）
- 2級・準2級・3級の受験者については、住まいおよび年齢の制限はなく、B日程での受験とする。

また、団体受験（A日程）では日程が合わない中学生・高校生の志願者については、個人で申し込みいただくことにより、別日程（B日程）を選択することができます。

INFORMATION

「英検」準2級、3級に来年度からライティングテストを導入

ここ数年、英語教育における4技能の総合的育成、発信能力のさらなる強化が掲げられるなか、英検も、2017年度第1回検定より、準2級、3級でもライティングテストを導入し、4技能化を図ります。英検協会では、2016年度第1回検定から2級にライティングテスト、4級、5級にスピーキングテストを導入しました。そして、2017年度第1回検定からは、準2級、3級にもライティングテストを導入します。これにより、4級、5級を除く、3級以上の全級で4技能化が実現します。

■2017年度以降 英検の各級における測定技能一覧

級	リーディング	リスニング	スピーキング	ライティング
1級	○	○	○	○
準1級	○	○	○	○
2級	○	○	○	○
準2級	○	○	○	2017年度 開始予定
3級	○	○	○	
4級	○	○	○	早期実現を目指して準備中
5級	○	○	○	

準2級、3級のライティング問題は、英検の審査基準を遵守したうえで、中学校、高等学校の学習指導要領、および国際基準規格であるCEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）において準2級はA2レベル、3級はA1レベルと整合させることを意識して開発。受験者は、記述式の自由英作文で、与えられた質問に対し自分の意見とその裏付けとなる理由を、適切な語彙と文法を使用しながら英文で論述する能力が問われます。また、準2級、3級へのライティングテストの導入にあたり、検定料の見直しの必要性が生じ、改定させていただくことになりました。

■2017年度 第1回検定からの検定料（税込）

会場	準2級	3級
本会場	5,200円（現在4,500円）	3,800円（現在3,200円）
準会場	4,800円（現在4,100円）	3,400円（現在2,800円）

INFORMATION

「英語教育研究センター 特別講演会」のご案内

英検協会 英語教育研究センターは、2010年の創設以来、日本を代表する研究者・教育者の先生方に研究を依頼し、多くの優れた成果を蓄積して参りました。今回、英語教育研究センター常任審議委員会を中心に、「英検」研究助成入選者、協会内研究者を含め、研究成果の発表会を開催することになりました。参加ご希望の方は、英検ウェブサイトからお申し込みください。定員となり次第締め切らせていただきます。

日時：2017年3月18日（土）13時より
開催内容：講演会 13:00～18:00 ※参加無料
懇親会 18:00～20:00 ※会費制（2,000円）
会場：アルカディア市ヶ谷（私学会館）6階「霧島」（東京都千代田区九段北4-2-25）
参加定員：100名（先着順）
※定員となり次第締め切らせていただきます。
募集期間：2017年1月10日（火）～2月28日（火）
※上記期間外の受付はできません。

発表者（予定）：

大友 賢二 （常任審議委員・筑波大学名誉教授）
長 勝彦 （常任審議委員・語学教育研究所参与）
小池 生夫 （常任審議委員・慶應大学名誉教授・明海大学名誉教授）
仲村 圭太 （英検協会 制作部研究開発課課長）
野上 泉 （茨城県立水戸桜ノ牧高等学校教諭）
村木 英治 （常任審議委員・東北大学名誉教授）
和田 稔 （常任審議委員・明海大学名誉教授）

※五十音順・敬称略

発表時間：1名につき質疑応答を含めて30分を予定しています。
申込方法：英検ウェブサイトよりお申し込みください。

英語教育研究センター 検索

http://www.eiken.or.jp/center_for_research/



英語教育関連書籍2冊を各1名様にプレゼント！

英語教育に関する著書2冊を、抽選で各1名様に差し上げます。本誌に関するアンケートにお答えいただき、ご希望の書籍番号をご明記のうえ、『英語情報』編集部までご応募ください。詳細はP.54をご参照ください。



特集「授業改善を考える」

児童生徒の 学習意欲を 高める

10

の方策

「なぜ、英語を学ぶのか」

その意義を明確にし、具体的な目標を持つことで、

児童生徒は今自分が何をすべきかを考え、行動し、

いくつもの小さな成功体験を重ねることで自信を深め、次なる一步を踏み出していく。

学ぶ側が主体となる言語活動中心の授業を行うなかで、

児童生徒の自ら学ぼうとする気持ちを引き出し、それを持続させていくためには、

どのような指導が必要なのだろうか。

児童生徒の学習意欲を高めるための具体的な手立てについて、

津田塾大学学芸学部英文学科の稲垣善律准教授が提案する「10の方策」を紹介する。

●監修：稲垣 善律（いながき・よしのり）

津田塾大学学芸学部英文学科准教授。専門は第二言語習得論、外国語教育学。1998年オハイオ州立大学大学院教育学研究科修士課程修了後、2001年東京大学大学院総合文化研究科修士課程修了。2009年同大学院総合文化研究科博士課程修了。東海大学外国語教育センター第一類講師を経て、2011年から現職。第二言語習得のメカニズム、それに基づいた第二言語の教育法や学習法について研究している。NHK学校放送教育番組『えいごリアン』『スーパーえいごリアン』『えいごリアン3』制作スタッフも務めた。

01. 目的意識を明確化する

英語を学ぶ目的を言葉にし、話し合い、気付かせる

児童生徒のやる気を引き出すためにまず必要なことは、「目的意識の明確化」です。これは、「なぜ英語を学ぶのか」ということを、長期的、短期的な観点からはっきりさせるということです。例えば、英語を身に付けることで、いつか「外国の人と仲良くなりたい」「海外で勉強したい」「世界を舞台に働きたい」と願う児童生徒もいるでしょう。また、英語力を高めることで、近い将来「良い成績を取りたい」「志望校の入試を突破したい」「実用英語技能検定（英検）に合格したい」と願う場合もあるかもしれません。そうしたことを一人一人に言葉にさせ、共有させるのです。児童生徒にとっては、英語を学ぶ目的を言語化することでより具体的に、そして鮮明に意識化できるようになり、話し合うことで友達と考えから新たな視点に気付いたり、友達と目的を共有したりすることができます。もちろん、「英語を学ぶ目的」には正解も不正解ありません。重要なことは、それを自分にとってはっきりと「目に見える」ようにするという点なのです。

02. 目標を具体化する

目指すところが見えれば、今すべきことが見えてくる

目的がはっきりしたら、次は「どこを目指すのか」を具体化することが重要です。例えば、卒業時、学年末、学期末の各時期までにどこまでの習得を目指すのかという、「学習到達目標」を立てましょう。CAN-DOリストを活用すれば、個々の能力に応じた具体的な目標をスキル別に設定することができます。こうして目標を具体化することで、児童生徒はその達成のために今自分が何をすべきかを認識しやすくなり、それにより一歩が踏み出しやすくなるのです。また、目標は「未来への行動指針」としてだけではなく、「現在の行動を照らす評価基準」としても機能します。つまり、目標が具体的であればあるほど、今の自分の行動が目標を達成するうえで適切かどうかとも明確になり、そのことが「このままではいけない」といった意識を生み、児童生徒の背中を押すのです。

こうした具体的な目標設定を後押しする1つの方法としては、身近なロールモデルを提示することが挙げられます。教員の皆さん自身がALTと英語でやり取りする姿を見せたり、卒業生や先輩、同級生によるスピーチを聞かせたりすることで、児童生徒は自分の目指すところを具体的にイメージすることができるようになるでしょう。

03. 目標達成に対する期待感を高める

「きっとできる」が「やろう」につながる

目標を設定したら、次に大切なのは、「その目標は達成できる」と思えるようにすることです。1つには、目標達成の方法、つまり具体的な学習法や教材を提示することが考えられます。誰も、目的地までの行き方が分からなければその道のりを陰しく感じてしまうものです。しかし、具体的な到達法を知ることで、「たどり着ける」という期待感は高まることでしょう。また、実際に目標を達成した成功例を紹介することも効果的でしょう。「昨年はCAN-DOリストによる自己評価で平均〇%の進歩があった」「英検2級に〇人が合格した」といった身近な事例は、「自分も努力すればできるはずだ」という期待感を生むはずです。加えて、日々の学びのなかで児童生徒に成功体験をさせることも大切です。とりわけ、英語に苦手意識を持つ児童生徒にとっては、小さな成功体験の積み重ねが特に重要な意味を持ちます。例えば、内容が易しく、ページ数も少ない読書課題を与え、「1冊を最後まで読み切る」という目標を達成させることで、本人の意識の中に「自分もできる」という小さな自信を育むことができるでしょう。

04. 内発的興味を引き出す

「面白い」「楽しい」「できた」を育てる

課題自体に対する純粋な興味、つまり内発的興味は、それにより自ら取り組もうとする意欲を喚起する重要な要因です。特に、目的意識の明確化や目標設定といった認知的操作が難しい学年、例えば小学生児童にとっては、内発的興味がその意欲に直接的な影響を与えるのです。

授業の中で内発的興味を引き出すためにできることの1つは、児童生徒の「興味に合った題材」を扱うということです。音楽、映画、スポーツなど、児童生徒が関心を持つ話題や、クラスメート、学校、地域のことなど、身近な内容を取り上げるとよいでしょう。また、「意外性」を利用するのも有効です。例えば、「月」の表現を学ぶ際、「Octoberは10月ですが、これはラテン語で8番目の月という意味です。なぜでしょう?」と、既有知識とのずれを利用することで知的好奇心を刺激するという手もあります。「挑戦」の要素も重要です。児童生徒の挑戦心をくすぐるためには、例えば、「聞く」だけでなく、「聞いて話す」など、必要となるスキルの種類を増やしたり、劇を演じる、絵本を書くなど、創造性を要する活動を用いたりするのも一案です。さらには、グループで議論した内容をポスターにまとめて発表するというように、「成果が目に見える」活動を取り入れ、達成感を持たせるのも効果的でしょう。



05. 自律感を高める

選択させ、第一歩を踏み出させる

これまでの動機づけ研究では、人がある行動をする際、「他者にやらされているのではなく、自分の意志でやっている」という「自律」の意識を持つことで、より主体的に行動する意欲が高まることが明らかになっています。そうした自律の意識を授業において高めるための手段としては、児童生徒自身に「選択」や「決定」をさせる機会をできるだけ多く与えるということが挙げられます。例えば、作文課題を課す場合であれば、教員がトピックを指定するのではなく、トピックを複数提示し、「書きたいトピックを自分で選びましょう」と、選択の余地を与えるのです。自分で選択するという行為によって、児童生徒は課題遂行の第一歩を踏み出すことになり、この「自分の意志で動いた」という事実が、さらなる一歩を踏み出す力を生むのです。

06. 有能感を育てる

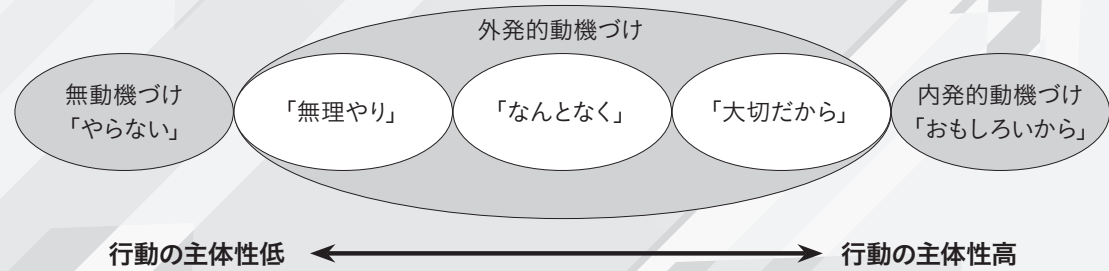
できることを褒め、自信を持たせる

「自分には能力がある」という「有能感」が、自ら行動しようとする意欲を引き出すことは、これまでの多くの研究によって認められています。児童生徒の有能感を高めるために授業の中でまず教員ができることは、ほかでもなく、「褒める」ことです。指導する立場にある者は、時として、「何ができるか」よりも「何ができないか」に目を向けがちです。だからこそ、児童生徒のできることに意識的に目を向け、それを認め、表現することが重要です。例えば、児童生徒の誤った発言に対してフィードバックを与える際にも、発言内容の正誤に関する情報だけを伝えるのではなく、「面白い視点だね」「難しい問題についてよく考えたね」といった、その取り組み自体に対する肯定的なコメントを添えることが大切です。

また、児童生徒が課題の遂行に失敗したり、テストで良い結果を出せなかったりした際には、適切な「原因帰属」をさせるこ

自己決定理論

(Deci & Ryan, 1985)



07. 良好な関係性を築く

意欲は適切な人間関係の中で育まれる

友人や教員との良好な人間関係は、児童生徒の意欲を育てる土壌となります。そして、そのような人間関係を教室の中で築いていくためには、そこにまず相互の交流を持つ必要があります。例えば、授業の中で、ランダムに割り当てたペアで特定のテーマに関する会話をし、その後、数名が自分の相手の話した内容をクラス全体に対して報告する、といった活動をするのもよいでしょう。こうした活動は、児童生徒が相互に交流し、お互いへの理解を深め、より友好的な人間関係を築いていく契機となり得ます。また、教員が授業の前後に「宿題やってきた?」「今日の授業分かった?」と声を掛けたり、前回授業の欠席者のケアや質問の対応をしたりすることも、教員と児童生徒との間に信頼関係を築くうえで有用な取り組みとなるでしょう。

とが重要です。つまり、そうした結果を生んだ原因は本人の能力にあるのではなく、努力の仕方にあることを認識させるのです。もしそこで、原因は能力にあると考えてしまえば、有能感は育ちません。しかし、原因が自分の意志で改善できる要因にあると捉えれば、その有能感が脅かされることはなく、「次はがんばろう」という意欲へとつながるのです。

そして、有能感を育てるうえでもう1つ重要なことは、児童生徒に、自分の能力を周りの人間とではなく過去の自分と比較させるということです。そのためには、自分の取り組んだ課題をポートフォリオとして蓄積していき、後にCAN-DOリストに照らしながら、自身の学習の軌跡を振り返るとよいでしょう。「初めは関係代名詞を正しく使えなかったけど、5回目には使えるようになった」など、自らの成長を具体的に目に見える形で認識することが大切です。

08. 実利性への意識を活用する

「アメとムチ」から内発的動機づけへ

人を動機づける伝統的手法に、「アメとムチ」を利用する方法があります。動機づけ理論の1つ、自己決定理論によれば、動機づけには自分の内から生じる知的欲求によって喚起される「内発的動機づけ」と、報酬や罰といった外的要因によってもたらされる「外発的動機づけ」がありますが、「アメとムチ」は後者の動機づけを喚起する要因ということになります。

これまで、「アメとムチ」の利用には、「内発的動機づけを阻害する」という、いわゆる「アンダーマイニング効果」の問題が指摘されてきました。例えば、ある研究では、被験者らに積木で形を作る課題が与えられ、最初はその面白さから熱心に課題に取り組んでいた被験者らが、ひとたび課題達成に対する金銭的報酬が与えられると、そうした報酬が得られない場面では課題に取り組まなくなることが見出されました。つまり、報酬が与えられることで、「面白いからやろう」とする自発的意欲が失われたのです。

しかし、ここで重要なことは、「アメとムチ」を必ずしも悪と捉える必要はないということです。自己決定理論によれば、仮に、一時的には実利目的で仕方なく行動を起こしていたとしても、「自律感」「有能感」「関係性」に関する欲求が充足されるにつれ、次第にその実利性への意識が形を変え、より主体的に行動を起こすようになっていくとされています。つまり、もし「進級のために仕方なく英語を学んでいる」という児童生徒がいたとしても、それを入り口段階と捉え、そこから徐々に内発的動機づけの方向へと導いていくことも可能なのです。



09. 文化的関心を育てる

文化を知ることが言語を学ぶ意欲につながる

カナダのフランス語学習者を対象に行ったある調査では、フランス語話者集団の文化に対する興味関心が強い学習者ほど、フランス語の学習意欲もまた高いことが見出されました。言語は文化と深く関わっています。いかなる言語でも、その話者が集まればそこに社会があり、文化があるのです。それゆえ、文化への関心を高めることは言語への関心を高めることにもつながるのです。例えば、授業で英語圏の音楽や映画を用いたり、伝統的な行事や料理を紹介したりするのもよいでしょう。有名人のスピーチやインタビューを聞かせるのもよいかもしれません。身近にいるALTや留学生と文化的交流をすることも有効でしょう。まずは英語圏の文化にたくさん触れさせることが大切です。興味を持つための第一歩は知ることなのです。

10. よりよい教員像を目指す

自分自身と真摯に向き合う

動機づけの研究には、「意欲の減退」に焦点を当てた研究があります。そうした研究において、学習者の意欲を減退させる要因として常に上位に挙がってくるのが、教員の能力、態度、性格の問題です。日本の言語環境にあっては、多くの場合、児童生徒が英語を学ぶ場は教室内に限られ、英語を教わる人はそこで教壇に立つ人物ということになります。必然的に、教員のあり様が児童生徒の意欲に与える影響は大きくなるわけです。教員はそのことを認識し、例えば、自らの授業を録画したり、授業アンケートを実施したりしながら、「英語力」「説明力」などの能力面、「意欲」「熱意」といった態度面、そして「親しみやすさ」「忍耐強さ」などの性格面の観点から、自分自身の指導のあり方を見直すことが大切でしょう。

やる気の種を撒き続けていく

英語習得には長期にわたる自発的努力が必要であり、それを可能にするのは学習者自身のやる気に他なりません。やる気なしにはどんなに優れた教材や教授法を用いても効果はなく、その意味では、やる気こそが英語習得のカギであると言えます。そして、やる気はあらゆる要因によって影響を受けつつ、絶えず変化し続けます。これはつまり、教員が児童生徒のやる気に介入する余地もまた多いことであり、教員がそれをよりよい方向に変え得る可能性があるということでもあります。無論、万人に効く方法はありません。さまざまな工夫をして「やる気の種」を組み合わせながら、これをあきらめずに撒き続けることが大切なのです。

CLASS REPORT

学校訪問 高等学校編

佐賀県立佐賀農業高等学校
谷口 広賢 先生

小さな成功体験を積み重ね、 生徒の思考力・判断力・表現力を育てる

2015年度より文部科学省のスーパーグローバルハイスクールに指定された佐賀県立佐賀農業高等学校。佐賀県初、農業高校初の指定とあって、地域の注目を集める同校で生徒たちは、地域と世界の農業事情を学び、英語力と国際的視野、そしてICTを活用する力を身に付け、主体的・協働的に学習する力を育んでいる。谷口広賢先生が指導する環境工学科1年生SG選択生の「コミュニケーション英語Ⅰ」の授業を訪ねた。

地域や世界が抱える課題について自ら考え発信できる力を付ける

農業科学科、食品科学科、環境工学科の3学科で構成される佐賀農業高等学校。動植物の生命を育み、人と人との触れ合いを大切にする教育を特色とする学校だ。各学科では、国内や地域の農業に関する学びはもちろん、オランダやオーストラリア、韓国などの畜産農家や野菜農家などを視察して研修を受けたり、現地の高校生や大学生との交流を深めたりと、学びの場は海外にも広がっている。

取材に訪れたのは、環境工学科1年生の「コミュニケーション英語Ⅰ」の授業だった。各学科には40名ほどの生徒が在籍するが、そのうちSGコースを選択する10名前後の生徒だけ、英語の授業は別クラスで受けている。この日の授業は、Lesson7「Living on Ice」（東京書籍『All Abroad! English CommunicationⅠ』）を扱う全6時間のうちの5時間目。絶滅の危機に直面しているコウテイペンギンについての説明文を読み、地球温暖化の影響について考える単元だ。単元の目標は、絶滅の危機にある動物とその理由を考え、どうしたら問題を解決できるのかを調べること、そして、発話力と聞く力を育てることである。

「本校の生徒は、英語でコミュニケーション活動を行うベースとなる学力があまり高くなく、教科書を題材に話し合うにも、自分の考えを表現する語彙力が少ないのが実情です。英語への苦手意識を持つ生徒もいます。そのため、入学時には中学校の復習から始めるようにしています。しかし、SG選択生たちは海外への関心が高く、学習への目的意識を持って授業に臨んでいます。それだけに、のびしろがあるはずです」と谷口先生は話す。教科書で扱う題材は地球視野で考える内容が多い。そこで、「インプットしたことをアウトプットにつなげる技能統合型の言語活動を多く取り入れ、題材を自分に身近な話題として引き寄せて考え、話すことができるようにしたい」と考える。

授業中、できる限りシンプルな英語で生徒たちに指示を出し、活動を促すことを心掛ける谷口先生。生徒が自らの言葉で自発的に伝えようとする気持ちを重視し、授業中の発言に対しては正確性を重視せず、間違いを恐れずに話す空気をつくっている。

「私も言い間違えることはあります。ネイティブスピーカーではないので完璧な英語など話すことはできませんし、生徒たちにもそれは求めてはいません。英語は言葉であり、コミュニケーションのための道具なのだとことを生徒たちに理解させ、正解・不正解ではなく、『発言できた』という達成感を味わってほしいとの思いで授業を進めています。たとえ間違えても、その時に何ができなかったのか、自分に何が足りなかったのかに気付けば、自分で調べて発信しようという意欲が芽生えてくるでしょう」

そのためには、まずグループという小さな集団のなかで発表して意見を交換したうえで、全体にシェアするという流れを大切にする。今は拙い英語でも、小さな成功体験を積み重ねながら自信を付け、いずれは、生徒同士でコメントや質疑応答をし合い、自分の考えをしっかりと発信できるようになってほしい、と谷口先生は願う。そして、「農業高校の生徒は、専門的に学んでいるため、話すためのトピックを豊富に持っています。英語で農業について発信し、地域や世界が抱える課題を自ら見つけ、改善策を考え、発信することができるように、授業を通じて思考力・判断力・表現力を伸ばしていくことを目指しています」と力強く語った。

授業の流れ

1

Word Test

あいさつとともに授業が始まり、まずは単語テスト。flesh, easy, alone…と、単語集の決まった範囲から谷口先生が10個の単語を1つずつ読み上げ、生徒たちはテスト用紙にスペルと意味を書き取っていく。テスト

を終えると、生徒同士で用紙を交換して、答え合わせをしてスコアを記入する。その後は、新たに10個の単語を学習。生徒たちは単語集を手に、谷口先生が読み上げるのに続いて2回ずつテンポよく発音した。

谷口先生の
授業の様子は
こちら



『英語情報』専用アプリで動画が見られます。
(アプリの詳細は表紙の裏面へ)

2

Presentation in a group

4、5人で1つのグループを組み、プレゼンテーションを行う。生徒は一人1台のタブレットPCに、各自が作成してきたスライドを表示して、自分の考えを発表する。谷口先生は「発表を聞いたら、他のメンバーはその内容に対してコメントをすること」というルールを示し、活動がスタートした。生徒たちは、用意した英文を読み上げるのではなく、キーワードを頼りに自分の考え

を自分の言葉で伝える。すると他の生徒たちは、発表を聞いて感じたことを述べ、疑問に思ったことについて質問をする。それに対し、発表した生徒は、意見をまとめるにあたり事前に調べてきた内容をもとに英語で答え、意見交換をする。そうして活動している間、谷口先生とALTのAaron先生は各グループを回り、生徒たちの発言に耳を傾け、質問をしたり、生徒が言葉に



『英語情報』専用アプリで動画が見られます。

詰まったときにはヒントを出して言葉が出てくるのを促したりするなど、生徒たちの学びを支えていた。

3

Group Discussion

続いて、グループディスカッションに移る。世界で絶滅の恐れのある動物について、グループで話し合い、共通する問題点を見つけ出すという活動だ。どのような動物が絶滅の危機に瀕しており、なぜそのようなことが起きたのか、それにより、どのような問題が考えられるのか、どのように解決したらよいのか。生徒たちは自分が調べて理解した内容を持ち寄り、話し合いに臨

む。どのグループでも、生徒たちはみな、自分の考えを自分なりに考えて英語で発信しようとする姿勢が見られた。話し合いが停滞したり、言葉が見つからないで発言が止まっているグループには、谷口先生やAaron先生が寄り添い、質問を投げ掛けて生徒の発言を促していた。話し合いが終わると、タブレットPCを再び用いて、各自が発表するための文をまとめる作業に



『英語情報』専用アプリで動画が見られます。

移る。定型文に沿って、空欄に自分の考えを入れることで、論理的な文章の書き方、発表の仕方を身に付けることができる。

4

Share the opinions in the whole class

グループでの話し合いを受けて考えた自分の意見をクラス全体に向けて発表する。テーマはWhat can we do to stop animal extinction? だ。指名された2名の生徒がそれぞれ、電子黒板に自身の文を映しながら発表する。なぜ、多くの動物に絶滅の恐れがあり、私たちはどのような解決策を取ることができるのか。最初にスピーチをし

た生徒は、「絶滅の危機は人間が引き起こしたものであり、捕獲をやめ、動物たちに生きる場を新たにつくればよい」と述べ、次の生徒は「地球温暖化や乱獲によって動物たちが生きる場所を失っているの、植樹をしたり、ゴミを減らしたり、節水をしたりして環境保護をしていくべきだ」と述べた。これらの発表を聞いた生徒たちは、友達の意見に真



『英語情報』専用アプリで動画が見られます。

剣に耳を傾け、拍手でたたえた。Aaron先生は「たくさんの意見が出ましたね」と褒め、温かいまなざしで生徒たちを見守っていた。



生徒にインタビュー

『英語情報』専用アプリで動画が見られます。

英語の授業を受けて感じていることや、英語力を身に付けて将来にどのように役立てていきたいかを聞いた。



CLASS REPORT

学校訪問

中学校編

鳥取県 倉吉市立東中学校

山根 晃治 先生

生徒が自分の考えや気持ちを伝え合う 言語活動中心の授業で話す意欲を引き出す

鳥取県の倉吉市立東中学校では2015年度より、国の教育課程研究指定校として、「生徒が自分の考えや気持ちを英語で伝え合う言語活動を中心とする授業を展開するための指導と評価の研究」に取り組んでいる。教科書本文を題材として、生徒が話そうとする意欲をどのように引き出せばよいのだろうか。山根晃治先生が指導する1年生の授業を訪ね、随所にちりばめられた工夫を見た。

英語を通じて自分の考えを深め人と関わる力を付ける

倉吉市立東中学校では、英語専用の教室で英語の授業を行う。教室には、会話をつなぐための表現が掲示され、授業が始まる前から黒板には、「まずは、あいさつ!」「相づちをうつ!」「聞き返す!」「関連した質問!」「さらにもう一言!」「言ったことの確認!」という、会話をするときの手順が示されている。山根先生は授業が始まる前の教室に洋楽を流し、英語に親しみやすい空気をつくり、生徒たちに「元気?」「宿題やってきた?」などと英語で話し掛ける。授業での先生の発話や指示は英語で、生徒たちから日本語が出ると、「In English please!」と返し、「この教室は日本ではなく外国。だから、英語で話そう」と、英語で呼び掛ける。入学して1年に満たないながらも、英語で友達とやり取りすることを楽しんでいる生徒たちの様子が見て取れた。

英語教室ではペアワーク主体の授業を展開しやすいように、英語を得意とするペアリーダーと、あまり得意ではないパートナーという組み合わせで着席する。ペアリーダーは授業中、パートナーの学びを助け、活動をリードする。パートナーの生徒は、全体の前や先生には質問しづらいことも、ペアリーダーには安心して質問することができる。お互いに助け合いながら学ぶ場づくりの工夫だ。

生徒が話すには、自ら話したいと思えるテーマ設定が重要だ。「中学1年生に世界情勢などの話題は難しく、話しづらいかもしれません。しかし、My favoriteは身近な話題で話しやすいはず。最近米国大統領選の話題に生徒たちも興味が高く、Who is your favorite star?の問いから派生して、トランプ氏とクリントン氏に話題が及びました。身近な話題から生徒の興味に応じて内容を深めていくことはできるのです」と話す山根先生。「会話方略を教えるだけで、生徒は会話をふくらませ、長く話せるようになります。会話が止まっても、その“困り感”が大事なのです」と述べた。教室には会話で使うフレーズが掲示され、教室を見渡せば発話のヒントを得られる。さらに山根先生が生徒の言いたいことを聞き出し、生徒自身の口から言葉が出るように促していく。そして「先生だって間違える。先生もネイティブスピーカーではないから」と、生徒たちに安心感を与えていた。

この日のメインであるスキットを作る活動は、中学1年生が教科書の題材をもとに行う言語活動としては取り組みやすい。生徒たちは、すでに何度も自宅で教科書を音読して暗唱してから授業に臨んでいる。そして、どのようなセリフを追加すれば、会話がふくらむのかをペアで話し合い、登場人物になりきって発言する。その際に、授業で活動しっぱなしでは終わらせないことを大切にしている。生徒には必ずその日のうちに活動した内容を「自学ノート」に記録し、提出させるのだ。だが、それは宿題ではなく、あくまで自己学習として位置付けている。提出すれば褒められる。生徒は“やらされている”のではなく“自らやっている”という意識で学習に臨む、という良いサイクルができている。

山根先生は、中高時代は英語が苦手で、大学生で初めて海外に出て、英語でのコミュニケーションの面白さを実感して以来、英語に目覚め、これまでに40カ国以上も訪れた経験の持ち主だ。だからこそ、「生徒たちには英語を通じて人とつながる楽しさを伝えたい。授業はあくまで生徒が言語活動を行う場。生徒がいろいろな人の意見を聞いて、自分の考えを深め、人と関わる力を身に付ける場にしたい」と授業づくりに邁進している。

授業の流れ

1 Warm Up

授業前、山根先生は洋楽のポップソングを流し、英語で話す空間づくりをする。チャイムが鳴り、日付や天気などを生徒全員が大きな声で言って、授業開始。山根先生はFridayのf、Novemberのvやerなどを丁寧に発音し、生徒たちが正しく発音できるまで何度も繰り返し言わせる。そして、ペアでのQ&A活動が始まった。Where is ...?

やWhen do you ...?などのQ&Aが書かれたシートを見ながらペアでやり取りする。続くフリートークのテーマは、「My favorite things」だ。生徒たちは笑顔で、相手の言葉に反応して50秒間会話をつなげることを目標に活動した。そして1組のペアが発表し、黒板に掲示されている会議の手順に従って、それらができていたか全員で意見

山根先生の
授業の様子は
こちら『英語情報』専用アプリで動画が見られます。
(アプリの詳細は表紙の裏面へ)

を出し合いながら、友達のがんばりをたたえていた。

2 BINGO ～新出単語の復習

生徒たちは事前に指定された範囲の40個の単語の中から5×5のマス目に単語を書き入れている。山根先生が一番上の列(B Line)から下の列(O Line)まで、1つずつ順に単語を読み上げる。その単語が書いてあれば赤丸で囲み、縦横斜めのどれか1列揃ったら「BINGO!」と言って立ち上

がるルールだ。単語を正しく書き、発音を聞き、楽しみながら覚えることができる活動だ。続いては、フラッシュカードを使い、前時に学んだ新出単語の復習をする。下線が引いてある発音に注意しながら先生に続いて発音し、例文とともに意味を確認する。その後、日本語を見ながら英語を発



『英語情報』専用アプリで動画が見られます。

音し、テンポよく単語の復習を終えた。

3 音読

教科書のProgram7「The Wonderful Ocean」の単元(全6時間)の最終時となるこの日は、前時に続いてPart3本文の学習。本時のゴールで示された「セリフを追加してペアでスキットができる」に到達できるよう、さまざまなバリエーションで音読をする。スクリーンには教科書に掲載されているイルカや海の写真が4点映し出された。写真にはそれぞれ、本文の文頭の一文

が吹き出しで添えられている。まず、山根先生に続いて、生徒たちが一斉に音読する。続いて、教科書を見ずにスクリーンの画像を見ながら、先生に続いて生徒たちが音読した。さらに、教科書を黙読し、顔を上げて何も見ずに読むRead and Look upに取り組む。そして、各自に配布されているピックチャーシートを見ながら、何も見ずに暗唱した。音読をしている間、山根先生は笑顔で



『英語情報』専用アプリで動画が見られます。

生徒たちを見守り、つまづいた時には次の文が口について出てくるように、ヒントとなる単語を告げて発話を促していた。

4 スキット

本文を暗唱できるようになったら、本時のメインの活動となるペアでのスキットに移る。文脈に合うように、ペアで協力し合い、セリフを1つずつ追加することが指示された。本文はYUKIとMIKEの2人の生徒、海洋生物調査員の笹森さんの会話文だが、ペアでスキットをする際には、生徒役(YUKIとMIKEの2役)と笹森さん役に分かれ、生

徒役は質問文を、笹森さん役にはその答えとなる文を追加することが決められている。生徒たちは教科書は見ずに暗唱し、ピックチャーシートを使って、役になりきって会話をしたが、どのようなセリフを追加すればよいかわ、それぞれのペアで話し合いながら、セリフを追加して練習して、発表に備えた。最後に2組のペアが発表し、山根先生は発音



『英語情報』専用アプリで動画が見られます。

やアイコンタクト、独創性があるかといった評価基準に沿って評価していた。



生徒にインタビュー

『英語情報』専用アプリで動画が見られます。

英語の授業を受けて感じていることや、英語を使って将来どのようなことをしたいかについて聞いた。



CLASS REPORT

学校訪問

小学校編

山梨県 韮崎市立韮崎北東小学校
矢巻 利之 先生

自分の気持ちを表現し、 褒め合うことで意欲が高まる

山梨県は文部科学省の「英語教育強化地域拠点事業」を受け、県内5つの地域でそれぞれ小・中・高が連携し、教育課程の研究開発に取り組んでいる。韮崎市立韮崎北東小学校は、市内の小・中・高等学校とともに、3、4年生の外国語活動の在り方について、そして5、6年生の英語科における中学校との接続を視野に入れた学習内容や指導方法、評価方法などを研究している。研究副主任（英語担当）を務める5年生担任の矢巻利之先生による英語科の授業を取材した。

自らが英語を楽しみ、一生懸命話そうとする姿を見せる

「英語を使って活動することで、子供たちの表現力を高めることができるのが、外国語活動や英語科の面白さ」であると感じている矢巻先生。今年度、文部科学省の英語教育推進リーダー中央研修で受けた研修内容を校内や地域の先生方に伝達すべく、日々、自身の授業で実践を積み重ねている。韮崎北東小学校では、1、2年生が年間10時間ほど、3、4年生は外国語活動として週1時間、年間35時間、英語に触れる機会を持ち、5、6年生は英語科として週2時間、年間70時間の授業がある。「英語教育強化地域拠点事業」によって、市内の中学校の英語科教員が英語指導員として授業に入り、中学校への円滑な接続のため、5、6年生にはフォニックスを取り入れた文字指導を行っている。

矢巻先生の授業を訪ねると、教室は温かい空気に包まれていた。優しい笑顔で児童たちに英語で話し掛け、児童たちも笑顔で英語を使った活動を楽しんでいる。「英語はあまり得意ではなかった」という矢巻先生だが、「自分がまず楽しみ、一生懸命に英語を使う姿を見せることで、子供たちが『自分も英語を話してみよう』と思える授業をつくりたい」と考えている。そして、いつも笑顔で接し、児童たちを褒めることを大切にしているという。

英語科では、外国語活動で慣れ親しんだ「聞く・話す」に加え、文字を「読む・書く」ことが求められる。だが、文字が入ることで児童が難しさを感じることがないように、矢巻先生は、フォニックスをはじめ、歌や絵本、フラッシュカードなどで文字に親しみ、児童が自ら読んでみようと思う気持ちを育み、クイズ形式のゲームに取り組みながら文字を書くなどして、楽しみながら文字と触れ合うことを重視する。校内には、児童が学校生活の中で自然と英語に親しめるよう、階段を一段一段上りながら、英語の単語が覚えられるような絵カードを貼っているほか、廊下や図書室前などに、シルエットクイズやアルファベットクイズなどを用意して、児童が遊びながら文字に親しめるような工夫も凝らしている。

クラスには、英語を積極的に話そうとする児童もいれば、消極的でなかなか発言できない児童もいる。言いたいことがあっても、ふさわしい言葉が見つからない児童もいる。児童が活動している間、矢巻先生はクラス全体を見回し、活動に参加できずにいたり、言葉が出ないでいたりする児童に寄り添い、自分の気持ちを表現できるように発言をそっと促す。そして、一言でも発言できたら、そのがんばりを褒める。それが児童たちの自信につながり、「次もがんばろう」という意欲を高めている。

矢巻先生は「子供たちには、英語で会話をする時に決まりきった型にはまらないでほしいと思います。相手の答えに対して、聞き返すようにリアクションを取ることで、思考を促し、自分の気持ちを表現できる力も付けさせたいですね。良いコミュニケーターとはどういう人なのかを、自ら体験しながら理解し、自身がそのような人になってほしいと思います。外国語活動や英語科での学習を通じて、子供たちが相手のことをより深く知り、思いやりの心が育まれているのを日々感じています。相手の良いところを認め合い、考えを伝え合うことができる児童を育てていきたい」と語った。



研究副主任（英語担当）の矢巻 利之先生

授業の流れ

1 Let's Write

授業冒頭で矢巻先生は日付表現を確認し、NovemberとOctoberという月名の違いや、31日はthirty oneではなくthirty firstであると注意を促した。続いて、「Who am I?クイズ」だ。「I can play baseball, but I can't play kendama.」「I can't ride the unicycle and I can't cook,

but I can play badminton very well.」などのヒントから、児童たちは自分で推測した名前をワークシートに英語で書き入れた。「What's your name?」と問う児童たちに、「My name is Toshiyuki Yamaki.」と矢巻先生。正解して喜ぶ児童たちの笑顔が輝いた。

矢巻先生の授業の様子は
こちら



『英語情報』専用アプリで動画が見られます。
(アプリの詳細は表紙の裏面へ)

2 Let's Sing ～ Let's Play

この日のゴール「都道府県の天気についてたずねよう」が示された。前時に習った天気の状態を復習するため、まず、「How is the weather today?」の歌を、全員で繰り返し歌いながら、sunnyやrainyなどの天気の状態と、hotやcoldなどの感情の表現を歌って確認した。さらに、黒板に掲示した天気のイラストカードを使って、「rainy, rainy,

cha-cha-cha」のように、チャンツとジェスチャーで定着させる。続くLet's Playは、4、5人一組のグループでのミッシングゲームだ。天気のカードが各グループに配られると、1人の児童の「Close your eyes.」の声で他の児童たちが目を閉じ、その間に1枚のカードが隠される。「Open your eyes. What's missing?」の問い掛けで目を開け



『英語情報』専用アプリで動画が見られます。

た児童たちは、どのカードがなくなっているのかを英語で答え合っていた。

3 Activity ～ Let's Listen

「How is the weather in (), today?」「It's ...」のフレーズを使って、矢巻先生と児童がデモンストレーションをする。あいさつした後、これらのフレーズを使って天気を尋ねて答えるというActivityだ。そして、日本地図に各地の天気が記されたワークシートを使い、ペアで天気を聞き合う。ワークシートは緑色と黄色の2種類があり、空欄の地域が違う。空欄の天気を尋

ね合い、ワークシートに書き取るインフォメーションギャップを使った活動だ。big voice, eye contact, reaction, gestureを意識しながら、児童たちは色の違うワークシートを持つ友達を探し、笑顔で会話を楽しんだ。その後は、天気についてのpicture bookをスクリーンに映し出して読み聞かせた。「What's the weather like?」のフレーズを一緒に言わせたり、



『英語情報』専用アプリで動画が見られます。

「What will happen?」と問い掛けたりしながら、矢巻先生が読み進めると、児童たちは物語の世界へ引き込まれていった。

4 振り返り

この日の活動を振り返りカードに記入する。「①ミッシングゲームで、英語を用いて表現することができた」「②絵本を聞き、内容を理解することができた」という2つの項目について、できたかどうかを◎や○などでチェックする。そして、「友達と天気について会話をしたかったこと」について自

由記述した。各自が1時間の活動を振り返り、集中してカードに書き込んでいく。先ほどまで、元気な声が響き渡っていたのとは打って変わり、しんと静まり返る教室。児童たちは丁寧に自分の考えや気持ちを書き込みながら、次の時間への意欲を高め、授業は終了した。



『英語情報』専用アプリで動画が見られます。



児童にインタビュー

『英語情報』専用アプリで動画が見られます。

英語科の授業を受けて感じていることや、英語を使ってどのようなことがしたいかを聞きました。



YUKIの
使える

〔連載〕第4回（最終回）

CLASSROOM ENGLISH!!!

皆さんは日々の英語の授業で、生徒を褒めていますか。生徒を褒めることによって、生徒の英語学習へのモチベーションや自信を高めることができます。

今回は、英語の授業で使われている褒め言葉や表現を5つの分野で紹介します。

これで褒め言葉のレパートリーを増やしましょう！

生徒を褒めるときは笑顔も忘れずに！ A smile is worth a thousand words!

大木 優喜子（おおき・ゆきこ）

ハワイ東海インターナショナルカレッジ准教授。東京生まれ、アメリカ・カリフォルニア州ロサンゼルス育ちのサード・カルチャーキッド（Third Culture Kid）[※]。ハワイ州ハワイパシフィック大学にてTESOL（Teaching English as a Second Language）英語教育学修士号を首席で取得した。研究範囲はFlipped Classroom Model, Student Motivation in ESL Classrooms等。

※母国で生まれるが幼児期や思春期を外国で過ごし、母国と外国の二つの文化を総合した三つ目の文化を自身のアイデンティティとして構築した人。



★ “Good.”（良い）の他にも使える一言褒め言葉（Goodの類義語集）

Very good! とても良い!	Terrific! 大変良い!	Fantastic! 素晴らしい!	Well done! よくできました!
Great! とても良い!	Wonderful! 素晴らしい!	Excellent! 優秀!	Close! 惜しい!
Awesome! とても良い!	Superb! 素晴らしい!	Perfect! 完璧!	Wow! わあ、すごい!

★ “Good job!”（よくできました）の他にも使える表現

Much better! 前より大変良くなりました。	Keep up the good work! その調子でがんばってください。
(That's a) Great idea! （それは）とても良いアイデアですね。	I know you can do it! あなたならできます。
Great teamwork! とても良いチームワークです。	That's an interesting point! （それは）面白い点ですね。
Good try! 良い試みです。（生徒の答えが間違っていた時に使う）	Great effort! 大変良い努力です。
(That's a) Good guess! （それは）良い推測です。	(That's a) Good[Great] point! （それは）良い/大変良い点ですね。

★ 生徒の具体的な態度、能力を褒める表現

生徒一人一人を褒める時には、具体的に何（態度、テスト、レポート等）が良かったのかを示す（表現の中または表現の後）と効果的です。

You make [made] lots of effort to speak English in class! あなたは授業で英語を話す努力をしています/しました。

Your writing skills have improved so much! あなたのライティング能力はとても進歩しました。

I'm impressed by your speaking skills! 私はあなたのスピーキング能力に感心しました。

★ その他の生徒一人一人を褒める表現

You work very hard! あなたはとても一生懸命勉強しています。

You worked very hard in class today! あなたは今日の授業でとても一生懸命勉強しました。

I love having you in my class! あなたが私のクラスの生徒でうれしいです。

★ クラス全体を褒める時の表現

クラス全体を褒めることによって、生徒の間にチームワーク・統一性が生まれます。

Thank you for sharing your ideas! みんなのアイデアを話してくれてありがとう。

Everyone worked very hard today! 今日はみんなとてもがんばりました。

〔連載〕

安河内哲也先生が聞く

英語で授業



明日から
使える!

【第10回】

7つの鉄則

宮崎県立日南振徳高等学校
富高 雅代 先生

英語への苦手意識を持つ生徒が、意欲的に話そうとする授業づくりの工夫

1588（天正16）年から明治初期まで、
飢肥藩・伊東氏5万1千石の城下町として栄えた宮崎県日南市の飢肥地区。
その町並みには歴史情緒があふれ、武家屋敷を象徴する門構え、
風情ある石垣、漆喰塀が今なお残ります。

そのような地区に校舎を構える宮崎県立日南振徳高等学校で、
英語が苦手な生徒を英語好きな生徒へと変えていく富高雅代先生を訪ね、
7つの鉄則を伺いました。

富高 雅代（とみたか・まさよ）

日南振徳高等学校勤務2年目。2003年より6年間、カナダ・オンタリオ州立ブロック大学附属ESLの語学講師として、約35カ国の学生に第二言語としての英語を教える。日本人の英語力向上のために帰国し、第二言語習得論や教授法を大切にしながら授業を行う。日南振徳高等学校では、地域と関わりを持ちながらの体験型の英語の授業を展開し、その取り組みの1つは第192回臨時国会の安倍晋三首相による所信表明演説で取り上げられた。

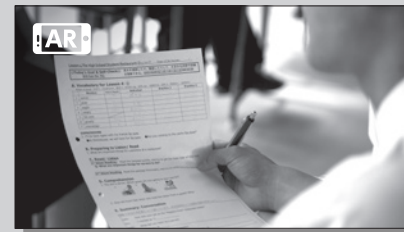
本日の授業

「コミュニケーション英語Ⅱ」経営情報科 2年

使用教科書：COMET English Communication II（数研出版）／単元名：Lesson 4 The High School Student Restaurant



1. 導入



2. 展開①



3. 展開②～まとめ

この単元では、高校生が運営するレストランで働く生徒Kumiの日記を通して、「働くこと」について考える。そして、友達同士で意見を交換し合うことができるようになることを目標とする。また、自分の職業観について、パラグラフを書き、最終時にはパフォーマンステストとしてプレゼンテーションを行う。

この日の授業は全5時間のうちの2時間目。冒頭のSmall Talkでは、ペアで“Which place in Nichinan or Kushima would you like to take tourists to?”“Why?”と質問し合い、1分間自由に会話をした。答えやすい身近なトピックであり、生徒たちは笑顔で楽しみながら、自分の考えを伝え合っていた。続く語彙学習では、7つの語彙の発音と意味、品詞を紹介。生徒たちはフラッシュカードを見ながら、初めは

IPA（発音記号）で読み、スペルと意味を確認した。富高先生は、意味が分かりにくい単語はジェスチャーを交えて紹介した。

“What are important things for customers at a restaurant?”本文の内容理解に入る前に、富高先生はそう投げ掛けた。ペアで考えを伝え合いながら、本文の内容を推測する生徒たち。その後、30秒間黙読して大意をつかみ、「接客係はどんなことに気をつけるべきか」の問いに合う答えにあたる箇所に下線を引いた。その後、スクリーンに表示された本文を全員で読み進めながら富高先生が下線を3箇所引いた。さらに“When are you going to pour tea for me?”と問い、レストランの客がお茶を飲む姿を演技しながら、「自分が給仕なら、いつお茶を注ぐべきか」を生徒たちに考えさせた。

内容を理解した後は、4人一組で10分間のグループディスカッションに取り組んだ。テーマは「将来の仕事」についてだ。Keep talking and English Onlyというルールが示され、生徒たちは伝えたい内容を、自分の言葉で表現する。言葉が出ない時には他のメンバーが教えて助け合っていた。また、メンバーが“I see.”と相づちを打ち、認め合う様子も見て取れた。

その後は、セルフ評価とピア評価。富高先生は「なぜ、自分の評価と友達の評価が違うのか」を考えさせ、みんなで助け合いながら意見交換できたことを褒めた。さらに、「振徳Can-Do Statement」に対して、各自で5段階評価をした。最後に、「学習カレンダー」に、この日学んだことを記録し、授業は終了した。

富高先生の
授業の様子は
こちら

鉄則その1

3Rs : Respect, Readiness, Responsibility

これは、私がカナダのESLで教えていた時から実践している3つのルールです。ESLには各国から学生が集まるため、「それぞれの文化や宗教も含めて、お互いを認め合おう」とRespectを第一に考えました。本校の生徒たちにも、「多様性を認め、尊敬の念を払って授業を受けよう」と示しています。Readiness

は、授業の準備をしっかりとくること。発話をするためには、発話の回数を増やし、間違いを恐れず伝え合うことが大事です。そして、伝えるには語るべき内容を準備し、人間として教養を磨くことが大切だと教えています。Responsibilityは、自分の学習に責任を持つこと。卒業後、社会へ出ていく生徒たちに、将来の

ために今、何をすべきかを意識して学ぶようにと指導しています。



鉄則その2

4 skills : 4技能を使用させる

本校の定期テストは4技能+文法で100点としています。授業では4技能全てを1時間で扱うことが難しいこともあるので、スピーキングに特化したり、リーディングやライティングを高めたりすることもあります。ただし、必ず1つの単元で4技能を高められるようにしています。年5回のテストでもパフォーマ

ンステストを行います。生徒同士のインタビュー、英検の二次試験のような教員と生徒のインタビュー、プレゼンテーション、show&tell、生徒同士の会話といった形式で、1、2時間準備をさせたうえで授業時間内に実施しています。スモールパフォーマンステストも、授業2時間に一度ほど入れ、その結果を平常

点の4割のうちの半分に充てています。その科目を担当する教員は同じ形式を取って評価をしています。



鉄則その3

小さな成功体験を積み重ねる

生徒たちは、英語で自分の考えを伝え合う活動を通して、自分が話したことが相手に伝わったかどうかを、話しながら肌で感じるものです。そこで、たとえ間違えてもいいので、自分の言葉で話してみ、「伝わった(伝わらなかった)」という体験をする機会を、授業はもちろん校外活動などでも、できる限り増やして

あげたいと思っています。実は本校の生徒は、中学時代に英語に対してあまりポジティブではなく、割と苦手意識を持っている場合が少なくありません。だからこそ、そのような生徒たちが、授業を通じて、英語をコミュニケーションツールとして使い、積極的に相手とコミュニケーションを取ろうとするポジティブな姿勢

へと変化して、自信をつけていってほしいと願っています。



鉄則その4

本物の英語と本物の教材を使う

例えば、1年生の「コミュニケーション英語I」では、道案内を学習する単元があります。そこで、本校が位置する日南市飢肥地区の「飢肥城下町 食べあるき・町あるき 散策マップ」を題材として、生徒たちにマップに掲載されているお店の方向けに、外国人観光客への商品説明や道案内のための会話集を作らせました。

そして、それを城下町保存会にお渡ししてご活用いただき、生徒たちには定期テストのパフォーマンステストの内容としました。ほかにも、単元の内容にちなんだ動画やアメリカのニュースを題材に使うなど、本物の英語に触れさせる機会を増やしています。例えば、高校生の生活という単元では、カナダに留学中の学生

にアンケートを取り、その回答をもとに、生徒同士で話し合う活動もしました。



鉄則その5

教室から外へ目を向ける

本校の生徒には、地域のリーダーたる存在であってほしいと願っています。そこで、英語の授業では「日南振興プロジェクト」と題して、地域との関わりを持って学んでいます。このプロジェクトでは、外国からのクルーズ船が市内の油津港に寄港した際に、生徒が外国人観光客に英語で案内したりアン

ケートを取ったりしたことを踏まえ、日南市がとるべき改善策を市長に提案しました。この活動は、第192回臨時国会での安倍晋三首相の所信表明演説で、観光立国の在り方に関して、「地元の高校生たちが英語での観光案内を買って出て、地域が活性化している」と言及されました。生徒たちは、活動を

通じて英語の重要性を認識し、英語習得のモチベーションを高めながら授業に臨んでいます。



鉄則その6

メタ認知能力を育成する

本校では、卒業後に英語を必要としない生徒もありますが、工業系のように再び英語が必要になる生徒もいます。将来、高校で身に付けた、スキャン・スキム・インファー・ノートテイキング・話し方などといったスキルを使って、英語と向き合うことのできる力を育てていきたいと思っています。本校の生徒には1カ月ごとの

学習カレンダーを持たせていますが、これには毎月、英語の授業で何を学ぶかとCan-Doの目標が書かれています。限られた授業時間であっても、その中で毎時間何を学んだかを振り返るとともに、自分の学習に責任を持つという意味を含めて、学習記録を取らせています。日々の記録を綴ることは、社会人としても必

要なスキルですので、高校生の段階から日課のように取り組ませています。



鉄則その7

同僚とのチームワークを重視する

私は2015年度に本校へ赴任しました。赴任当初から、英語科教員たちとは「チーム振徳」「チーム英語科」という意識を持つように声を掛け、チームとしての一体感を持てるようにしてきました。そのためには、日頃から、教員同士が会話することが大事です。雑談も含めてですが、「こういう時はどうしたら

いい?」と、構えずに悩みを打ち明けられる関係性を築くことができるように環境を整えています。2年が経とうとしていますが、英語科では「チーム振徳」としての意識共有ができていていると思います。なお、学年の教員同士で連携し、学年で同じワークシートを共有して使うようにしています。一度作った教材は、次の学年

の先生にもデータを渡し、より良いものへと改善していくようにしています。



将来どの地で生活しても地域と関わり、地域貢献する気持ちを育てたい

安河内 富高先生はカナダでのインストラクター経験をお持ちなのですね。

富高 若い頃自分の理想の英語教育をするための勉強がしくて、オンタリオ州立ブロック大学人文学部応用言語学科で、第二言語習得論や教授法を学びました。その後附属のESLでインストラクターとして、世界から集まる学生たちに第二言語としての英語を6年間教えてきました。

安河内 何カ国の学生を教えましたか。

富高 約35カ国です。サウジアラビアや中国、韓国、南米の学生が多かったですね。

安河内 ESLでは、ネイティブ・スピーカーよりも、ノンネイティブ・スピーカーの方が、第二言語としての英語を教えるやすいということがありましたか。

富高 文法指導ができるのは、ノンネイティブとしての強みでした。そして、日本人の英語力を高めたいと、帰国しました。

安河内 日南振徳高等学校ではどのような教育をしていますか。

富高 本校の生徒は卒業してすぐに就職しますが、働き始めると英語が必要になることが多いようです。英語の時間は2～4時間。いかに4技能をバランスよく身に付けさせるか、社会との関わりを持って学ばせるかを考えています。そして、入学時点では英語への苦手意識が強くても、できるだけ生徒に英語で活動させていますので、「英語を使うことが楽しい」と思うようになっていくようです。

安河内 授業時数が少ない方が、むしろ英語の授業を楽しみに待つようになるのかもしれないですね。

富高 私は、「生徒が在学中に地元と関わり、将来どの地で生活しても地域と関わり、地域貢献する気持ちを英語の授業を通して育てたい」と考えています。そのためにも、地域交流的な内容を取り入れた授業を展開しています。それが「日南振興プロジェクト」です。

安河内 どのようなプロジェクトですか。

富高 鉄則でも紹介しましたが、1つは「あゆみちゃんマップ 英語会話集」の作成です。生徒各自が担当の店に取材

して作り、その会話を、定期テストのパフォーマンステストとして実施しました。

もう1つは、クルーズ船が寄港した際に、外国人観光客に町を案内し、「Have a question? Ask me.」などのカードを首から提げて活動しました。事前準備として、自分のおもてなしについて目標を立て、観光案内で必要になる単語や表現を学びました。

安河内 実際に外に出て英語を使う体験ですね。いかがでしたか。

富高 「観光客の英語が速くて分からない」「飢肥の町や歴史的建造物について尋ねられても、知識不足で答えられない」といった、「悔しい」体験もありました。一方で、フレンドリーな観光客に助けられ、観光客の母国や町のこと、英語の単語や発音まで教えてもらったり、一緒に写真を撮ったりと、みんな笑顔で楽しい時間を過ごすこともできました。これらの活動で地域に活気が生まれたとの評価もいただき、生徒の自己肯定感や有用感が高まっています。そして、文化祭で展示発表をしたり、生徒の代表が宮崎県高等学校英語プレゼンテーションコンテストで発表したり、国際ボランティア弁論大会に出場したりする機会も広がりました。

安河内 貴重な体験をしましたね。

富高 生徒たちは英語の重要性を認識し、英語習得のモチベーションを高めながら、英語の授業に臨んでいます。“Think Globally, Act Locally”の精神を持つ社会人として、地域や世界に貢献できる人になってほしいと願っています。

安河内 まさに、活動型授業ですね。これからは英語教育も4技能、大学入試も4技能になっていきますから、そのような授業が主流になっていくといいですね。それには、大学入試が変わらなければなりません。そのために私も、国の会議で4技能の大切さを発信し、予備校で行う授業も活動型に変えました。

富高 先生のモチベーションはどこから来るのですか。

安河内 2020年は千載一偶のチャンスです。日本の高校生の英語力を引き上げ

ていくには、英語教育と大学入試を変えなければなりません。

富高 国公立大学の二次試験のライティング問題を分析したところ、一番多かったのはオピニオンエッセイで、次にディスクリプティブエッセイでした。だからこそ、早くから英語を書かせる活動を取り入れていくべきだと思います。聞いて読んで書き、同時に即興的に話すことを早くから積み重ねていけば、二次試験に合格する力は付くはずですよ。和訳についても、きれいな和訳をするのは高度なスキルですが、誰もが必要なスキルではありませんよね。

安河内 高度情報化時代の今、私たちに求められるのは、英語を英語のまま処理して発信できる力です。そうした力を付ける授業をしていくべきなのです。

富高 カナダで「なぜ英語を学ぶのか」と学生たちに問いかけると、中国の学生は「アメリカに経済で勝つためには、英語を学ぶしかないから」と答えました。でも、日本の学生は議論の輪の中に入れないのです。「このままでは日本は取り残されてしまう。英語で発信できる力を育てなければ」と思いましたね。

安河内 日本の英語教育は変わらなければなりません。でも、見ていてください。必ず変わりますから。

富高 みんなでがんばっていかねばなりませんね。

安河内 現場の先生方も声を上げていってください。オールジャパンで変えていきましょう。



interviewer

安河内 哲也 (やすこうち・てつや)

一般財団法人実用英語推進機構代表理事、東進ハイスクール、東進ビジネススクール英語講師。文部科学省「英語教育の在り方に関する有識者会議」委員を務める。英語学習の楽しさを世に広めるべく、テレビ番組などでも大活躍中。英検1級など英語関連の多数の資格を持つことでも知られる。

英検二次試験の品質向上のため 英検協会とEnglishCentralが英検面接委員向けの 「英語力向上プログラム」を共同開発

公益財団法人 日本英語検定協会は、実用英語技能検定（英検）の面接委員の英語力と発音力の向上を目的とした英語学習プログラム「EnglishCentral for Eiken Examiners」を、株式会社EnglishCentralと共同開発いたしました。

急増する二次試験受験者に対し
試験の品質を保つために

大学入試における外部の資格・検定試験の活用が広がるなか、英検の志願者数も年々増加しています。2016年度第1回検定では、高校生を中心に、特に4技能試験である2級以上の志願者数が大きな伸びを見せ、合格率も上がってきました。こうして、一次試験の合格率が高まったことに伴い、二次試験受験者が増加し、二次試験における面接委員の人員を確保し、試験の品質を保ち、面接委員のスキルを向上させることが求められています。そこで、面接委員の英語力と発音力を強化するプログラムを開発することに至りました。

いつでもどこでも利用できるプログラムで
面接委員のスキルを効率的に向上

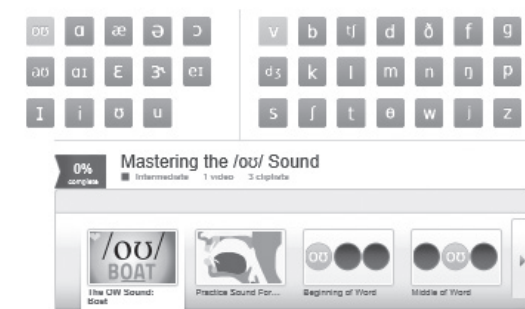
このたび開発した面接委員向けの学習プログラム「EnglishCentral for Eiken Examiners」は、パソコン・スマートフォンに対応しており、いつでもどこでも利用することができます。このプログラムでは、10,000を超えるグローバルなジャンルの動画から、英検二次試験で多く取り上げられるテーマの動画を厳選し、利用者はその動画から発音練習をすることができます。また、オリジナルで開発した英検模擬試験も含まれているため、二次試験の形式に即した練習もできるほか、オンラインで、音声認識技術による発音のリアルタイム診断（6段階の成績評価）を受けることが可能です。



〈例：動画によるリアルタイム診断〉



〈例：英検模擬面接での練習〉



〈例：発音記号単位で弱点を把握〉

本プログラムは当面、新たに登録された面接委員へ優先的に提供し、すでにご活躍いただいている面接委員にも、徐々に提供していく予定です。

EnglishCentralについて

EnglishCentralは、動画を活用した英語学習体験と最新の音声認識を組み合わせたサービスで、世界中で200万人のユーザー数を獲得し、第12回日本e-learning大賞において「総務大臣賞」を受賞するなど高い評価を得ている総合英語学習サービスです。学習者自身が気づきづらい発音の違いを、会話の中の発音・文節の区切り・聞き取りの可否などに分けて視覚的に理解できるよう設計されています。

現在全国200校の大学で使用されており、中学校や高等学校での教材としても利用されています。

EnglishCentral お問い合わせ先：

<http://ja.englishcentral.com/support>

大学入試は今後どのように変わり 英語教育には何が求められるのか

文部科学省は2016年8月31日、高大接続改革の進捗状況を発表した。「大学入学希望者学力評価テスト（仮称・以下、新テスト）」については、英語の4技能を評価する外部の資格・検定試験を活用する方針も明らかになった。今後の大学入試の方向性と、それに伴う高等学校や大学での英語教育のあり方について、文部科学省初等中等教育局の向後秀明教科調査官と千葉県立長生高等学校の百瀬美帆先生を迎え、上智大学・言語教育研究センター長の吉田研作特別招聘教授と語り合っていた。

（敬称略・聞き手は編集部）

なぜ、大学入試の4技能化が必要なのか

文部科学省は、2020年度からの新しい大学入試について、どのような方向性を示していますか。

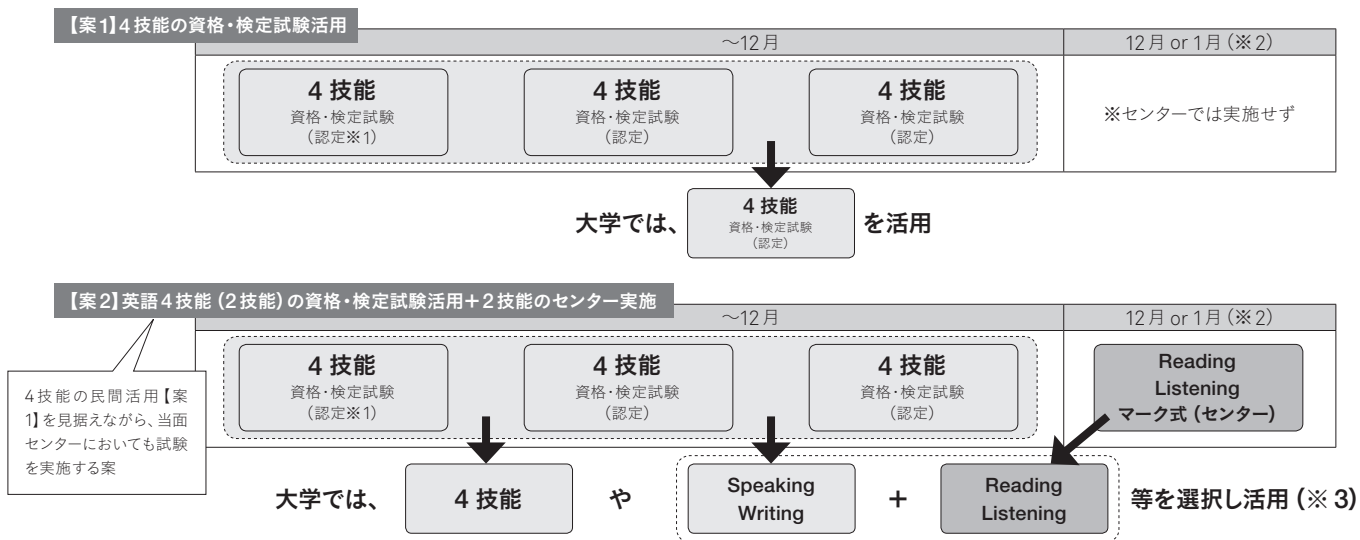
向後 現行の学習指導要領では4技能の指導をうたいながらも、大学入試は全体的にまだ読むことが中心で、聞くことが少し含まれる程度にすぎません。高等学校での指導と大学入試がうまく接続できていないという課題があ

るのです。また、グローバル化に対応すべく外国語による総合的なコミュニケーション能力の向上が求められていますから、大学入試においても英語試験の4技能化を進めることが必要であると考えられるようになりました。そこで新テストでは、「将来的には、外部の資格・検定試験の活用のみで英語の4技能を評価する」ということを目指します。その前段階として、当面は現行の大学入試センター試験の方式で、読むことと聞くことの2技能を実施し、書くこ

と話すことの2技能は、外部の資格・検定試験を組み合わせることを評価することを検討しています。ただし先生方には、大学入試の表面的な変化にだけ目を向けるのではなく、日本の英語教育がグローバル化する必要があることをご理解いただけたらと思います。例えば現行のセンター試験で高得点を取れたとしても、世界的にはそれがどの程度の英語力を示すものなのか曖昧であることは否定できません。評価も世界標準であることが必要なのです。

「大学入学希望者学力テスト（仮称）」の英語4技能評価の実施形態について（たたき台）

文部科学省「高大接続改革の進捗状況」（2016年8月）より



※1 認定基準に応じて、①既存の資格・検定試験のカスタマイズ、②新規の資格・検定試験の導入もありうる。 ※2 センターが実施する時期については、12月と1月の双方が考えられる。
※3 大学においては、いずれか（又はその組み合わせ）の活用方式を選択し公表（選抜実施要項に明記）。



上智大学
吉田 研作 特別招聘教授



文部科学省 初等中等教育局
向後 秀明 教科調査官



千葉県立長生高等学校
百瀬 美帆 先生

国が外部の資格・検定試験を認定する際の基準はどのような点ですか。

向後 認定の基準はまず、学習指導要領に沿っているかどうかです。そして、大学入学者選抜の観点から、評価すべき能力を適切に評価できているか。また、試験の一貫性を確保するために、客観的な検証結果を踏まえて試験問題、評価の観点、採点基準等を作成しているかが求められます。さらには、CEFRとの関係性、試験の実施時期、採点期間、セキュリティ、試験会場、受験料などを含め、認定基準は多岐にわたることが予想されます。

吉田 大学入試改革において、一番の問題は採点をどうするかです。記述問題の採点にどのように対応するかが当面の課題ですね。だからこそ、すでに世界で認められている実績のある外部の資格・検定試験を活用すれば、試験としての信頼性も妥当性もあるでしょう。国や大学が独自で試験を作り実施しているのは日本やアジア諸国ぐらいです。センター試験はCEFRベースで作られていませんし、英語力もA2からB1相当までしか測れない。B2まで測ることができないのであれば、世界標準の英語力を測ることはできませんよね。

向後 新テストは2020年度にスター

トすることが決まっていますので、国としてはもう後戻りすることはできません。現在、高大接続改革システム会議で審議している議題の中心は新テストについてですが、今後は大学の個別試験の改革も併せて進めていかなければなりません。これからの改革に伴い、高校生が大学を選択するにあたって、従来の偏差値のようなランキングによってではなく、大学の教育内容や入試問題などから、高校生自身が主体的に判断していけるようになると思います。

高大接続は「授業」でつながっていけるように

大学がどのような教育を行い、どのような力を伸ばしていくのかを示していく必要がありますね。

吉田 オープンキャンパスなどに参加して、実際に生徒自身が大学の様子を見るとよいでしょう。授業を見学できればなおよいですね。私の授業を見学した高校生は、内容が分からなくて退出してしまうケースがあるのですが、それでも、大学の授業がどのようなものかを知ることは大切です。これからは、大学もどのような学生を求め、どの

ようなカリキュラムで学び、どのような人に育てていくのか、3つのポリシーを明確に打ち出さなければなりません。なかでも、カリキュラムポリシーは重要です。英語で言えば、高等学校までに培ってきた4技能の力をどれだけ生かした授業をできるかを意識しなければ、今後、日本の大学は世界の中で生き残ることができません。大学のグローバル化では、日本の学生が海外へ出るだけでなく、海外の学生を迎え入れて活性化していくことが求められています。それには、英語で授業を行い、英語で単位を取得できるプログラムを作るなど、大学としての改革が求められているのです。

百瀬 本校では3年間、コミュニケーション活動中心の授業を行っています。大学に進学したのち、「授業は一人ずつ順番に日本語訳をするだけだった」と落胆する卒業生がいる一方で、「大学では自分の意見を言うことに苦労している学生が周りには多いけれど、私は高校時代にやってきたことをそのまま出せばいいから、苦労しない」と言う卒業生もいます。一般的に進学校といわれる学校では、いまだに旧帝大という言葉が生きていて、難関国公立大学、難関私立大学への合格実績で学校の価

大学入試から変わる日本の

英語教育

特別対談



吉田 研作 (よしだ・けんさく)

上智大学 言語教育研究センター長。特別招聘教授。上智大学大学院言語学専攻修士課程修了。ミシガン大学大学院博士課程修了。英語教育、バイリンガリズム、異文化間コミュニケーション教育の第一人者。文部科学省の外国語教育に関する各委員会などにも携わり、英語が使える日本人の育成に関する研究、活動を行っている。

値が測られますが、私としては高等学校で培った力を活かすことができる大学を選びなさいと推したいですね。

向後 これは本当に大事なことで、高大接続改革も、これからは授業という部分での高大の接続が必要で、先生同士が授業を通じて行き来できる関係づくりが必要ではないでしょうか。中・高では英語で英語を学び、大学では専門を英語で学ぶといったつながりをつくっていかねばなりません。

4技能をバランスよく身に付ける授業を

これからの入試で求められる力とは？

向後 新テストは、「思考力・判断力・表現力等」を重視するとしています。例えば複数のデータを見て、そこから見い出せる情報を活用しながら、自分の意見を構築して英語で表現するといった力などです。そのためには英語の授業では、生徒が英語に触れる量を圧倒的に増やしていかなければなりません。まずはゴールを設定して、どのような力を身に付けるかを定め、それに沿って、必要な情報を得るために多量の英文資料をスキミングしたりスキャニングしたりするというようにしていかないと、英語に触れる量は増えません。4技能をバランスよく身に付けるには、読むこと、書くことも日常的に増やしていく必要があります。ディスカッションやディベートをするために、相当量の英語を読み込むといったサイクル

ができ上がるといいですね。

百瀬 私も、ディベートのときには生徒に資料をかなり読ませます。英語に触れさせる量は、教員が工夫をすれば増やせますが、知識を増やすには全教科をしっかり勉強するようにと指導しています。今後は全教科横断型あるいは他教科との連携で授業をしていくことが必要なのではないのでしょうか。

吉田 大学で教える立場としては、高校段階でCEFRのB1レベルの英語力を持つ生徒が増えることを望みますね。4技能を測る外部の資格・検定試験を大学入試で活用していくには、4技能を統合した活動を授業で取り入れる必要があります。今、学生の英語力は二極化しています。上位の学生は実用英語技能検定（英検）で準1級や1級を取得していて、英語の運用能力に問題はありますが、そうでない学生の英語力の底上げをしていかなければなりません。そちらが上がってくれば、大学での英語の授業も大きく変えることができます。

教員の意識改革が英語教育改革を支える

今後、どのように英語教育や入試と向き合えばよいでしょうか。

向後 次期学習指導要領や高大接続改革などが2020年度に向けて進んでいます。これは小・中・高だけの改革ではありません。今後、大学では高等学

校で技能統合型の授業を受けて、4技能型の試験を受験して入学してきた学生をどのように受け入れ、社会ではどのように活かしていくかという大学・社会の変革も同時に進めていく必要がありますね。2020年度はゴールのように思われますが、そうではないと思います。

吉田 そうです。2020年はスタートラインです。新テストに限らず、「高等学校基礎学力テスト」でも4技能を測ることになりますから、高校入試も変わらなければなりませんね。中学校でも4技能の指導をしているのに、高校入試だけが2技能のままでは中・高を接続することができません。高校入試の4技能化を念頭に、高校の授業も大学入試も4技能化していく環境整備をすることで、先生方の意識も変えていくべきでしょうね。初めは苦労しても、今まで考えたことのなかった新しいこと、やりがいがあることを発見できるはず。教員の意識の改革は、本当の意味での英語教育改革につながるのだと思います。

百瀬 今後は大学入試も4技能化されるので、4技能の指導を実践してきた身としては、ようやく安心して指導ができる、授業スタイルを変えずにやってきて良かったと安堵しています。外部の研修会などに参加する機会も多いのですが、このところ、急速に先生方の英語力が上がってきているのを実感します。生徒に言語活動をさせるための英語力としては不自由がないようです。さらに、授業の組み立てが分からないながらも、授業を

変えてみようという気持ちが芽生え、教員の姿勢が変わってきているようです。同僚にも、「4技能型の授業を一旦始めたら、講義一辺倒の授業にはもう戻れない」ということを言う教員がいます。実践すれば、皆さんが同じ気持ちになれるでしょう。ぜひ、一歩を踏み出してみしてほしいと思います。

向後 吉田先生がおっしゃったように、教員の意識変革がまず第1のポイントになるでしょう。そのためには、異なる価値観や未経験のものにチャレンジするなど、新たな環境でも自分を適応させていく力が求められているのです。「昨日までは経験したことのなかった場に身を置くことになった自分」を楽しんでいただきたいものです。その際、百瀬先生がおっしゃったように、先生方自身が学び、変化していくことが当然であるという雰囲気をつくることができればよいと思います。最後に、入試がゴールという考えのもとで英語教育を完結させないでいただきたいですね。理想は生徒が英語を好きになって卒業していくことです。生徒が生涯にわたり学び続けるモチベーションを持たせて卒業させているかどうかが重要であり、入試はそのなかでの1つのステップにすぎません。大学の合格実績で高等学校の評価が決まるのではなく、大学に進学した生徒が高校時代に受けた英語の授業が役に立っていると感じる割合が高いかどうか、といったことで評価されていく時代が来ることを期待しています。



百瀬 美帆 (ももせ・みほ)

千葉県立長生高等学校教諭、教務部 国際交流推進室長。千葉市立稲毛高等学校、千葉県立千葉女子高等学校、同県立佐倉高等学校などで、長年にわたり4技能を育む英語授業、国際交流プログラム等を先導・推進してきた経験を持つ。



向後 秀明 (こうご・ひであき)

文部科学省初等中等教育局教育課程課・国際教育課外国語教育推進室教科調査官、国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官。千葉県公立高等学校の教諭、千葉県教育庁教育振興部指導課指導主事を経て、2010年4月より現職。

Shinichi IZUMI

上智大学 外国語学部 教授 和泉 伸一



(連載) 第4回 (最終回)

「森から木へ」の授業のススメ

本連載の最終回の今回は、高校の英語授業で行う「森から木へ」の授業と、それに伴う評価について述べておきたい。

和泉 伸一 (いずみ・しんいち)

ハワイ大学マノア校客員研究員、オークランド大学客員研究員を経て、2016年4月より上智大学外国語学部英語学科学科長、教授。専門は、第二言語習得研究と英語教育。主な著書として、『フォーカス・オン・フォーム』を取り入れた新しい英語教育』（大修館書店）、『フォーカス・オン・フォームとCLILの英語授業』（アルク）などがある。

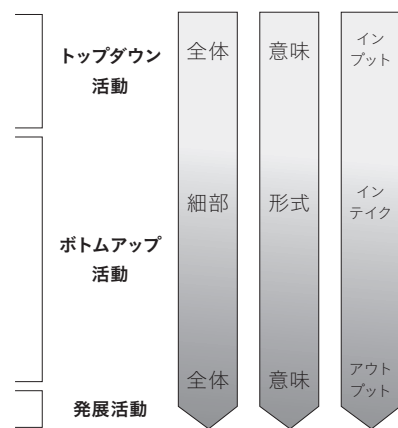
「森から木へ」の授業

高校の英語授業で、リーディングは重要な位置を占める。従来型の指導では、リーディングとはいっても、結局、大半の時間は語彙や文法の解説と訳読、そして練習問題に費やされてしまっていた。その特徴は、一文一文の構造や単語を細かく見ていって、最終的にテキスト全体をカバーすることである。いわば「木から森へ」と進む指導法と言えよう。しかし、あまりに「木（文法や語彙）」ばかりに目を向けてしまうため、肝心の「森（段落の要旨や全体のメッセージ）」が見えなくなってしまうことも多い。そうすると、せっかく時間をかけて読んだことに対して、意見や感想を持つことが困難となり、読後の発展活動につなげていくことも

難しくなる。「木から森へ」と進むはずだったのが、実際は、木々の間で迷ってしまい、疲れ果ててしまう。

次期指導要領では、発表、議論・討論、交渉等の言語活動を多く取り入れた、英語を使った4技能統合型の授業を行うことが強く求められている。それを実現するためには、従来型の「木から森へ」の授業の限界を何とかして乗り越えていかなければならない。そこで提案したいのは、逆の発想である「森から木へ」と発展していく総合的なコミュニケーションの授業方法である。それはCLIL (Content and Language Integrated Learning: 内容言語統合型学習) をバックボーンとしつつも、フォーカス・オン・フォーム (Focus on form) を指導原理とし

1. オーラル・インタラクション
2. スキャニング
3. スキミング
4. ワード/フレーズ・ハント (日→英)
5. ワード/フレーズ・ハント (英→日)
6. 文法・語法フォーカス
7. チャンク・リーディング
8. チャンク・トランスレーション (英→日)
9. チャンク・トランスレーション (日→英)
10. 議論・討論、発表、交渉等



【図1】「森から木への」授業の流れ

て、ラウンド制の授業形態をとって進める授業である。具体的な活動内容や授業案は、拙著『フォーカス・オン・フォームとCLILの英語授業』（アルク）に譲るが、ここではその概観だけでも示しておこう（【図1】参照）。

「森から木への」授業では、最初は全体像から大きく入り、細かい部分はとりあえず気にしない。焦点は問題提起と生徒の興味・関心の喚起である。また、「トップダウン活動」として、必要な情報だけを読み取るスキャニング（例：Who is the man described in the text? Where is he?）や、大まかな要旨だけを読み取るスキミング（例：What's the main point of this paragraph? What are the key words?）などの活動を行う。その後で、徐々に細部に注意を移していくが、全体像を捉えてから細部に移行することで、生徒の認知的・情緒的負担を軽減できる。

次に来る「ボトムアップ活動」では、語彙や文法などの指導をできるだけ生徒主体で考えさせる形で進めていく。必要に応じて和訳も使っていくが、従来のような文レベルの和訳ではなく、チャンクに基づいて行うことで、英語の語順で文章を理解していく能力を鍛えていく。そして、発展活動として、議論・討論、発表、交渉などの活動を積極的に取り入れていく。全体像の“森”と詳

細な“木々”を押さえた後となるので、こういった活動の導入はより自然で無理なくできるようになるはずである。そこで英語表現に困るようであれば、教科書に再度戻って、改めて言語材料の掘り出し活動を行うこともできる。リーディング教材を言葉と内容の貴重なリソースとして使っていくのである。

授業と評価の一致

こういった授業を展開すると、評価方法も「英語を用いて何ができるようになったか」という観点から見なければならなくなる。そのために、特に次の2つのことを提案したい。1つが既習テキストを超えた「スキル評価」で、もう1つが「パフォーマンス評価」の導入である。従来のテストでは、既習テキストを使って、そこに登場する言語項目の定着度（記憶）を測ることが多かった。しかし、これからは、授業で扱った話題に関連した内容の未習テキスト（例えば、ALTに手伝わってもらって教科書テキストに則した新テキストを書いてもらう）なども積極的に使っていき、授業と家庭学習で鍛えたスキルがどこまで使えるようになっていくかを問う必要がある。少なくとも定期テストの2～3割ぐらいは未習テキストに基づいたものでありたい。スキャニングやスキミングの力は既習テキストでは評価ができないし、文法や

語彙の習得も未習テキストで試してこそ、スキルの習得を測ることができるのである。読み聞かした内容に関して短文で答えさせる、短いエッセイを書かせる、などをして試すことも必要になってこよう。

パフォーマンス評価に関しては、読んだり聞いたりしたことに対しての自分の意見や感想を述べるスピーチやエッセイ以外にも、登場人物になったつもりで語る「なりきり音読」といった活動を授業で扱ったならば、その成果を評価対象とすることが大事になってこよう（音読活動は内容をしっかり把握してから行うことが重要なので、【図1】の流れの中に入れるならば、ボトムアップ活動以降が効果的となる）。どの生徒がどの箇所を読むかは、テスト範囲を事前に伝えておいたうえで、テスト当日はその場でくじを引いてもらい、当たった箇所を音読してもらうといった方法がある。

評価の際は、あまり複雑な評価方法だと時間もかかり長続きしないので、なるべく簡単なものとする。例えば、観点別評価で点数を付ける方法として、発音、抑揚、流暢さ、内容の伝達の4観点から、それぞれGood（3点）、OK（2点）、Not good（1点）の3段階、もしくはそれに中間点を設けた4か5段階評価で判断できる。また、内容を考えながら音読することを奨励・チェックするためにも、読んだ内容に関する質問を最後に1問投げ掛けるといった工夫も考えられる。形成的評価の一環として、1回目の時点でフィードバックを与え、練習時間を与えることから、2度目のチャンスを与えることも、学習向上の観点から重要となろう。

授業と評価は表裏一体であり、それでこそ双方の改善が大いに生きてくるものである。行うべきことは多々あるが、どれも英語学習をもっと楽しく有意義なものとするための試みなので、肩肘張らずに、自由な発想で、伸び伸びと挑戦を続けていっていただきたい。

Kouichi ANO

文教大学 国際学部 教授

文教大学大学院 国際学研究科 教授

阿野 幸一



〔連載〕第4回（最終回）

「授業は英語で行うことを基本とする」への取り組み 生徒のために英語を使いましょう！

本連載の第1回では英語で授業を行う意義について考え、第2回は英語で行う文法指導、そして今回は、生徒との英語によるインタラク션을通した教科書本文の内容理解の方法について具体的に見てきました。最終回の今回は、授業で英語を使うコツについて考えてみましょう。

阿野 幸一（あの・こういち）

文教大学国際学部教授・同大学院国際学研究科教授。専門は英語教育、応用言語学。主な著書に、中学校検定教科書『NEW HORIZON English Course 1・2・3』（共著、東京書籍）、高校検定教科書『All Aboard! Communication English I・II・III』（共著、東京書籍）、「みんなの楽しい英文法－「スタンプ例文」でわかる英語の基本」（NHK出版）など。NHKラジオ『基礎英語3』講師（2008－2012年度）、同『基礎英語2』講師（2013－2015年度）。

日本語厳禁？

よくAll Englishという言葉を目にします。「授業の全てを英語で」という意味に解釈されるため、授業では日本語を一切使ってはいけないと考えてしまいがちな言葉です。しかし、「授業は英語で行うことを基本とする」のねらいは、「生徒が英語に触れる機会を充実させるとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため」なのです。「日本語は使ってはいけない」と厳しく考えるのではなく、授業の中で英語を使う場面を増やしていきながら、生徒とのやり取りを英語中心に切り替えていくところからスタートしましょう。

まずはClassroom Englishから

授業中の指示ではClassroom Englishを積極的に使っていきましょう。教師が英語を使ったら生徒が理解できずについてこられないかもしれないと不安に思っている先生方もいらっしゃるかもしれませんが、Classroom Englishは教室内のある特定の使用場面とともに毎時間繰り返し耳に触れる表現です。仮に最初の数回はすぐに指示通りに行動できない生徒がいたとしても、時間の経過とともにどの生徒も使い方を覚えて、指示通りに行動できるようになっていきます。教師の英語による指示で生徒が行動するということは、まさに

英語をコミュニケーションの手段として使っていることになります。ここで注意しなければならないのは、英語の後にすぐに日本語で指示を繰り返してしまうことです。“Repeat after me.”「はい、後について繰り返して」とすぐに日本語で言っているのは、生徒は教師の英語に耳を傾けなくなります。“Repeat after me.”と言われたら、その意味を日本語で理解するのではなく、「声に出して繰り返す」という行動に結び付けることが大切なのです。これはちょうど、“dog”と聞いて「犬」という日本語の単語を思い浮かべるのではなく、動物としての犬を瞬時にイメージできる力と同じです。

中学1年生の最初の段階から“Do you have any questions?”と問いかけているうちに、一般動詞の疑問文ではdoという単語を使うことを自然と意識し、一般動詞を学習するときには、すでにたくさんのインプットに触れているために理解しやすくなります。また、疑問文で使うanyの用法も無意識のうちに身に付いているため、「質問はありますか?」という日本語を聞き続けた生徒とは違い、明示的な説明を受けた時にもすぐに納得できるのです。

生徒の発話を引き出すために

授業で英語を使うことの目的の1つは、教師からの説明を減らして、生徒の英語を使った言語活動を増やすことにあります。これまで行っていた、教師からの日本語による説明を単に英語に切り替えて教師が一方的に英語で話していても、生徒の英語力向上につながる可能性は低くなります。文法規則についても理屈で理解させようとするのではなく、実際に場面設定をして使いながらその形や使い方に触れさせて覚えさせるようにしたいものです。一見遠回りのようにも見えますが、場面とともに英語を使い、生徒自身が間違えながらも修正をかけて

身に付けていくことで、理解を深めることにもなります。教科書本文の内容理解では、どのような発問を行えば、教師が期待する答えを生徒から引き出せるかを考え、できる限り教師が説明する時間を減らし、生徒の口から英語を引き出す工夫をしましょう。具体的な発問の方法は第3回の具体例を参照してください。

答え方のガイドとフィードバック

英語で発問をしても、生徒がその意味を理解できなかったり、理解できていたとしても答え方が分からなかったりすることはよくあります。そうした際に、すぐにあきらめてほかの生徒に質問をしたり、日本語で質問をし直したりするのではなく、むしろ英語によるコミュニケーションを継続させるチャンスと考え、答える際のヒントを出すことで、生徒の発話の手助けをしたいものです。例えば、過去形の定着をねらったインタラクションで次のようなやり取りが行われたとします。

T: What did you do last weekend?
S: ...
T: Did you go shopping?
(バレーボール部の生徒なら) Did you play volleyball? Or did you study English at home?

このように、生徒が理解可能で使うことができる語彙や表現を提示していき、それらをそのまま使うだけでも答えられる段階まで近づけます。そうした場合でも、生徒から正しい英文が返ってくるとは限りません。例えば、上記の答えとして、動詞の過去形が使われていない場合には、どのように対応したらよいでしょうか？ここで英語によるインタラクションが力を発揮します。

S: I play volleyball.

T: Oh, you played volleyball! You played volleyball on the weekend.

このようなフィードバックを行うことで、コミュニケーションを途切れさせることなく、答えた生徒本人には気づきを与えることができます。日本語で指導を行う場合には「過去のことだからplayではなくplayedになる」という明示的な説明になってしまい、コミュニケーションを途切れさせるばかりでなく、生徒の発話しようという意欲をそぎかねないので注意が必要です。

教師が英語で質問をしたとしても、生徒から日本語の答えが返ってくることもよくあります。しかし、それでも焦らないことです。日本語の答えであっても、教師の英語の質問は理解したうえで答えているため、そこには生徒とのコミュニケーションは成立しているのです。焦らずに教師からのインプットを与え続け、少しずつ生徒の英語による発話が増えていくのを待ちましょう。

英語が苦手な生徒にこそ英語で

研修会でお会いする先生方の中には、自分の学校の生徒には英語を使うことはできないとおっしゃる方もいらっしゃると思います。「英語に対する意欲がない」「英語を理解するだけの学力が付いていない」という理由からです。しかし、本当にそうでしょうか？どんなに英語が苦手な生徒や、自分には英語なんて必要ないという生徒でも、心の底には「英語が話せたらいいなあ」という気持ちを持っているものです。こうした生徒が、日本語で説明ばかりをする授業に興味を示して取り組むでしょうか？「先生の話している英語が分かった」「ALTと英語が通じた」というきっかけで英語学習に目覚める生徒はたくさんいます。「英語は使うもの」「人と人をつなぐコミュニケーションの手段」ということを意識させるためにも、授業で英語を使っていきたいものです。

授業で英語を使うのは、あくまで生徒のためです。生徒のために「英語で授業」、取り組んでみませんか？

Ken OSHIRO

琉球大学 教育学部 教授 大城 賢



〔連載〕第4回（最終回）

文字指導の取り入れ方、 中1ギャップを生まないための指導（小・中連携／接続）

次の学習指導要領で導入される「教科としての外国語」では、「聞くこと」「話すこと」に加えて、「読むこと」「書くこと」などに慣れ親しませることなどが追加される予定です。そこで今回は、小学校での文字指導について、読者からの質問に答える形で検討したいと思います。

大城 賢（おおしろ・けん）

琉球大学教育学部卒業。琉球大学大学院教育学研究科（英語教育専修）修了。国立大学法人琉球大学教育学部教授。同附属中学校校長、同附属教育実践総合センター長などを歴任。学外の役職として、日本児童英語教育学会副会長、小学校英語教育学会常任理事、文部科学省研究開発学校企画評価会議委員など。

「文字指導」は、どのような手順で行えばよいのでしょうか。

『小学校外国語活動研修ガイドブック』（文部科学省、2009、以下『ガイドブック』）には、文字指導の手順が示されています。それによると文字指導は、文字に慣れる第一段階、大文字・小文字を認識する第二段階、そして、文字の組み合わせ（単語）に慣れる第三段階というように手順を踏んで指導していくことが大切と記されています。

外国語活動では第三段階までは取り扱わなかったのですが、次の学習指導要領で導入される外国語においては、第三段階（単語・文レベル）まで進めることになるでしょう。『ガイドブック』には外国語活動の発展的な学習として、英語の音声に慣れた段階で、「読むこと」「書くこと」の初歩的な活動を導入することは、内容理解を深め、学習を促す効果があると説明されています。教科になった外国語においては、十分に慣れ親しんだ単語や文を書き写したり、あるいは、例文を参考に慣れ親しんだ単語を選択しながら書いたりするレベルまで求められるのではないのでしょうか。



「フォニックス」とは何ですか。

「フォニックス」は、文字とそれに対応する音の関係をルールとして示しながら、学習者が英語の文字を音声化できるようにする指導法です。もともとは英語母語話者の子供たちに、文字と音の関係を教えるための指導法として生まれたものです。ですから、音声としては十分に慣れ親しんでいることを前提とした指導法とも言えます。イタリア語や韓国語のように、文字と音がほぼ一致する言語と比べ、英語の文字と音の関係は必ずしも一対一の対応にはなっていません。例外も多く見られます。ですから、仮に指導するにしても、基本的な事項に絞り、児童への負担に十分に配慮することが大切です。

「フォニックス」以外の指導法はありますか。

「フォニックス」がボトムアップのアプローチとすれば、トップダウンのアプローチとして「ホールランゲージ・アプローチ」があります。これは、絵本や教室の掲示物などを通して、文字に触れさせ、英語の文字と音の関係についても自然に学習させるというものです。もちろん、英語を母語として学んでいる子供たちに対する指導法としても行われています。『英語ノート』には英語の文字がほとんどありませんでしたが、『Hi, friends!』には、英語の文字がたくさん出ています。その影響かどうかは分かりませんが、『Hi, friends!』の導入以降、小学校の教室や廊下には英語の文字が自然と目に入ってくるような掲示物が多くなったように感じます。英語の文字に慣れ親しませるという点からは効果的な方法だと思います。また、教科化を視野に入れた試用教材である『Hi, friends! Plus』には、文字と音の关系到気付かせるワークシートなども準備されています。中学年の教材としては絵本などの準備も進んでいますので、先生方が絵本を読みながら文字に親しませ、中学年から文字と音のつながりについても慣れさせることが可能です。音と文字の関係を理解させるには、1つの方法に固執するのではなく、ボトムアップ的なアプローチとトップダウン的なアプローチを融合させることが大切です。



文字指導における小・中の連携はどのように進めればよいですか。

前述のように、英語の文字と音声の関係は大変複雑で、正しい綴りで英語の文字を書くことは、英語を母語として学ぶ学習者にとっても難しいものです。そのため、文字の学習を始めた途端に英語嫌いが増え始め、個人差も出る傾向にあります。ですから、中学校の入門期においては「みんなでできているはずだ」という前提に立つのではなく、小学校での学習に戻ったり、繰り返したりしながら、慎重に文字の学習を進める必要があります。また、中学校では「文字・単語・文レベル」を超えた「読む」活動へと移行していきます。母語の場合もそうであるように、絵本などで文字に親しんだ経験が、中学校からの本格的な「読む」活動の素地をつくります。小学校では音声だけとせず、文字を学ぶ楽しさや便利さも経験させながら、十分に文字にも親しませたいものです。

英検 4技能化への対応

4級・5級スピーキングテスト

時代のニーズを読み取って生まれた 4級・5級のスピーキングテスト

グローバル化の進展に伴い、コミュニケーション能力の重要性が叫ばれ、英語4技能をバランスよく身に付けることの大切さが注目されるようになりました。そうしたなか、大学入試の4技能化、中学校や高等学校の英語教育改革、そして小学校での英語教科化や外国語活動の早期開始など、今、英語教育は大きく方向を変えています。このような動きに対応し、英検協会では、英検の4技能化を進めています。今回の4級・5級におけるスピーキングテストの導入も、その一環です。英語の初期学習者にとって、「使える英語力」につながるテストとして、4級・5級にスピーキングテストを新設しました。

気軽に受験できるのが特長 団体受験への関心も高まりを見せる

4級・5級のスピーキングテストは、パソコンまたはスマートフォンアプリで受験でき、手軽なことも特長となっています。また、英検協会や、英語教育に注力している自治体は、学校単位などでの団体受験を推進しており、英語4技能を向上させる環境づくりにも寄与しています。団体受験では、学校のパソコン教室等でスピーキングテストを実施する方法と、各生徒が自宅にあるパソコン、スマートフォン、タブレット等で受験する方法があります。どちらの方法を選択しても、団体責任者の先生は生徒の成績を確認でき、日々の英語学習に役立てることが可能です。もちろん、各生徒も自分の成績を確認できます。

「英検4級・5級スピーキングテスト」特設サイトを開設

英検協会は4級・5級スピーキングの特設サイトを開設しています。テストの特長、導入の背景とねらい、テストの合格判定、受験の流れのほか、よくあるご質問への回答も掲載しています。また英検IDとパスワードをお持ちの方向けの「受験サイト」や「合格閲覧」ページもありますので、ご確認ください。

4級・5級スピーキングテスト特設サイト

英検 4級・5級スピーキング 検索

<http://www.eiken.or.jp/eiken/exam/4s5s/>



4級・5級スピーキングテストの流れがわかる「英検バーチャルスピーキングテスト」

スピーキングテストの流れを、音声付きアニメーションを見ながら把握することができます。受験前にご覧いただき、テストの準備にご活用ください。

英検バーチャルスピーキングテスト 検索

<https://speaking45.eiken.or.jp/apps/speaking-tutorial?grade=40>



「使える英語力」の推進を目的として、公益財団法人 日本英語検定協会（英検協会）が提供を始めた、実用英語技能検定（英検）4級・5級のスピーキングテスト。英語学習をしている小学生や中学生はもとより、英語教育に力を入れる自治体・教育委員会からの関心も高まっています。今回は、団体受験の機会を設け、校内でスピーキングテストを受けられる環境を整えている東京都福生市と茨城県笠間市でスピーキングテストを実施した小・中学校を訪れました。



Case 1 ▶ 東京都 福生市立福生第三小学校

Student Voice



どんどん英検を受験して、上の級を目指したい

4級を受けました。初めてのスピーキングテストだったので最初は頭が真っ白になりましたが、聞き直して、テストに慣れながら答えていきました。今回はちょっと自信がありませんが、次回は受かると思います。これからもどんどん英検を受験して、中学校卒業までに準2級は取っておきたいです。

名島 凜汰郎さん

Teacher Voice



予想より受験者が多く、関心が高いことを実感

初めての校内受験でしたが、予想よりも受験者が多かったのはうれしかったですね。児童は最初、スピーキングテストの機材の使い方などで戸惑った様子が見えましたが、受験の環境を整えばスムーズに実施できると感じました。今後は、英検バーチャルスピーキングテストを用いて受験の流れをつかむようすすめてあげたいです。

澤谷 友貴 先生（東京都英語教育推進リーダー）

Teacher Voice



環境的特性を生かし、より夢を広げる英語教育を

福生市は外国人居住者が多いため、子供たちも英語に接する機会が多々あり、他市に比べて、英語を身近に感じていると思います。その環境的特性を生かしながら英検などの機会を活用し、英語で日本や福生のことを伝え、英語を使って夢を広げていけるような子供たちを育てていきたいですね。

林 宣之 先生（福生市教育委員会 英語教育推進担当課長・統括指導主事）



Case 2 ▶ 茨城県 笠間市立笠間中学校

Student Voice



いずれは海外に行って、異文化に触れてみたい

将来受験で役立つのではないかと、5級を受けました。今回のテストでは単語の発音が難しかったです。普段から英語を勉強していて、書くことが得意ですが、スピーキングも上手になりたいです。授業でハロウィンのアクティビティをしたことが楽しかったので、いずれは海外に行って日本とは違う文化を見てみたいです。

久野 賢世さん

Teacher Voice



日頃からAETと接している成果がでるか期待

今年の1年生は、小学6年時からAETに接しており、聞くこと・話すことに関して抵抗がありません。そのため、今回のテストではどの程度回答できるのか楽しみです。スピーキングテストは基礎がどれだけ身に付いているかが現れますね。中学生にとっては、英検3級受験に向けたステップになると感じました。

遠藤 正英 先生（英語科主任）

Teacher Voice



地元・笠間の魅力を英語で発信できる人材を育成

笠間市では昨年度より「ABC笠間プロジェクト」を始動。市内の小・中学校にAETを1名ずつ派遣するとともに、小学6年生・中学3年生を対象に英検受験の公費助成※を行うなど、英語に触れる機会を提供することで、自己PRや地域の魅力を発信したり、自律した学習者として生涯にわたり英語を学び続けたりする人材育成を目指しています。

入之内 昌徳 先生（笠間市教育委員会学務課指導室 指導主事）

※笠間市における児童生徒の英語力および学習意欲の向上を図ることを目的として、英検に意欲的に取り組む児童生徒に対して、検定料を小学6年生は5級以上400円（2015年度は300円）、中学3年生は3級以上500円を自己負担額として、その差額を市が助成する制度です。2015年度の公費助成を受けた児童生徒は小学6年生141名、中学3年生214名でした。

2級・準1級・1級のライティングテスト

採点における観点をご紹介します

2016年度より、実用英語技能検定（英検）の2級にライティングテストが導入されました。

前号では試験の問題例をご紹介しましたが、今回は、2016年度第1回 実用英語技能検定（6月実施）で実際にあった2級の解答例をもとに、2級・準1級・1級のライティングテストが採点される各観点についてのアドバイス及び解答作成時の注意点を紹介します。

● 4つの観点で採点される

TOPICに示された問い（以下の例では、TOPICの2文目）の答えになっていない場合や、まったく関係のないTOPICについて書かれていると判断された場合は、全ての観点で0点と採点されることがあります。

観点		アドバイス
①内容	課題で求められている内容(意見とそれに沿った理由)が含まれているかどうか	自分の意見と合わせて、その理由を明確にしましょう。その際に、多様な観点から考えて、意見を支える論拠や説明がより説得力のあるものになるようにしましょう。例えば、理由を書く際に、単純に「安いから」や「便利だから」だけでなく、安くなることがどういうことにつながるのか、また便利になることの具体的な例なども書きましょう。
②構成	英文の構成や流れがわかりやすく論理的であるか	伝えたい情報の流れや展開を示す表現（接続詞など）を効果的に使って、自分の意見とその理由や英文全体の構成をより分かりやすくするようにしましょう。
③語彙	課題に相応しい語彙を正しく使っているか	同じ語彙や表現の繰り返しにならないように、文脈に合わせて多様な語彙や表現を適切に使用して、自分の意見とその理由を十分伝えられるようにしましょう。
④文法	文構造のバリエーションやそれらを正しく使っているか	同じような形の文の繰り返しにならないように、多様な文のパターンを適切に使用して、自分の意見とその理由をより効果的に伝えられるようにしましょう。

● 解答作成時の注意点は？

2級の第1回検定で実際にあった解答例をもとに、解答する際の注意点を紹介します。

例1 TOPICに示された問いに答えていない

TOPICに示された問い（以下の例では、TOPICの2文目）の答えになっていない場合や、まったく関係のないTOPICについて書かれていると判断された場合は、全ての観点で0点と採点されることがあります。

TOPIC

Today, some companies allow their employees to wear casual clothes like jeans or T-shirts. Do you think the number of such companies will increase in the future?

解答例

*I think jeans will increase in the future. There is two reasons.
First, jeans are many tipes. For example, damaged jeans and skinie jeans. I am saying only 2 tipes jeans, but there are a lot of other tipes jeans.
Second, jeans can much a lot of other clothes. For example, T-shirt, parker and jacket.*

アドバイス

この課題では、「カジュアルな服装の着用を許容する会社が増えるかどうか」について自分の意見と理由を述べることが求められています。しかしながら、解答例ではその点にはまったく触れられておらず、「Jeans」に関する説明のみに終始しています。そのため、TOPICに示された問いに答えていないと判断され、すべての観点で0点となります。

例2 英語ではない単語を使った解答

どうしても英語以外の単語を使う必要がある場合は、その言語を理解できない人にも分かるように説明を加えましょう。

TOPIC

Today, some companies allow their employees to wear casual clothes like jeans or T-shirts. Do you think the number of such companies will increase in the future?

解答例

*More companies will allow casual clothes in the future.
One reason is that it is comfortable for salaryman who work for the company.
If you can wear jeans or T-shirts, you can be more relaxed.
Also, wearing suits makes you look all the same. It is like wearing seifuku, so the fashion is not good.*

アドバイス

「salaryman（サラリーマン）」のような日本語の単語が使われていますが、その前後に説明「who work for the company」があるため、日本語が分からない人にも理解できる内容になっているので減点の対象にはなりません。逆に「seifuku（制服）」の前後には説明がなく、日本語が分からない人には理解できないため、減点対象となります。

ライティングテスト導入で2級も4技能化

大学入試の4技能化に対応

2015年3月、文部科学省の諮問機関である「英語力評価及び入学者選抜における英語の資格・検定試験の活用促進に関する連絡協議会」（以下、「連絡協議会」）から、「英語の資格・検定試験の活動促進に関する行動指針（案）」が発表されました。そこには大学や高等学校をはじめとする各学校は、入学者選抜や生徒の英語力評価に4技能をバランスよく測定できる資格・検定試験の効果的活用を促進する旨が明記されています。英検協会では、グローバル人材育成のために、中・高生に広く受験いただいている英検の4技能化を進める必要性を認識し、まずは高等学校卒業レベルの指標とされる2級の4技能化を進めました。

2級ライティングはどんな試験？

「2級」ライティングの問題は、「1級」「準1級」と同様に、英検の審査基準を遵守し、そのうえで高等学校の学習指導要領の内容および、国際基準規格であるCEFR※レベル（2級はB1レベル）に整合させることを意識して開発されました。技能としての英語のみならず、日頃の生活や学習を通じて身に付けた知識の活用を求め、受験者は与えられたトピックに対する意見とその裏付けとなる理由を、適切な語彙と文法を使用しながら英文で論述する能力が試されます。

※「CEFR」とは、Common European Framework of Reference for Languagesの略。語学のコミュニケーション能力別のレベルを示す国際基準規格。欧米で幅広く導入され6つのレベルが設定されています。

英検ウェブサイト掲載の過去問をご活用ください

英検の過去3回分の問題および解答を英検ウェブサイトにて掲載しています。受験対策に役立つコンテンツもご用意していますので、受験前の準備や対策にぜひご活用ください。

英検 過去問

検索

<http://www.eiken.or.jp/eiken/exam/>



4技能での志願者数が急増！ 2016年度のTEAP志願者数動向

公益財団法人 日本英語検定協会（英検協会）が、2016年度の4技能型アカデミック英語能力判定試験「TEAP (Test of English for Academic Purposes)」の志願者数と2015年度の志願者数を比較分析した結果、4技能での志願者数が急増していることが分かった。

TEAP 年度別・技能別志願者数	2016年度				2015年度			
	第1回	第2回	第3回	年度合計	第1回	第2回	第3回	年度合計
RLWS (4技能) 志願者数	3,788	3,184	3,628	10,600	2,196	1,529	1,583	5,308
RLW (3技能) 志願者数	68	82	89	239	43	66	49	158
RL (2技能) 志願者数	883	978	1,150	3,011	2,510	2,407	2,743	7,660
志願者数 合計	4,739	4,244	4,867	13,850	4,749	4,002	4,375	13,126

4技能の志願者数合計は 10,600名に！

英検協会の調査によれば、2016年度と2015年度のTEAP志願者数を技能別に比較すると、上表のような結果となり、4技能の志願者数は昨年度の倍増、2技能の志願者数は昨年度の40%に減少したことが明らかになった。

大学入試における英語試験 4技能化が進んでいる

4技能の志願者数が急増した背景として、文部科学省が掲げる英語教育改革の柱の1つに「4技能化」があり、2020年度の大学入試改革においても、「4技能を総合的に、バランスよく評価する」という方針が明示されたことが考えられる。その影響もあり、全国の各大学では外部の資格・検定試験を入試に導入し、4技能のスコア提出を受験生に求めるようになってきた。

TEAPは実施開始から3年が経ち、4技能をバランスよく測定できる試験として広く認知され、その品質と運営面でのセキュリティの両面から高い評価をいた

だいている。そのため、2016年度には、採用大学数が2015年度の22校から63校へと大幅に増加。そして、そのうち4技能を求める大学は53校にのぼり、2015年度は2技能のみを求めていた大学のうち、6校が4技能（併用を含む）に変更している。

さらに、2016年度のTEAP受験者に「第1志望の大学名」に関するアンケート調査を行ったところ、上智大学と回答した受験生が大半を占め、同大が2016年度入試では4技能を求めるように変更したことが、TEAP志願者の4技能受験者増加に少なからず影響しているようだ。

TEAP採用大学 （2016.10.12現在）

TEAP

北海学園大学、上智大学、立教大学、中央大学、青山学院大学、獨協大学、神田外語大学、東京理科大学、武蔵野大学、筑波大学、明治大学、早稲田大学、学習院大学、明治学院大学、関東学院大学、聖路加国際大学、東洋大学、法政大学、駒澤大学、東京女子大学、武蔵大学、専修大学、東京海洋大学、日本体育大学、千葉工業大学、東京音楽大学、芝浦工業大学、中京大学、南山大学、愛知大学、名城大学、金沢星稷大学、藤田保健衛生大学、金沢大学、名古屋工業大学、名古屋外国語大学、愛知学院大学、常葉大学、静岡文化芸術大学、関西大学、近畿大学、神戸海星女子学院大学、関西学院大学、立命館大学、関西国際大学、同志社女子大学、龍谷大学、京都産業大学、桃山学院大学、甲南大学、京都外国語大学、摂南大学、京都文教大学、広島大学、エリザベト音楽大学、広島修道大学、高知大学、福岡大学、立命館アジア太平洋大学、西南学院大学、九州工業大学、鹿児島大学

TEAP CBT

上智大学

※入試形態および導入学部・学科、基準点については、TEAPウェブサイトより「採用大学」ページ（<http://www.eiken.or.jp/teap/group/list.html>）をご覧ください。
※2017年度入試の詳細については、各大学のウェブサイトにて必ずご確認ください。
※上智大学は、英語外部検定試験に、TEAPおよびTEAP CBTのみを採用しています。

TEAPについての詳細は…
<http://www.eiken.or.jp/teap/>

TEAP

検索

お問い合わせ：英検サービスセンター TEAP運営事務局 TEL：03-3266-6556 ※平日9:30～17:00（祝日を除く）

TEAP活用事例 第10回：愛知大学

グローバル企業を数多く 擁する愛知県という地域性

愛知大学では、2017年度の入学試験から外国語科目で、外部の英語能力試験を導入する。まずはセンター試験利用入試でのスタートだ。導入する英語能力試験はTEAPをはじめ、実用英語技能検定（英検）など全6種類。例えばTEAPの場合、334点以上を保持していれば外国語の「英語（リスニングを含む）」を満点として換算し、可否判定する仕組みだ。

国際コミュニケーション学部の推薦入試では、出願資格に英検2級以上を設けるなどすでに外部試験を導入済だが、来年度からさらにTEAPやIELTS等に応じていくという。外部試験の活用を積極的に進める理由はどこにあるのだろうか。

「1つには、高校の学習指導要領の改訂に伴って英語教育の手法がコミュニケーション重視に変わっていること」と、愛知大学は説明する。「もう1つは地域性。愛知県はトヨタ自動車をはじめとする製造業が盛んです。小・中学校のときに親御さんの仕事の関係で海外生活していた生徒も多く、県内の高校普通科の中には国際コースを設けている学校も少なくありません」

愛知大学の一般入試では英語科目の配点を高くしている。センター試験利用入試で受験生のニーズを見極め、ゆくゆくは一般入試とのバランスを考えながらTEAP等外部試験の活用方法も変更していく方針だ。

国際人にとって語学力は コミュニケーション力の一部

愛知大学には、1997年に開設された全国唯一無二の現代中国学部がある。同学部は2012年、文部科学省「経済社会の発展をけん引するグローバル人材育成支援」事業に採択され、この5年間、グローバル人材の育成に積極的に取り組んできた。「グローバル人材という

まずは語学力というイメージがあると思います。当学部で言えば、中国語だろうと思われる方も多いことでしょう。しかし最も大切なのはコミュニケーション能力で、あくまでも語学力はその一部。海外の人と臆することなく交流できる真のコミュニケーション能力をもつ人材の育成が重要だと考えています」と安部悟学部長は強調する。「中国だけでも13億人以上が話す中国語は、世界的に見ても非常に優勢な言語です。それに英語運用

能力を備えていれば、世界のどこでも通用するといっても過言ではありません」

同事業採択を機に、3年前から始めた同学部の「グローバル人材特別入試」では、出願資格に「中国語検定4級以上」「HSK（漢語水平考試）3級以上」など中国語系の能力試験を設定しているが、実際は英検2級など英語系スコアを利用する出願者が多数を占める。英語力の上にさらに中国語のスキルを積み上げたいという受験生が多いようだ。

グローバル社会で生き残れる人材育成を目指し さまざまな外国語能力試験を積極的に採用

自動車メーカーなど数多くの製造業が拠点を置く愛知県は、海外とのつながりが深い。そのような地域社会の要請を受けて、愛知大学では建学の精神の1つである「国際的教養と視野を持った人材の育成」に基づき、以前からグローバル人材の育成に力を入れてきた。TEAPをはじめとする英語能力試験を積極的に導入し、さらには多言語の運用能力を持つ学生を幅広く募集している。英語系学部だけでなく中国語系学部でも、英語を重視するねらいとは。



愛知大学 現代中国学部
安部 悟 学部長

ダブルディグリー・プログラム留学スケジュール（南開大学・東吳大学）

年次 (愛知大学)	1年次		2年次		3年次		4年次		5年次	
	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋
年次 (留学先大学)	1年次		2年次		3年次		4年次		5年次	
授業拠点	愛知大学 名古屋キャンパス		現地 プログラム*1		ダブルディグリー・ プログラム (南開大学・東吳大学)*2				愛知大学 名古屋キャンパス	
在籍	愛知大学									

*1 中国（南開大学）、台湾（国立台湾師範大学）、マレーシア（南方大学学院）のいずれかに全員留学
*2 出願時要件有（国籍、既修得単位、TOEIC 600点以上またはTOEFL iBT 61点以上等）

国際社会で生き抜いていける 文化力・人間力を高めるために

同学部は、2年次に4か月間、全員が中国等に語学留学する「現地プログラム」をカリキュラムに組み込んでいる。2年前からマレーシアの大学への留学も可能となり、中国語に加えて英語も学べる環境が整備された。また3年次には、中国で実施する「現地インターンシップ」や、フィールドワーク「現地研究調査」を実施し、これらの段階的な「現地主義教育」を経て、国際社会で生き抜く力を養成している。さらに同学部では、南開大学（中国）や東吳大学（台湾）とのダブルディグリー・プログラム（表参照）を実施しており、中国語はもとより高い英語力も求められる。英語が得意な学生

ほど、本プログラムに挑戦しようという意識が高いという。また、中国語も通用する香港で短期集中のビジネス英語研修も始めており、「アジアというフィールドでグローバル人材を育成しようというのが、私たちのスタンス。現代中国学部といっても中国のことしか分からない人材を育成するつもりはありません。どんな環境であっても、自らの言葉で発信し、異なる文化の人々と共に生きていけるや人間力を備え持つことが大切です、実際にそういう学生が育っています。最近では、企業もそれを理解してくださるようになりました」と安部学部長は自信を見せる。

新しい外部試験方式の導入で、より目的意識の高い学生が集まれば、愛知大学のグローバル人材育成への取り組みはさらに弾みがつくに違いない。



学びの面白さを感じ、 学び続ける土台を築く

生徒の自主的な活動を大切に、「本物」に触れる学びを通じて、生徒が自ら考える力を育む、武蔵高等学校中学校の教育。中高一貫の男子校である同校は、山梨県議会議員、衆議院議員を経て、財界の指導者として20数種の事業経営に携わってきた根津嘉一郎によって、1922（大正11）年に創立された。建学の精神『三理想』を教育の柱に掲げ、「東西文化融合のわが民族理想を遂行し得べき人物」「世界に雄飛するにたえる人物」「自ら調べ自ら考える力ある人物」を育ててきた。

「生徒が考えることを妨げない」、「本物に触れさせることが大切である」と考える同校では6年間を通じて、基礎を身に付

け、自ら考え、学ぶ力を培うことを重んずる。中学1、2年生のうちに「教えられて学ぶ」のではなく、生徒が自ら疑問を持ち、謎を解く楽しさを体得させ、生涯にわたる知的基盤をつくる。学年が進むにつれて各分野を系統的に学ばせ、その積み重ねが大学受験にも通ずる学力となるよう配慮している。科目によっては、教員が作成したオリジナル教材を使ったり、古典作品の原典に触れたりするほか、少人数のゼミ形式での授業も行っている。

「数学の教員からは、『極端なことを言えば、技術的なことを教えることが最も大切なことではない。授業で伝えたいのは個々の教師の数学観である』と聞いています。授業とは発見の場であり、学びの面白さを伝える場です。必ずしも分かりやすい完成形の授業を見せる必要もあり

ません。目の前にいる生徒たちと一緒につくっていくものです。そうして、中・高のうちに生徒が学びの面白さを感じ、学び続けるための土台を築いておけば、大学に進んでから、自分の専門分野を突き詰めて学び続けることができるはずです」

学ぶこととは、『世界』とつながること

同校では建学の精神にあるように、創立当初から『世界』を意識してきた。『世界』とは自分を取り巻く他者、環境全てを意味している。学ぶことによって他者との違いを理解し、自己をさらに深めることが大切である。

英語教育においては、中学1年生で独自教材を使ってフォニックスを学んで英語の基礎力を培い、中学3年生から高等学校の内容に踏み込んだ学習に入

る。そして、高等学校では高度な英文解釈や文法、英作文を学ぶ。ネイティブ教員による授業では、スピーチやプレゼンテーション、アカデミックライティングなどを通じて、英語らしい表現と構成を学び、発信する力を高めていく。さらに、英語劇の取り組みもあり、生徒が台本から書き、豊かな表現力を生かして高度な作品を作り上げている。

「私は音楽を教えています。授業では英語の歌も取り上げます。例えば、『きよしこの夜』。“Silent night, holy night All is calm...”と歌うとき、言葉が持っている『色』を感じてほしいと思っています。“calm”と言ったとき、雪が降り積もる静寂をイメージしてほしいのです。それぞれの単語の『色』が感じられたとき、『英語って素敵!』と思えるでしょう。

学問の自由を大切に、自分を取り巻く世界とつながる

武蔵高等学校中学校 梶取 弘昌 校長

そうした英語の美しさや語感を伝えていきたいのです。英語が不得意であったとしても、そうした言葉の感覚が分かる生徒であってほしいと思っています」

『世界』とつながるために、「英語」の他に中学3年生から「第二外国語」（ドイツ語、フランス語、中国語、韓国朝鮮語の4言語から1言語を選択）を学ぶ。「生徒たちは複数の言語を学ぶことで『世界』が広がります。外国語の学びを通して、言葉は単なる『伝達』の道具ではなく、『世界を見る窓』であることにも気付いてほしいと思います。日本語が英語か、日本か海外かといった狭い視野では、海を越えた世界とつながることはできません。グローバルとは双方向であるべきで、『浸透し合うこと』なのです」

自ら考え行動し、タフな人間へ成長する

また、1988年から続く「国外研修制度」は、第二外国語の上級履修者から選考された10数名が高校2年生の終わりに5～8週間、ドイツ、オーストリア、フランス、イギリス、中国、韓国の6カ国に渡り、寮生活やホームステイをしながら現地の提携校で正規授業を受けるものだ。他校の「海外研修」と大きく違うのは、生徒が現地まで一人で出掛け、その準備・企画まで全て各自が行うことにある。これはまさに、建学の精神にある「自ら調べ自ら考える力ある人物」を育てる実践と言える。

「研修生には、タフであることや目的意識が明確であることが求められます。事前に調べ、現地で学びたいことなどをまとめた応募論文の内容が、現地で必ずしもその通りに実現できるとは限りません。しかし、自分なりの想像力を働かせて現地で何をしたいのかを考え、これまでの自分を振り返ることが大切なのです。そして、現地で困難に立ち向かいながら自分の殻を破り、たくましく成長して帰国します。そうした生徒たちは他の生徒たちに刺激を与え、“地殻変動”を起こすのです。それを期待して研修生を送

り出しています」

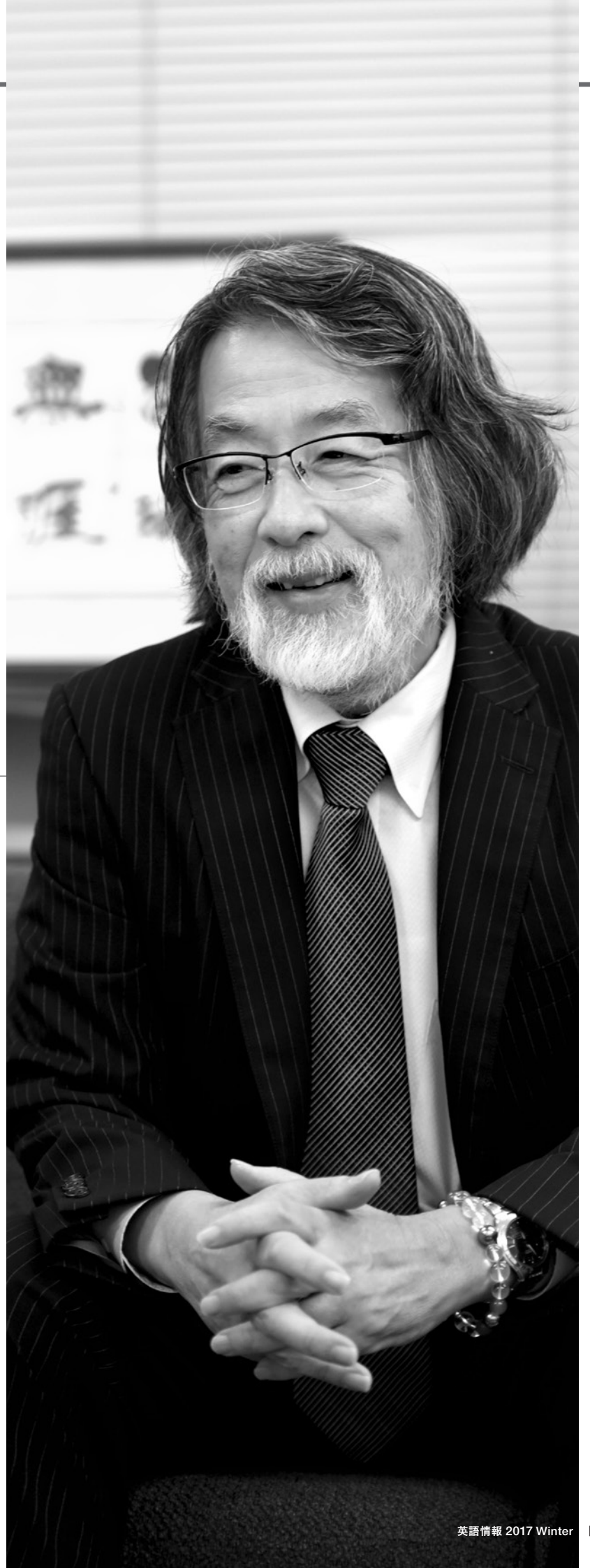
中には、現地で外交官として活躍する卒業生と出会い、自分も国際社会に関わる仕事がしたいと、帰国後に文系へ転向したり、海外の大学へ進学して学びたいと進路変更したりする生徒もいる。高校3年生になってからの大きな進路変更であっても、生徒たちにはすでに、自分の力で壁を乗り越えていく力が身に付いている。そのような生徒の姿は、他の生徒たちにとっても新たな「世界」へ歩み出す刺激となる。

偏見なく物事を見ることのできる人に

同校では進路選択にあたり、生徒本人が自分の将来を見据えて必要な情報を自ら調べ、主体的に考えて判断することを重視している。海外進学を希望する生徒には、担当のネイティブ教員がエッセイの指導や出願書類の準備をサポートするほか、海外大学で研究生活を送る卒業生などの講演会や、海外大学の

入試広報担当者による進学説明会を開催している。さらに、武蔵大学で開設している留学準備（IELTS）講座を受講する機会も用意し、給付型の海外直接進学奨学金制度も充実している。

「海外進学は届かない夢ではないこと、世界には高いレベルで研究をする学生がいて、自分たちにもそのチャンスがあることを卒業生の言葉として聞くと、生徒たちは自分もやってみようという一歩を踏み出すようになります。学校や教員ができるのは、あくまで種を撒くこと。チャンスをつかむのは生徒自身です。卒業後に進む先は、日本でも海外でもどこでも構いません。ただし、日本しか知らないのでは視野が狭くなりますから、海の向こうの世界を見ることは大切だと思います。それには、短期間でも海外へ出ることも必要でしょう。現地で初めて、『こんな世界があるのか』と知ることの意味があるのです。異文化を知ること、偏見なく物事を見ることのできる人へと育ててほしいと願っています」



Super Global High School

正解のないグローバルな課題を
解決する手だてを考えられる人を育てる



第10回 愛媛県立松山東高等学校

古くからの伝統を受け継ぎながら 新時代を切り拓く人材の輩出を

江戸時代の藩校「明教館」をルーツとし、190年近い歴史を刻む愛媛県立松山東高等学校。愛媛県を代表する名門校として数々の優秀な人材を世に送り出してきた。スーパーグローバルハイスクール (SGH) の指定を機に、さまざまな取り組みを通じて愛媛から世界へ発信できるグローバルリーダーの育成を目指す。



East CLIL による化学の英語授業「レモン汁を使った酸の中和反応に関する滴定実験」

愛媛県を代表する名門校として

夏目漱石の『坊っちゃん』の舞台として知られる愛媛県松山市。松山東高校は、文政年間にこの地に設立された藩校「明教館」の流れを汲む伝統校だ。夏目漱石も教鞭を執ったことがあるという県内きっての名門校でもある。地域社会が同校に寄せる期待は高く、愛媛県を代表する高校の1つとしてごく自然にSGHに申請し、指定を受けた。

同校が掲げる研究開発課題は「東高ががんばっていきましょい〜ALL愛媛で育てる世界に羽ばたく人材〜」。このテーマを旗印に、伝統を受け継ぎながら新たな創造を切り拓くことができるグローバルリーダーの育成を目指す。

SGHとしての活動は、大きく分けて3つある。「課題研究」「海外フィールドワーク」、そして外国人ALTとの協力による英語授業「CLIL (Content and

Language Integrated Learning)」がそれだ。なかでも特徴的なのが愛媛大学との連携による課題研究プログラム。ルーツである明教館の名前をとって「グローバル明教」と称し、総合的な学習の時間を利用して実施している。

愛媛大学との連携による取り組み

課題研究は、1年生の段階では全生徒360名を対象とする。1年次の前半では愛媛県や松山市の企業研究など地域に根差したテーマを扱い、後半から愛媛大学の教員によるいろいろな分野の課題研究に取り組む。

「大学の先生に本校に来ていただいたり、逆に大学のキャンパスに生徒が出向いたりして、それぞれの先生の専門分野の授業を受ける形式です」と、SGH事業課長の加藤伸弥先生は説明する。取り上げるテーマは、国際社会の人権問題

から、地球温暖化、教育問題、最新医学、食糧、外交、グローバルコミュニケーションなど実に多岐にわたる。2年次からはSGコースの80名に絞り、より高水準な課題に入っていく。松山東高校の側からテーマを設定するのではなく、大学の先生が選んだ専門の研究を高校生の段階で体験するのが特徴だ。「この活動により、本校の生徒が自ら学び、探求して、結果をまとめて発表するという力を伸ばしていきたいと考えています。3年次では研究したテーマを論文として発表しますが、中には大学の先生から『修士論文』レベルという評価を受け、学会に連れて行っていただいて発表する生徒も出てきました」と、その成果に自信を見せる。

課題研究のテーマは、受験と関係のない専門分野の授業も多い。東京大学や京都大学など難関大学に進む生徒も多い進学校として、受験との兼ね合いは

どう考えているのだろうか。

「もちろん大学進学実績も落とすことはできないので、バランスを考えながら取り組んでいかなければと考えています。基本的には総合学習の時間を課題研究に充てていますが、それで足りない分は、特例措置を受けて情報や保健の時間を振り替えるなど、センター試験に関わる科目を削らないようにして保護者からもご理解をいただいています」

世界で見聞を広めるフィールドワーク

SGH指定により大きく変わったことの1つが、生徒が海外へ出かける機会の増加だ。2015年度には、留学や海外フィールドワーク、修学旅行、その他の海外研修を通じて160名ほどの生徒が海外へ出掛ける機会を得た。

1、2年次の夏休みを利用して実施される海外フィールドワークは、生徒のグローバル感覚を養うための取り組みだ。海外に拠点を持つ企業の訪問や、現地の大学や高校との交流・ディスカッションを通じて海外の空気を感じることを目的としている。2016年度は、台湾とフィリピンにそれぞれ8名ずつを派遣し、現地に進出している愛媛の企業の工場見学や環境問題への取り組み、現地高校生と一緒に英語の授業を受けるなどして、さまざまな刺激が生徒にもたらされた。

加藤先生は、海外体験が生徒の意識変化をもたらすことに期待を抱いている。「全行程5日間ほどの短い期間です

が、自分の目で海外を見てくることは、本人にとって大変意味のある経験です。英語に自信のあった生徒も、現地に行ってみたら何もできなかった、通じなかった、という体験を通し、英語の必要性を身に染みて感じ、帰ってきます。希望者による海外への修学旅行や『トビタテ!留学JAPAN』制度による留学などを含めると、半数くらいの生徒が今年度海外へ行った生徒というクラスもあり、ものの見方や考え方に大きな影響を与えていると感じています」

2014年度から始まったSGH事業では、最初に体験した生徒が来春に卒業するが、アフリカ・ウガンダで国際協力を体験してきた生徒の中には、そうした分野の研究ができる大学を目指す者も出てきているという。

20年後に実を結ぶ夢のある事業へ

SGH指定を機に始まった英語力向上に向けた取り組みとしてCLILの導入がある。「英語の時間とほかの科目の時間の2時間を1セットとする独自の方法で、『East CLIL』と呼んでいます」と加藤先生は説明する。まず1時間目の英語の授業でテーマを決めたりテキストを配って準備し、次の授業(国語、数学、科学、世界史、現代社会など)では、グループで調査・研究した内容を発表したり、実験したりするスタイルだ。単に授業が英語になるだけでなく、自ら発信すること多いため英語によるプレゼン力の強

化にもつながると期待されている。

SGH指定から3年ほどが経ち、新たに見えてきた課題もある。同校が最も力を入れているのが、この活動を将来どのように残していくかという問題だ。加藤先生はこう説明する。「グローバルリーダーの育成を目指して始めた取り組みは、仮に国からの補助が終わった後も継続させていかなければなりません。目的意識を持続させるだけでなく、当然資金面の問題も出てくると予想しており、それに対する準備も始めました」

課題研究に関しては、愛媛大学との間で築いた関係性を終わらせてしまうのではなく、理科系の部活動などで継続する道を探り始めたところだ。またフィールドワークは、OBや地域の企業などから寄付を募り、「グローバル人材育成振興会」を発足させた。

「一口にグローバル人材の育成と言っても、その結果はすぐに表れるものではありません。最近は教育においても短期間での『評価』や『成果』が求められる風潮がありますが、本校では、20年くらい後になってから本当の成果が表れるのではないかと考えています。今の生徒が社会の中で中堅として活躍できるようになったときに、高校時代にまかれた種が花をつけ、実を結ぶのではないかと考えています。そんな20年後の成果を楽しみにできる夢のある事業にしたいと思っています」。同校の将来像について、加藤先生は目を輝かせながら締めくくった。



SGH事業課長 加藤 伸弥 先生



元京都大学東南アジア研究所研究員による課題研究「見知らぬ世界に飛び込んでみよう〜フィールドワーク入門〜」



愛媛大学教授による課題研究「アジア・アフリカ諸国に共通する持続可能なライフスタイルの探求」



ウガンダフィールドワークにて、現地の子供たちと交流を深めた

「躍進百大」が目指すトップグローバル研究・教育拠点創成への取り組み

九州大学 緒方 一夫 副学長（スーパーグローバル大学担当・熱帯農学研究センター教授）

国立の研究型総合大学として100年余の歴史を刻んできた九州大学。現在、歴史的プロジェクトとして伊都・新キャンパスへの統合移転を進めている。完全移転が完了する2018年には、日本最大規模の面積を誇るグローバルハブキャンパスが誕生する予定だ。この地を足掛かりに、九州大学では「躍進百大」というスローガンを掲げ、世界トップ100大学への躍進を目指す。「スーパーグローバル大学創成支援（SGU）」採択で始まったその具体的な戦略とは。

真の実力を知ってもらうための レピュテーション・マネジメント

2011年に創立100周年を迎えた九州大学では、新たな100年に向けて「躍進百大」というスローガンを掲げている。これは、全ての分野において世界トップ100大学に躍進するという目標だ。「スーパーグローバル大学創成支援」のタイプA採択により、その目標はますます現実味を帯びてきた。同大の構想テーマは「戦略的改革で未来へ進化するトップグローバル研究・教育拠点創成」。その英語名**"Strategic Hub Area for top-global Research and Education, Kyushu University"**の頭文字を取ってSHARE-Qと呼ばれている。

SHARE-Qの取り組みとして、教育システムや研究の国際化推進、ガバナンス・制度改革など6つの項目があるが、それらを支えるのが「教育国際化」「研究国際化」「ガバナンス改革」「レピュテーション・マネジメント（RM）」という4つの運営ユニットだ。SGU担当の緒方一夫副学長は、こう説明する。「教育、研究、ガバナンスは他のSGU採択校でも取り組んでいますが、本学の特徴はRMを設けたこと。質実剛健で宣伝下手という体質

から脱却し、本学の本当の姿を知ってもらうために、研究・教育情報の戦略的発信を通じて、国際的評価の向上を目指しています」

どこを対象にどのようなレピュテーションを作るか、RMユニットが司令塔となって統括することで、実際にQSやTHEの世界大学ランキングが昨年実績よりも上向いているという。

外国人留学生と日本人学生が混ざり合う クラス・シェアの試み

対外向けのコミュニケーションを強化する前提には、当然その伝えるべき中身も充実させていかなければならない。

以前からアジア戦略に力を入れてきた九州大学では、中国、韓国、インドネシア、ベトナムなどアジア圏を中心とした外国人留学生が2,000名を超える。全学生に占める外国人留学生の割合は15%以上で、SGU採択校の全国平均を大きく上回っている。そうした環境の中、外国人留学生と日本人学生が一緒に学ぶ授業も増えているが、まだ足りないと緒方副学長は指摘する。「まずは外国語による授業の充実に取り組みます。カリキュラムの1/4程度を外国語による

授業とすることが目標です」

「グローバル30」にも採択された九州大学は、ほとんどの大学院と工学部・農学部の学士課程に英語による授業で学位が取れる国際コースがある。SHARE-Qでは、それを他学部の学士課程にも広げていくという。その目玉といえるのが2018年度に新設予定の「共創学部」だ。既存の学問分野を横断しながら、文系マインド・理系マインドや、多様な方法論を身に付けさせ、実践的な課題に基づいた学修を通じて、イノベーションの創出に取り組むグローバル人材の育成を目的とする学部だ。一学年あたり約100名規模の学部で、外国人と日本人学生のクラス・シェアを多数導入し、英語による授業は格段に増える予定だ。

英語科目の授業以外でも

英語力を高めるE/Jクラスの設置

もう1つ英語環境を拡大していく取り組みに、E/Jクラスの設置がある。これは完全に英語だけではなく、日本語と英語を活用したクラスだ。例えば、15回の授業回数の中で数回は外国人教員が担当する、あるいは授業は日本語だが外国語のテキストを使うなど、さ

まざまな形態が考えられるという。「文部科学省のSGU指標では『外国語による授業』とは言語習得を目的としない科目で、全ての講義回数を外国語により教授するものとしています。しかし国家試験・資格試験に関連する授業もあり、全てを英語に置き換える必然性はありません。それよりも授業科目の内容に応じてE/Jクラスとした方が、学生が興味や関心を持って、外国語で学ぶ目的が明確になり、留学生にとっても日本人学生にとっても教育効果が上がるのではないかと考えました」と緒方副学長は語る。

「英語の授業の中だけで英語を学ぶのではなく、専門科目などの授業で普通に英単語が使われれば、ボキャブラリーの積み上げにもなりますし、表現の豊かさや専門用語の使い方が広がっていくはずです。もちろん学生が留学したいと思ったときに、IELTSなどの試験対策にも有効だと期待しています」

学生たちの意識を変え

世界に目を向けさせるさまざまな取り組み

授業やカリキュラムの見直しによる結果が表れてくるのはこれからの話だが、

すでに成果の見え始めた取り組みもある。SGU採択を見据え、伊都キャンパスではSALC（Self-Access Learning Center）という自律的英語学習支援施設が設置された。これは英語を学びたい学生が自由に出入りできるセンターで、留学生が日本人学生の英語学習の悩みや留学の相談に応える場だ。「SALCはいつの間にか学生たちの間で大人気になり、相談事だけでなく、英字新聞を読みたい、ただ英語で会話がしたいなど、いろいろな目的で利用されるようになりました」と緒方副学長は説明する。正課外での活動にもかかわらず、2015年度の利用者は、前年度3倍の2,722名にも上ったという。

国際化関連の改革で大きな成果を上げたのが、グローバル学生交流センターにおける留学コーディネーターの配置だ。「今までは、海外留学に出る学生を増やすために英語力の向上ばかりに目を向けられがちでしたが、現実問題として申請書や面接における自己アピールの方法が分からなくて試験をクリアできないケースも多々ありました。そこで専門のコーディネーターを配置して、書類の書き方から指導するという

方法をとったわけです」

この施策が功を奏し、文部科学省が官民協働で取り組む『トビタテ! 留学JAPAN』では、日本代表プログラムの合格者数が、累計で全国3位となっている。

自ら課題を見つけ、学んでいける

アクティブ・ラーナー育成のために

九州大学が世界のトップ100大学に入るために真剣に取り組んでいるのが、生涯にわたり自律的に学び続けることができる「アクティブ・ラーナー」の育成だ。そのために同学では、2014年から学士課程において「基幹教育」という新たなカリキュラムを開始した。

「基幹教育は、ものの見方・考え方・学び方を学ぶ教育と位置付けています。専門課程や大学院、研究センターなどの教員が参加して学問の面白さを語り、学生が自分たちの課題を見つけるように促す授業もあります。こうした取り組みでは、他大学よりも先んじていると自負しています」と緒方副学長は自信を見せる。「基幹教育によりアクティブ・ラーナーとしての素養を身に付け、たとえ英語が不得意でも、自分なりの目的を見つけて自分で英語を勉強する状況を作り出せればと思います。これから本学を目指す高校生には、『大学に入って何をやりたいか』ということをまず考えてほしいですね」

「躍進百大」というスローガンのもと、学内の至るところで変化が起こりつつある九州大学。次の100年に向けてどんな大きな変革が起こるのか、楽しみだ。



スーパーグローバル大学構想を担当する
緒方 一夫 副学長（熱帯農学研究センター教授）

Top Global University

スーパーグローバル大学 (SGU)

大学の国際化が進めば
大学入試や高校教育も変わっていく

〔連載〕

思考力・判断力・表現力を育む

ライティング活動のために

第4回
(最終回)

Writing

2020年から次期学習指導要領の改訂や新テストの実施を控え、生徒が自分の言葉で自分の考えを発信する力を高める指導が求められています。4技能を統合した言語活動により、どのようにライティング活動へ結び付けるのか、また、生徒が書いたものをどのように評価すればよいのか。大井恭子先生が「パラグラフ・ライティング指導」についてアドバイスを送ります。



文部科学省は、2020年度からの大学入試センター試験に代わる新テストについて、英語に関しては4技能を測る試験となり、「話す」「書く」に関しては外部の資格・検定試験の活用も視野に入れていることを発表した。これまで以上に「話す」「書く」の指導に力を入れて指導することが求められている。この連載は「ライティング」の分野なので、最後のまとめとして、「パラグラフ・ライティング指導の勧め」を強調したい。まずは、外部の資格・検定試験の代表として実用英語技能検定（英検）のライティングテストを見てみよう。今年度から、2級にライティングが導入された。その評価基準は次の通りだ（http://www.eiken.or.jp/eiken/exam/2016scoring_w_info.html）。

内容	課題で求められている内容が含まれているか
構成	英文の構成や流れが分かりやすく論理的であるか
語彙	課題に相応しい語彙を正しく使えているか
文法	構造のバリエーションやそれらを正しく使えているか

このうちの「内容」に関して、「課題で求められている内容」とはどういうことかをしっかりと理解する必要がある。例えば、次の文[A]は「中学生にとって勉強するための自分の部屋が必要だと思いますか?」という「課題 (topic, prompt)」のもとで書いたある生徒の文章であるが、これには「課題で求められている内容」が書かれていると言えるだろうか。

[A] I have my room and desk. But I can't study hard because no one looks at me. I can use [a] cell phone and looking [at]TV, reading comics. If I go to juku, I study hard for a long time. But in my room, I lose my heart and do other things. I want to study hard because I'm [a]third-year-student. I want to play basketball forever, so I have to study hard and will pass the exam.(生徒の文章を一部改変)

それに対して、[B]の文章はどうであろうか。

[B] I think that junior high school students don't have to have their own rooms. I have two reasons. First, I think talking with your family members in the same room is very important. These days we have shorter time with our family members in a house than in the old days because of work, juku and so on. I think face to face[communication] is a good thing. Second, if you can't solve the problem in the living room, you can ask your family members about [the] problem, but in your own room, you can't ask anyone. Therefore, I think that junior high school students don't have to have their own rooms to do anything.

[A]も[B]も、中学生にとっての勉強と自分の部屋との関係を述べてはいるものの、「課題」では「必要ですか?」と問われている。それに対して、[A]は答えているとは言いがたい。一方、[B]は稚拙な部分もあるが、パラグラフの構成はしっかりしており、つなぎ言葉なども適切に使われている。したがって、上記の評価項目の「内容」と「構成」に関しては、[B]の方が高得点であると言える。実は[B]はパラグラフ・ライティング指導後のものであり、[A]は指導前に書かれたものである。「構成」に関しては、本連載の「第2回目（夏号P.42）」で扱ったので参照してほしい。「分類」の概念を活かして「パラグラフの構成」を考え、さらにそれに基づいて「アウトライン」を書き上げ、そのうえで、適切な「つなぎ言葉」を駆使できると、論理的な文章に近づく。「語彙」と「文法」に関しては、一朝一夕で身に付くものではなく、他の技能とも合わせて実際に使える能力を着実に伸ばしていくよう指導していくことが重要である。パラグラフ・ライティングはもちろん、パラグラフ・リーディングに通じ、さらに、プレゼンテーション（発表）の原稿として欠かせないものである。パラグラフ・ライティング指導を通じて培われた「論理的な文章」を書く力は、どの言語であれ、また、書かれたものか発表かにかかわらず、これからの世の中を生きていく生徒たちにとっては大きなEmpowering（力を与えるもの）になるものであると信じている。



大井恭子 (おおい・きょうこ)

清泉女子大学文学部英語英文学科教授。東京大学文学部英語英文学科卒、New York 州立大学Stony Brook 校大学院言語学科博士課程修了。博士（外国語教授法）。専門は英語教育、応用言語学。特にライティング能力の習得に関し、認知面と文化的背景という観点から外国語としての英語のライティング教育の構築を目指している。

〔連載〕

柴原智幸先生の

プレゼンテーション講座

第4回（最終回）

「生徒の発信力や表現力を高める指導の仕方」

「発信したい」と思う何かを持つ

そもそも、発信力や表現力を高めるには、「発信したい」と思う何かが必要です。つまり、他人に伝えたいメッセージを持てるかどうかですね。そして、それを安心して表現できる場も必要になります。一生懸命表現した途端に、厳しい批判を受けるようだと、「それなら黙っておこう」ということになりますよね。

まず、「発信したい」と思う何かを持つ、ということですが、人間、「自分が好きなこと」であればいろいろと語りたくなるものです。

そこでお勧めしたいのが、私が私淑する明治大学の斎藤孝先生が紹介なさっている「偏愛マップ」。これは、自分の好きなものを一枚の紙に書いたものです。絵を使ってもよし、図を使ってもよし、箇条書きにしてもよし、単に単語を並べてもよしで、好きなものをカテゴリーごとにまとめても面白いですし、逆に好きなものが混んとした状態で存在しているのを俯瞰するのも楽しいです。

初対面の人同士でも、これを見せながら話すと「え！それ好きなんですか。僕もなんですよ！いつからファンになりました?」などと話が弾みます。私は授業のアイスブレイクに使うことが多いのですが、英語での発信力を鍛えるきっかけとしても十分に機能すると思います。Show & Tellの変型版と捉えていただいても構いません。

まずは自分が興味を持ったことに対して思う存分語らせる。ある程度その経験を味わったところで、私たち教員の出番です。教え子が興味を持つ対象を少しずつ広げて行くお手伝いができれば理想的ですね。

「安心して表現できる環境」づくりを

さて、好きなものについて発信したいと思ったとして、それを安心して表現できる場をどう作るかという点も大事になってきます。

これに関しては、指導法というよりは考え方を1つご紹介しておきます。それは、「解あり学習から解なし学習へ」というものです。

テストのように、たった1つの模範解答が存在するような学習、例えば「2+2=□」という数式があったとして、「□には何が入るか?」というようなものを「解あり学習」と言いますが、教えていると私などもついついこちらに傾き

がちです。ただ、本来学びというのは「解なし学習」、つまり「□+□=4」という数式の□の中に何が入るか、ということを考えるのが大切なのです。

ところが、解あり学習に過剰適応してしまっている場合、「2+2=□」レベルの確信がない限り、教え子たちはなかなか口を開きません。ここを何とかしてあげる必要があるのです。

通訳の授業でも「模範解答」を欲しがる教え子がいたので、クラス全員に30秒間でノートに「ねこ」の絵を描かせ、それを比べさせたことがありました。

「隣の人と、ぴったりと重なる、なんてことはないでしょう? それが、通訳の、もっと言えば、『解なし学習』における『答え』なんだよ。『上手・下手』はあるけれども、『正解』の幅がだいぶ広いのは分かったね。自分なりに考えて表現することが大事なんだから、肩の力を抜いて取り組んでごらん」と伝えましたが、要はそのような考え方が大事だと思います。

教え子が口にした英文を最大限生かしながら、必要な手直しをしてあげる。そのようなことを繰り返しながら、「安心して表現できる環境」づくりを進めて行きましょう。

1年間ありがとうございました。これからも一緒に楽しく教えていければと思っています。



柴原智幸 (しばはら・ともゆき)

神田外語大学外国語学部英米語学科専任講師。同時通訳者。NHKラジオ『攻略!英語リスニング』講師。上智大学外国語学部英語学科卒。イギリス・バース大学の通訳翻訳コース修士課程修了後、ロンドンのBBCに入社。帰国後はNHKの放送通訳や「ディスカバリーチャンネル」などでの吹き替え用映像翻訳、通訳養成学校での指導を行う。主な著書に『攻略!英語リスニング 徹底シャドウイングでマスター! 長文リスニング』(NHK出版)、『オバマの英語 徹底トレーニングブック』(アルク)など。

Game & Activity

みんなで「桃太郎」の劇をやってみよう

みんなで夢中になって英語劇を作ってみましょう。
習った英語が物語の中で命を吹き込まれます!

MASUMI 先生の
紹介した英語劇が
見られます



『英語情報』専用アプリで動画が見られます。(アプリの詳細は表紙の裏面へ)

1 新しいフレーズ・単語を体で表現

まるで体操をしているように教えます。例えば “Where are you going ? ” going にアクセントがくるように何かアクションを付けます。そして where が言えない子が多いので “where/どこ/where” (意味を教えてください)。そしてもう一度 “Where are you going ? ” と、テンポを持って教えます。

2 歌の導入

(Michael Row the Boat ashore) のフレーズの替え歌を教えます。

**Peach boy, Row the Boat ashore, Hallelujah,
Doggy dog, Row the Boat ashore, Hallelujah,
Pheasant, Row the Boat ashore, Hallelujah
Monkey, Row the Boat ashore, Hallelujah**



3 Story Telling

この場合のストーリーテリングの目的は2つあります。「ストーリーの流れを把握させること」と、「新しい表現の練習」です。
子供たちが右のようなフレーズを言ってくれそうな雰囲気になったら、一緒に言ってもらいましょう。あくまでもストーリーテリングなので無理やり言わせたり、子供たちの反応を待ちすぎたりすると、せっかくの楽しいお話がつまらなくなるので気を付けてください。高学年になると、まずは様子をうかがうことが多いので、先生が“必死に演じてみる!”ことが大切です。

**Where are you going?
To Demon Island.
Why? To beat the Demon...
Let's go together...**

4 キャスティング

桃太郎、犬、キジ、サルから、子供たちに好きな役を選ばせます。役ごとに椅子を準備し、自分がやりたい役の椅子の前に移動させます。友達と相談したり、長い時間考えたりせず、「自分の意志で自分の役を選ぶ」ということが大切です。もし、誰もやりたがらない役があったら、先生からお願いしてみましょう。子供たちはきっと、やってくれるはずです。

5 シーン稽古

最初からシーンを演じます。最初は先生も物語の中に入るのがコツです。何かの役になり劇を進めていきます。子供たちが言えない台詞がきたら、ただそこで先生としてリピートさせるのではなく、ちょっとボケてみます。例えば Demon という言葉が出なければ、別の言葉を言ったりします。すると子供たちは一生懸命 Demon だということを教えてくれるので、そこであまり自信のなかった子供も Demon とははっきり言えるようになります。
また、ただボーッと立っていると台詞が入りづらくなります。とにかく動く。台詞が出づらいところは体を動かさせましょう。



6 通し稽古

最初から最後まで通して演じます。どこかで失敗してしまっても、とにかく続けます。生徒たちに「台詞は忘れてもいい。間違ってもいい。とにかく前に進むこと」「The show must go on !」を伝えます。



7 発表会

発表会ができるのならベストですが、そうでなくても、とにかく今から特別なことが起こる!という緊張感が大切です。普段の教室でも構いません。この発表会によって子供たちは大きな自信を付けるはずです。



<http://morecolor.com/eiken/peachboy.pdf>

「Peach Boy」の台本はこちらからダウンロードできます。(PDF形式 414kb)

なぜ英語劇? 楽しいからです。子供たちが夢中になるからです。物語の中で言葉が生きてくるからです。そして、子供たちに「みんなでやった!!」という達成感が生まれます。自分に自信が付きます。「え〜劇づくり?」と思う先生もいるかもしれませんが、劇というと何か大袈裟に表現しなければならないという気持ちになりますが、そんなことはありません。ありのままで大丈夫です。コツは生徒に台詞を押し付けたり、ただ無意味に暗記させたりしないことです。夢中にさせることが何より大切です。夢中にさせるために、なぜこの台詞を言うのだろうということを考えさせること。つまり、状況設定をすることです。とにかく一度やってみてください。今まで見えなかった子供たちの姿が見えてくるはずです。



小口 真澄 (こぐち・ますみ)

“夢中になるから英語が話せる” 英語芸術学校 MARBLES 主宰。聖セシリア女子中学校講師、新潟県魚沼市主催 魚沼産☆夢ひかり「キッズミュージカルプロジェクト」演出。全国の小学校にて英語劇ワークショップ「英語DEドラマ@学校」を行う。企業研修に英語劇を取り入れビジネスマンたちとも英語ミュージカルを創る。

Marbles による児童英語指導法などのワークショップ情報はここから。
<http://marbles1008.net/m-5-ws-schedule.html# 0731>



第66回 全英連山口大会レポート

「TSUNAGARI」を全国へ広げ、今後の英語教育の在り方を考える2日間

次期学習指導要領改訂や高大接続改革など、
英語教育を取り巻く環境が大きく変化を遂げようとしているなか、
英語科教員は今後どのような授業をつくっていけばよいのか。

2016年11月11日～12日に山口市で開催された
「第66回全国英語教育研究大会（全英連山口大会）」の様子をレポートする。



『英語情報』専用アプリで動画が見られます。(アプリの詳細は表紙の裏面へ)

コンセプトは「TSUNAGARI」

毎年、各都道府県が持ち回りで開催している全英連大会。今年度は山口県での実施となった。構想から足掛け5年。中学校の教員が中心となって大会実行委員会を組織し、尾羽根公介実行委員長（山口市立仁保中学校 校長）のもと、県内をはじめ中国・四国の英語教育関係者と連携して、準備を進めてきた。

大会コンセプトは「TSUNAGARI」。小・中・高の連携をはじめ、学校間、教員同士、教員と生徒、授業と教材などのつながりを大事にし、大会当日には全国から集まった参加者との新たなつながりが生まれることに期待を込めている。

例年にならい、初日は全体会として、記念講演と授業実演を行い、2日目には2部構成による24の分科会が開かれた。北海道から沖縄まで1200名にも及ぶ参加者が集まり、開会前から2日間にわたる大会の研究発表に期待感から、会場内は熱気に包まれていた。

授業改善のヒントを山口から全国へ

初日の全体会は、山口市民会館大ホールを会場に開催された。開会に先立ち、全英連の磯部篤会長があいさつ。「全英連大会は、よりよい授業づくりのために各校種が実践されている指導の工夫が発表され、ご参加いただいている先生方の課題解決の一助

となるものと考えております。今大会は『TSUNAGARI』をコンセプトとして各校種間の連携を大切に、児童生徒と授業で扱う教材のつながりの在り方等、さまざまな『TSUNAGARI』について探求していくことを目的に開催されます。参加者の皆さまにおかれましては、講演、授業実演、分科会から吸収されたことを持ち帰り、地元や各学校にぜひお伝えいただくとともに、引き続き、今後の英語教育の発展のためにご尽力いただけることを願っております」と述べた。

続いて、文部科学省初等中等教育局教育課程課・国際教育課の向後秀明教科調査官が祝辞を送る。「I have to confess I am a bit tired because of the long trip to Yamaguchi from Tokyo. However, travelling such a long distance has only reinforced my conviction of the importance of this meeting.」と話し始めて会場を沸かせながら、2015年2月に全英連が開催した「第8回 全国高等学校英語スピーチコンテスト」の第1位に輝いた一ノ瀬メイさんが、2016年8月のリオパラリンピックの水泳競技に出場したことを紹介した。スピーチコンテストで一ノ瀬さんの力強いスピーチ映像が映し出されると、参加者たちはスクリーンに見入っていた。そして、向後教科

調査官は“One thing we can be sure of, however, is that all students can obviously broaden their horizons with English. The question is, though, do we really acknowledge this when we teach them?”と会場に呼び掛ける。さらに、自身のエピソードも交えながら、児童生徒が英語を学ぶ意味について言及し、“Now we are facing a variety of social changes, and what was correct yesterday might be wrong today. I understand that teachers are getting busier and busier. As professionals, however, we always have to think of what we can do, and what we can do better. I hope this conference will serve as a great opportunity for all of us to discuss what we can do better for our students in the field of English education. I wish you all the best of luck in your important mission, and I thank you for your dedicated ongoing efforts with the youth of our nation!”と締めくくった。

つながりを意識して授業をつくる

関西外国語大学の中嶋洋一教授が講師を務める記念講演の演題は、「“TSUNAGARI” through Backward Design」だった。中嶋教授は2年にわ

たり、県内の小・中・高の教員を対象として、バックワードデザインで授業をつくることの大切さを指導してきた。そして、今大会の記念講演においても、「ゴールから逆算して、英語を英語のまま理解すること、理解したことを整理して自分の言葉で分かりやすく表現することなどをルーティン化していくことが、英語力を高める鍵になる」とし、そのためには「指導者が『最後をイメージして物事を準備しておくこと』が不可欠である」と主張した。そして「教師は、どんな時もstudyとlearnの違いを認識しておく必要があり、授業の最後はstudyでなく、learnで終わらなければならないが、本当にlearnできたかどうかを確かめる活動が用意されていないことが多い」と続けた。講演の最後には、子供

たちとどのようにつながるか、世界とどうつながるかを考えさせる映像を通じて「つながり」を意識することの大切さを訴え、「皆さんもゴールを設定すること、それに向けてのScaffoldingを楽しんでください。皆さんのクラスの子供たちが英語好きになり、将来魅力的な日本人になっていくことを祈っています」とメッセージを送った。講演が終わった瞬間、拍手が鳴り止まず、感動の涙を浮かべる参加者たちの姿が目立った。

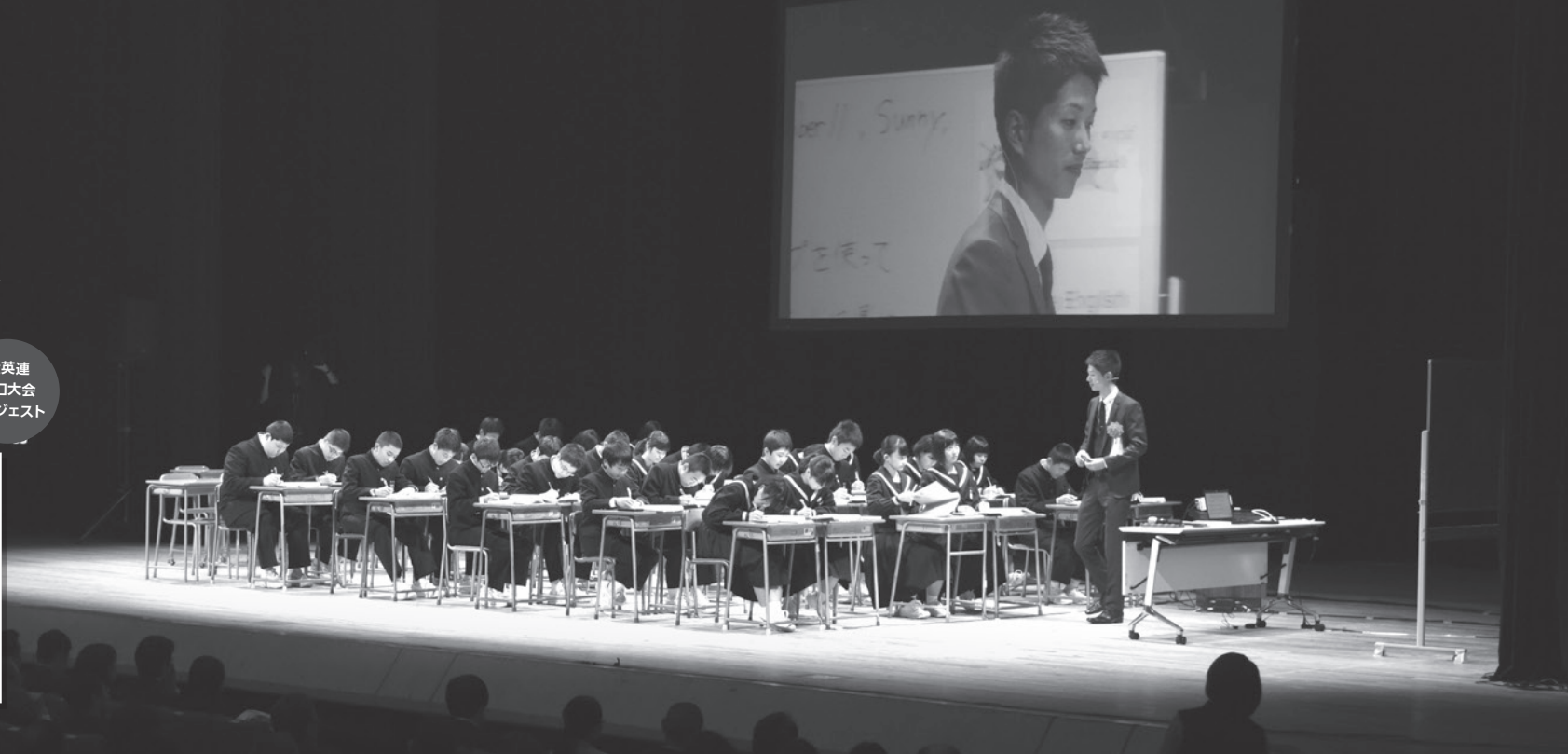
TSUNAGARIが深まった2日間

2日目は会場を山口学芸大学・山口芸術短期大学へ移し、2部構成での分科会開催となった。山口県内をはじめ、岡山県や広島県、香川県など隣県からも発表者を集めており、どの会場でも

授業改善に取り組んできた実践事例を紹介しながら、参加者と活発に意見を交換し、次期学習指導要領に向けて、今後どのような指導をしていくべきかを論じ合っていた。

全英連山口大会は、興奮さめやらぬままに幕を閉じた。参加者たちは、大きな変革期にある今こそ、地域を超えた教員同士のネットワークを大切に、日本全体で英語教育を支えていこうとの思いを強め、「TSUNAGARI」を深めて、会場を後にした。

2017年度的全英連大会は、「新潟から世界へ！新潟から未来へ！～交流・喜び・成長あふれる英語教育の推進～」をコンセプトとして、11月22日～23日に新潟県で開催される。英語情報でも随時、最新情報を紹介していく。



全英連
山口大会
ダイジェスト



記念講演
関西外国語大学 中嶋 洋一 教授



『英語情報』専用アプリで動画が見られます。(アプリの詳細は表紙の裏面へ)

中嶋先生の
メッセージは
こちら

英語を使う喜びを感じ、 進んでコミュニケーションを図ろうとする児童の育成

～Synergy 効果を生み出し、人・社会・未来とつながる英語教育の推進～

今大会において、小学校は授業実演でなく、ビデオ発表という形式で実践を紹介した。発表者は、光市立室積小学校の山田浩史先生だ。文部科学省の「英語教育強化地域拠点事業」の指定を受け、全校体制で進めている外国語活動と英語科の研究から、6年生の英語科の取り組みを発表した。

必然的に言葉が出るような場面を提供

室積小学校では、進んでコミュニケーションを図ろうとする態度を養うことをねらいとして英語教育に取り組んでいる。このたびの発表に際しては、「オーストラリアの友達へ送る学校紹介ビデオを作成する」というゴールを設定した。

山田先生によれば、授業中に友達同士で会話する場面を多く取り入れながらも、児童が自分の言葉に自信を持てず、声が小さくなったり、会話が途切れてしまったりする傾向がある。そこで、必然的に言葉が出るようなリアリティのある教材（場面）を提供することで、児童が自ら「聞きたい」「話したい」という意欲を持ち、英語を使う喜びを感じながら自信を持ってコミュニケーション活動ができるようになるのではないかと考え、テーマを設定したという。

この単元は、今までに学習した内容を

『英語情報』専用アプリで動画が見られます。
(アプリの詳細は表紙の裏面へ)



駆使しながら、実際に活用することができるかを試すプロジェクト単元となっている。児童は6月に自己紹介である「This is Me!」、7月に室積地域を紹介する「This is Murozumi!」を学習しており、今回は、「This is Our School!」と題して、オーストラリアの友達に学校を紹介するという活動を通し、外国の人と交流を図る楽しさを味わうことをねらいとする。発表されたのは全5時間のうちの4時間目にあたる授業だった。オーストラリアへ送るビデオ作成のためのリハーサルを行い、どのように伝えれば相手により伝わりやすい表現になるかを考えながら練習するという学習だ。

相手により分かりやすく伝える 表現を考える

授業は、Warm up～Practice～Activity～Look backの流れで進む。「A picture of my friends」の歌からスタートし、「OSARAI TIME」では前時で親しんだ“What ... do you like?” “I like ...”の表現を使って、友達と会話をする。児童はあいさつから会話を始め、相手の発言に対してリアクションを大切に、英語を使って友達とコミュニケーションを取ることを楽しんでいた。続く「DAITAI TIME」は、日本とオーストラリアの学校生活についてお互いに質問し合うオー

ストラリアの先生とALTの会話から、“だいたいどのような内容か”を聞き取る活動だ。

そして、児童が自ら調べて作成した絵カードを使って、sofaやballなど、学校にある物の単語を理解したのち、4人ずつのグループで絵カードを使ってかるたゲームをする。全員が頭に両手を置き、“What’s that?”“It’s a sofa.”といったフレーズを聞いてカードを取り合う。リズムに乗せてテンポよく進めることで、楽しみながら自然に英語を発する工夫だ。

一通り活動を終えると、いよいよビデオ作成のためのリハーサルに移った。まず、他のクラスが撮影した映像を視聴し、山田先生は児童に、相手により分かりやすく伝えるためには、どのような表現が必要かを考えさせる。すると、会話になるようにリアクションを入れる、ジェスチャーを使うと分かりやすいなどの意見が出た。注意点が分かったところで、リハーサル開始。どのグループもジェスチャーを交えて大きな声で話したり、絵カードを指さして説明したりと工夫しながら、児童自身がタブレットで動画を撮影した。

最後に、授業を振り返って自己評価をするとともに、この日使った単語で印象に残った単語、書きたい単語を視写し、次回は実際の校内の場所で撮影することを伝え、本番への意欲を高めて授業を終えた。

アクティブ・ラーニングをベースとした学習指導の工夫

～「聞くこと・話すこと」の領域を重視した取組～

野坂先生とともにステージに立ったのは、住吉中学校の2年1組の生徒32名だ。単元で扱う町紹介に関連させた「プレゼンマップを使って自分の調べた山口県について語り合おう」という本時の目標のもと、ペアやグループでの活動を通して、相手に伝えるための表現や相手の発言に対する応答の表現を身に付ける。

身近なテーマについて

英語でやり取りする場の提供

住吉中学校では1年次から授業冒頭の帯活動を、「創造的な発話につなげるためのもの」と位置付け、ペアでの練習に段階的な負荷を与えた言語活動を実践してきた。例えば、Q&A形式で単にやり取りをするのではなく、質問された内容に対して、応答者はさらに一言加えて答えたり、自分のこととして答えたりする発展的な活動に取り組んでいる。そして、今大会での実演にあたり、野坂先生は、インプットからインテイク、そしてアウトプットにつなげていく指導過程を帯活動の中心に取り入れ、目標とするプレゼンテーションへの指導の在り方を探ってきた。

本単元では、既習事項 (look + 形容詞、未来を表す be going to, SVOO/SVOC 構文、不定詞、助動詞、接続詞、動名詞、There is) などを活用し、自分たちが住む山口県についてプレゼンマップを使って発表したり、友達の発表を聞いて質問し合ったりすることができるようになることをねらいとする。身近なテーマである山口県について語り合うことで、生徒にとっては、英語を使って話題を共有し、意志疎通の喜びや達成感を得る機会となる。

全7時間のうちの最終時にあたる本時は、ペアやグループでの発表が学習活動に

【単元名】

Presentation 2 町紹介 (東京書籍『New Horizon 2』より)

【単元の目標】

Unit 6までに学んだ表現を使って、自分が調べた山口県についてプレゼンマップを用いて発表したり、友達の発表を聞いて質問し合ったりすることができる。

設定された。授業は帯活動～Pre-task～Task～Post-task～自己評価の流れで進む。冒頭の帯活動では、まず生徒2名が前に出て、Taskと関連する町紹介のやり取りのモデルを見せる。そして、クラス全体でペアを組んで、1分間やり取りして、10秒間コメントをし合うという活動を行った。

キーワードや写真をたよりに

自分の言葉で発表

その後、野坂先生は、ある生徒がプレゼンテーションをしているモデル映像を流して、なぜ良いプレゼンテーションなのかを生徒たちに考えさせ、発表し合った。そして、eye contact, gesture, clear voice, reactionの4つのポイントを確認し、ペアで、各自が1分30秒で発表して、15秒でコメントをし合うようにと指示を出した。発表する際はあらかじめ原稿を用意するのではなく、調べた内容について写真やキーワードをもとに説明する。発表を聞く生徒は、その内容に対する意見やもっと知りたいことなどを相手に伝え、発表者が応答する。聞くことと話すことを重視し、コミュニケーションを取る際の態度の育成を目指した活動だ。

こうしてペアでの活動をしたのち、次は6つのグループに分かれ、自分で作成したプレゼンマップを見せながら、メンバーに向け

て1分間発表して、30秒間の質疑応答をした。生徒たちが活動している間、野坂先生は各グループを回り、発表に耳を傾けながら質問を投げ掛け、発表者の即興的な応答を求め、聞いている生徒たちにどのようなコメントをすればよいのかを示していた。グループでの活動が終了すると、代表生徒2名を指名し、全体の前でプレゼンテーションをさせた。最初の生徒は柳井市の金魚ちょうちんや銘菓について、次の生徒は自分たちが住む周南市の見どころについて紹介した。野坂先生は堂々と自分の言葉で表現し、笑顔で発表することができた生徒たちを褒め、どちらの町に行ってみたいかと生徒たちの意見を求め、その理由も尋ねた。そして、各自が自己評価シートに記入し、“Did you enjoy today’s class?”との先生の投げ掛けに、“Yes!”という大きな声で答えて授業は終了した。

『英語情報』専用アプリで動画が見られます。
(アプリの詳細は表紙の裏面へ)



高等学校 授業実演

Report

山口県立山口高等学校
富山 貴之先生

プロジェクト

― 教科書の内容に関する調べ学習とプレゼンテーション

山口高等学校の理数科2年8組39名の生徒たちが、富山先生とともに授業実演に臨んだ。日頃から学習への意識が高く、ペアワークやグループワークに積極的に取り組んでいるという生徒たちは、教科書で学んだ宇宙探査機「はやぶさ」について、グループ発表を行い、聞き手とのやり取りを楽しんでいた。

生徒自身が調べ、発表し、意見交換をする

山口高等学校では、英語の授業の中で「プロジェクト」に取り組んでいる。これは、教科書の内容に関して、グループで興味関心のある分野について調べ学習を行い、英語でプレゼンテーションし質疑応答する活動だ。今大会に向けて富山先生は、「英語で効果的なプレゼンテーションおよび質疑応答ができる」ことを目標とし、そのための効果的な方法を探ることを研究テーマに取り組んできた。

生徒たちは1年次からプレゼンテーションの技術を磨く活動に取り組んでいる。最初に先輩たちのプレゼンテーションや上手なプレゼンテーションのビデオを見て、それをロールモデルとしてゴールに設定し、効果的な表現手法を身に付けてきた。富山先生は、英語で活発に質疑応答するには、「英語力だけでなくクラス

の雰囲気作りが大切」であると考え、間違いを恐れず、自由で活発に英語で発言できる雰囲気づくりに努めてきたという。

この日は2グループが「宇宙探査機はやぶさの帰還」に関するプレゼンテーションを行うが、他のグループも他のレッスンでプレゼンテーションを行っている。

インタラクティブなプレゼンテーション

“Everybody, are you ready for the class?”という富山先生の呼び掛けに、“Yes!!”と大きな声で生徒たちが答え、授業がスタート。授業は生徒が主体となって進めていく。この日は11月11日。生徒が導入のスピーチで提示したトピックは、ポッキーの日だ。「バレンタインデーにポッキーを渡しては?」「恋人に渡すならSukky、友達にはTomocky などと提案して、クラスも会場もどっと沸いた。その後、スクリーンに教科書の要約が表示され、“When was Hayabusa launched?”などといったQ&Aによって内容理解を確認し、プレゼンテーションへ活動に移した。

最初のグループは、「はやぶさとははやぶさ2の違いは何か」とクラスに問い掛け、その場でペアで話しあったことを発表するように促す。そして、「恐竜はなぜ絶滅したのか」を尋ね、小惑星の衝突の可能

性に話題を展開した。さらに「2029年に小惑星が地球に衝突する可能性が高い」ことに触れ、それを避ける方法をクラスから聞き出し、具体的方法を2つ提示してプレゼンテーションを終えた。

するとそれまで生徒たちのやり取りを静かに見守っていた富山先生が「発表を聞きながらメモしてきた内容を参考にして、感想や意見、プレゼンテーションの良かった点と改善点などについて、ペアで話し合ってください」と指示する。その後、数人の生徒が発表し、ある生徒は「非常時に備えて、避難訓練を日頃からしっかりしておくべき」だと、ユーモア交じりに意見を述べていた。

2つ目のグループは、はやぶさ以外の宇宙探査機について紹介し、続けてははやぶさで使われているThermal Blanket（断熱材）についてプレゼンテーションした。県内の企業が断熱材の製作に携わっていることに言及し、取り寄せたサンプルをクラス全体に披露した。

授業の最後に富山先生は「皆さんは今日、英語力を向上させ、友達と英語でコミュニケーションを図り、意見や考えを英語で表現しようとがんばりました。このような大舞台で!! それはとても勇気がある行動です。そのような自分を誇りに思ってください」と生徒たちを笑顔で褒めて授業を終えた。

【単元名】

Lesson 4 Mission Completed – The Story of Hayabusa –
(東京書籍『PROMINENCE English Communication II』より)

【単元の目標】

- ①教科書の本文を読んで、その内容を正確に理解することができる。
- ②英語を用いたコミュニケーション活動に意欲的に参加できる。
- ③プロジェクトを行い、教科書の内容をさらに発展させることができる。

『英語情報』専用アプリで動画が見られます。
(アプリの詳細は表紙の裏面へ)

富山先生の
発表の様子は
こちら



2日目 分科会

Report



中国・四国地方の実践事例を分科会形式で発表

24の分科会から、

授業改善のヒントを学ぶ取る

大会2日目は分科会。山口学芸大学・山口芸術短期大学に会場を移し、中国・四国地方の小・中・高の先生方が、自身の実践に基づく研究発表を行った。分科会は1時間30分ずつ2部構成で行われ、小学校4名、中学校10名、高等学校12名、そして初日に授業実演をした中・高の先生各1名による全28名の先生が発表した。発表した先生方はそれぞれ、自身や学校が抱える課題を提示したうえで、どのようなテーマに基

づいて研究を行い、課題解決のためにどのように取り組んできたか、その成果について言及した。授業での言語活動の様子を撮影した動画なども交えながら実践事例を紹介する発表者も多く、なかには、英語での発表を行う先生もいるほか、授業を撮影したDVDによる発表を行う先生もいた。

分科会で扱うテーマは多岐にわたる。小・中・高連携やアクティブ・ラーニング、技能統合型の言語活動、協働的な学び、学習意欲を高める指導、思考力や発信力を意識した指導など、次期学習指導要領を見据

えた内容も多く、どの分科会も満席で熱気にあふれていた。分科会では、研究発表を一通り聞いた後、参加者が発表者に対して質問をしたり、自身の経験を交えて意見を述べたりする時間が設けられている。また、指導助言者が研究内容について解説したり、アドバイスを送ったりもする。そのような発表を聞きながら、参加者たちは、発表者が数年にわたって実践・研究してきた成果から、今後の授業改善のヒントを1つでも多く学び取ろうと、熱心に聞き入り、メモを取っていた。

つながりを結び、山口から新潟へ

～山口大会実行委員長から新潟大会実行委員長へのバトン



大会を通じて深まったつながりを大切に

第66回全英連山口大会 実行委員長
尾羽根 公介 先生 (山口市立仁保中学校 校長)

私たちはこの5年間の準備期間を通して、小・中・高のつながり、各校種での横のつながりを深めてきました。また、大会当日を迎えて、他県の先生方とのつながりも深まったものと思います。さらに、記念講演をしていただいた中嶋洋一先生とのつながりも深まり、今後もご指導いただきたいことはまだいろいろとございます。このようなつながりを大切にしていきたいと思います。山口大会は幕を閉じ、次は来年の新潟大会です。「新潟から世界へ! 新潟から未来へ!」という、山口大会の「TSUNAGARI」よりも大きなコンセプトのもとで、どのような大会が行われるのかを今から期待しております。

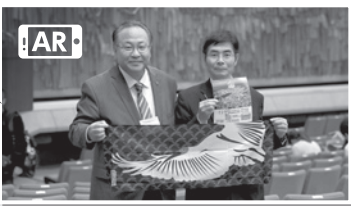


一人一人の力をつなげ、結び、大きな流れを

第67回 全英連新潟大会 実行委員長
小野島 恵次 先生 (新潟県立高田高等学校 校長)

秋晴れの空の下、「TSUNAGARI」という素晴らしいコンセプトで山口大会が開催され、山口の先生方の努力と深いつながりを感じました。新潟はご存知のように米どころです。そのお米を握って作る「おむすび」は「結ぶ」という言葉につながります。山口から引き継いだ「つながり」をご縁として受け止め、「おむすび」のように温かく結んでいきます。全英連大会は全国の先生方が一堂に会し、より良い授業をつくっていく仲間と出会い、新たなつながりが生まれる場です。これからの英語教育のためにも、子供たちの未来のためにも、一人一人の力をつなげ、結び、大きな流れをつくっていきましょう。

実行委員長
たちからの
メッセージ



帰国後の取り組み報告

REPORT

中学校英語教員研修

離島へき地校のメリットを生かした
アクティブ・ラーニング

米国
モンタナ州立大学

沖縄県 座間味村立座間味中学校 教諭 有銘 眞吾

課題

生徒間の英語力の差、少人数学級における言語活動をどうすべきか

①生徒間における英語力の差にどう対応するか、②少人数学級において効果的なコミュニケーション活動はどのようなものか、という2点が、一学級の平均生徒数が6名の離島校に赴任後の課題でした。難易度を変えたワークシートを何種類か用意したり、放課後に補習をすることで課題①に辛うじて取り組んでいましたが、課題②に対しては、コミュニケーション活動は行うものの、少人数に対する対策は講じることができていませんでした。

帰国後の
変化

離島へき地校でしかできない実践に取り組む

モンタナ研修では、アクティブ・ラーニングを通して生徒の活動参加率とモチベーションをどのように高めるかを学びました。その理論をどう実践していくか考えていくなかで、離島へき地校には大きな2つメリットがあると気付きました。以下にそのメリットを生かした実践を記します。

メリット1 島にはネイティブスピーカーがたくさんいる

座間味島は観光地であることから、年間を通して多くの外国人観光客が訪れます。中学2年生の題材である「道案内」を、実際に彼らを相手に行うことでAuthenticな活動を目指しました。またその活動を「島内英語ウォークラリー」と銘打ち、中学3年生に企画・立案の役割を与え、ウォークラリーの指令の1つに「道案内」を含むことによって、この題材を学年をまたいで取り組める活動にしました。アクティブ・ラーニングのポイントの1つである「活動参加率をどう高めるか」という課題を達成するため、生徒一人一人に役割を与え、活動に対するモチベーションを高めることを心掛けました。3年生4名はPlanerとして、それぞれが異なったルートと指令を企画し、英文で指示書と地図を作成しました。2年生の各グループは、Leader、Reader、Recorder、Primary communicator、Photographer、Time keeperを設置し（生徒自身が必要な役割を考えた）、生徒一人一人が役割に責任を持って活動に参加できるようにしました。また、島で働くネイティブスピーカーに、各チェックポイントの重要人物として、生徒に次の指示を出してもらうなどの協力をしていただくことで、生徒が本物の英語に触れる時間を増やしました。



メリット2 生徒一人一人の活動時間を長く確保できる

少人数であることから、コミュニケーション活動の時間を長く取ることができたり、日常的に校外へ学習に行くことができていきます。例えば、ネイティブスピーカーが経営する飲食店を活用して、中学1年生ではお店でハンバーガーの注文や食事をする活動、中学2年生ではピザを電話で注文し、受け取り、支払いをする活動も行いました。単元の目標の中に、実際に英語を使用する場面が含まれており、計画や準備段階から生徒が意欲的に取り組んでいました。

今後の
展望

大切なのは、生徒が何を学んだか

モンタナ研修は私のアクティブ・ラーニングの第一歩となりました。「教師が何を教えたか」ではなく、「生徒が何を学んだか」。アクティブ・ラーニングの目標として「自律した学習者を育てる」ことが大切であると学びました。“Make students busy!”この言葉がアクティブ・ラーニングの肝であると信じ、生徒の活動参加時間や英語使用時間が教師のそれを大きく上回る授業を心掛けていきます。生徒が授業者となって、英語で英語を友達に教えている風景を見ることができれば最高です。

2015年度も中学校は米国・モンタナで、高等学校は英国・ケンブリッジで2週間の研修を行った。

参加者たちは、研修に参加するにあたり、どのような課題を持ち、研修で何を学び、その成果を現在どのように生かしているのか。

帰国後の取り組みをレポートする。

REPORT

高等学校英語教員研修

世の中に広く関心を持ち
社会に貢献できる人間を育てるために

英国
ケンブリッジ大学

新潟県立長岡高等学校（研修当時：新潟県立三条高等学校） 教諭 湧井 知恵

課題

生徒の英語力を高め、世界へ目を向けさせることが必要

研修以前の授業では、生徒が楽しく表現活動することを重視し、生徒たちが関心のある話題を中心にペアトークやディスカッションの実践をしていました。しかし、ケンブリッジ研修において「日本の生徒たちのほとんどが英語の4技能全てにおいてCEFRのA1、A2レベルにとどまっている」ということを知り、A1、A2からB1レベルに上げるには、英語運用能力の向上だけでなく、生徒たちに社会や世界へ目を向けさせる必要があると強く感じ、以下の2つの実践を試みました。

帰国後の
変化

生徒が社会の事象に関心を持てる活動を取り入れる

【実践例1】 新聞記事の紹介活動

授業の最初の10分間を使い、自分の興味・関心のある記事をペアの相手に英語で説明します。新聞の切り抜きや、インターネットで検索した記事を見せながら、概要を説明した後、自分の意見を述べます。聞き手は、記事の内容と相手の意見をRetellingした後、自分の意見を述べます。話し手が準備をしてきた事柄を話す一方で、聞き手は全て即興で述べるので、非常に集中して取り組みます。対象生徒は受験を目前に控えた高校3年生であり、国内外の出来事に対してアンテナを張り、自分の意見を持つことの重要性を感じています。将来の進路に関する記事や、話題になっている記事の中でも自分が話し易いものを選ぶことができるので、生徒は予想以上に生き生きと取り組んでいました。



【実践例2】 ペアによるスピーキングテストの実施

この実践は、ケンブリッジ英検のスピーキングテストからヒントを得て行いました。教師と生徒1対1ではなく、4人グループでお互いにペアを組み、評価者と受験者に分かれます。受験者は、2人で協力しながら与えられた課題解決に向けて話し合います。評価者は、2人の話し合いの様子をそれぞれ評価します。評価においては、Task AchievementとTeam WorkなどのSocial Skillを重視しました。この評価法においては、個人の英語力だけではなく、人と協力して答えを導き出すというコミュニケーション能力が評価されることになり、生徒の社会性を育むことにつながる可能性を感じています。

トピックは、難民問題です。課題を「個人」レベルでできることからスタートし、次に「地域社会」で、そして最後は「日本」が何をすべきかについて話し合いました。事前活動として、日本語で難民に関する新聞記事を読み、ペアでBrainstormingをしました。また、テキストの英文から使える英語の表現を探すことに加えて、会話を継続するために必要な表現を学びました。アンケートには「普通のディベートやディスカッションよりも、自由に意見を表現でき、友達と助け合いながらできるので楽しい」、「互いに評価するので真剣に取り組める」など、多くの生徒が前向きな意見を書いていました。

今後の
展望

人を育てる授業づくりをしていきたい

私は、英語教育の真の目的は「人づくり」にあると考えます。英語の授業を通して、社会に貢献できる人間を育てたいと願っています。そのためにも、仲間と議論し、互いに教え合うなど人との関わりを通して学ぶ機会を多く与えるとともに、個人の身近な事象だけではなく、世の中に広く関心を持ち、中身のあるコミュニケーションを図ることができる生徒の育成を目指した授業づくりを心掛けていきたいと思います。

Evaluation Sheet					
観 点		評 価 基 準		A の 満 点	B の 満 点
Speech	1 Volume	Spoke loud enough Yes = 1 No = 0		/1	/1
	2 Fluency	Could speak smoothly with proper pronunciation Yes = 1 No = 0		/1	/1
	3 Clear logic	Could say his or her ideas clearly and logically Yes = 2 So, so = 1 No = 0		/2	/2
Content	4 Task achievement	Could reach a conclusion with two reasons Yes = 2 So, so = 1 (only one reason) No = 0 (No reason)		/2	/2
	5 Non verbal communication	Could use appropriate eye contact and gestures to show willingness to speak Yes = 1 Not good enough = 0		/1	/1
Attitude	6 Team work	Could have a helpful and respectful discussion Yes = 2 So, so = 1 No = 0		/2	/2
	7 Leadership skills	Could elicit partner's opinions by asking and responding to deepen their discussion Yes = 1 No = 0		/1	/1
	Comments				Total Scores
Class _____ No. _____ Evaluator's name _____ Student A No. _____ Name _____					



わたしのオススメ本

英語教育に携わる皆さんにオススメの書籍をご紹介します。

今回は、CLASSREPORTで取材に訪れた学校の先生方から、
明日からの授業づくりに役立つ絵本や書籍をご推薦いただきました。

1 『英語でもよめる くまさんくまさんなにみてるの?』

ビル・マーチン（文）、エリック・カール（絵）、信成社編集部（訳）
信成社 定価（本体1,400円＋税）
2006年10月刊行



山梨県 韮崎市立韮崎北東小学校
矢巻 利之 先生

この本は、くまからスタートし、鳥、あひるなど、「なにを見てるの?」と問いながら、次々と動物たちが出てくる絵本です。しかも、それらの動物たちにはさまざまな色がついています。「blue horse」「purple cat」など、個性あふれた動物が登場してきます。また、「Brown Bear, Brown Bear, What Do you see?」と問い掛けたり、子供たちと一緒にリズムよく発音したりしながら、お話を読み進めていくことができます。子供たちが「次は何が出てくるんだろう?」と想像を働かせながら、絵本に親しめる内容です。お話を読むことで、色や動物などの単語を、楽しみながら学習することのできる絵本であるとともに、読み終わった後も、クイズを出したり、オリジナルの動物を創作したりと、幅広く学習に活かすことのできる教材です。

2 『高校教師のためのアクティブ・ラーニング』

西川純（著）
株式会社 東洋館出版社 定価（本体 各2,100円＋税）
2015年10月刊行



佐賀県立佐賀農業高等学校
谷口 広賢 先生

私の勤務する佐賀県立佐賀農業高等学校は、2016年4月、文部科学省よりSGH（スーパーグローバルハイスクール）の認定を受けました。私は異動の内示を受けた3月28日にその事実を知り、その4日後の4月1日から怒涛の日々を送っています。さまざまな用語が飛び交うなか、あらゆる会議の中で「アクティブ・ラーニング」の導入の必要性を痛感した私は、先輩方の薦めによってこの本を手に入れました。本書は、アクティブ・ラーニングの入門書として非常に分かりやすく読みやすい本です。しかも、教科ごとの実践例も掲載しており、実際に英語科としてどのようなことから始めればよいか、非常に参考になりました。もちろん、これから実際に全ての授業をアクティブ・ラーニングに切り替えるためには、もっと知識を蓄える必要があります。本書は、「自分にもできるんじゃないか」という自信を持たせてくれた一冊でした。

Present!

本コーナーでご紹介した書籍を読者の皆様へプレゼントいたします。

ご希望の書籍の番号と下記の必要事項をご記入のうえ、P.55のFAX申込用紙またはEメールにて、『英語情報』編集部までご応募ください。

- ① 氏名 ② 所属（勤務校名）・役職 ③ 連絡先（住所、電話番号、メールアドレス） ④ ご希望の書籍番号
⑤ 今号で興味深かった記事とその理由 ⑥ 今後、本誌で取り上げてほしい内容や意見

抽選で各1名様にご希望の書籍を差し上げます。皆様からのご応募をお待ちしております。

応募締切 **2017年3月31日（金）** 応募方法 03-5439-6879 eigojoho@morecolor.com

※当選者の発表は商品の発送をもって代えさせていただきます。応募時に記載していただいた個人情報は、本件以外の目的には使用いたしません。

わたしのオススメ本プレゼント

FAX申込用紙

英検 英語情報編集部宛



03-5439-6879

P.54でご紹介した書籍のうち、ご希望の書籍の番号に○をして、下記の必要事項をご記入のうえ、
FAXにて、『英語情報』編集部までご応募ください。

ご希望の書籍のいずれかに○印をご記入ください。

1 『英語でもよめる くまさんくまさんなにみてるの?』	2 『高校教師のためのアクティブ・ラーニング』
---------------------------------------	--------------------------------

氏名	(氏) フリガナ	(名) フリガナ
	様	
所属	勤務校名	役職
連絡先	住所 - 都 道 府 県	
	電話番号	

※当選者の発表は商品の発送をもって代えさせていただきます。応募時に記載していただいた個人情報は、本件以外の目的には使用いたしません。

1. 『英語情報 冬号』で興味深かった記事は何ですか？ 該当するものの番号に○をつけてください。（複数回答可）

- | | |
|----------------------------|--------------------------------|
| 1. NEWS & TOPICS | 10. 海外進学「武蔵高等学校中学校」 |
| 2. 特集「児童生徒の学習意欲を高める10の方策」 | 11. SGH「愛媛県立松山東高等学校」 |
| 3. 特集事例 CLASS REPORT | 12. SGU「九州大学」 |
| 4. CLASSROOM ENGLISH!!! | 13. 思考力・判断力・表現力を育むライティング活動のために |
| 5. 英語で授業7つの鉄則 | 14. プレゼンテーション講座 |
| 6. 大学入試から変わる日本の英語教育 | 15. 夢中になれるGame&Activity |
| 7. 次期学習指導要領に向けて | 16. 全英連山口大会レポート |
| 8. Information「英検4技能化への対応」 | 17. 2015年度英検英語教員海外研修「帰国後の取り組み」 |
| 9. TEAP Hot News!「愛知大学」 | 18. わたしのオススメ本 |

2. 上記の記事が興味深かった理由がありましたら、記事の番号とともにご記入ください。

3. 今後、本誌で取り上げてほしい内容やご意見がございましたらご自由にお書きください。

Information

Cover Photo :

葦崎市立葦崎北東小学校 教諭 矢巻 利之
倉吉市立東中学校 教諭 山根 晃治
佐賀県立佐賀農業高等学校 教諭 谷口 広賢
九州大学 副学長 緒方 一夫
(スーパーグローバル大学担当熱帯農学研究中心教授)

編集後記

今号は「児童生徒の学習意欲を高める10の方策」を特集し、授業を通じて、児童生徒の学習意欲を高めている小・中・高等学校の取り組みを事例としてご紹介しました。今回ご紹介した倉吉市立東中学校は2016年10月21日に起きた鳥取中部地震の震源地にある学校でした。編集部は取材中にその地震に遭遇し、取材を中断して、先生や生徒とともに避難しました。そして約1カ月後、同校のご協力のもと、再び取材をさせていただく機会を得ました。震度6弱を経験し、体育館は崩壊の恐れから立ち入り禁止となり、給食再開のめどが立たない状況にある生徒たちですが、再び訪れた日には、県内から応援メッセージも寄せられ、教室には生徒たちの笑顔が輝き、元気に明るく英語の授業を受けていました。これも先生方が温かく生徒の学びを見守る姿勢によるところが大きく、児童生徒の学習意欲は先生方の支えのもとで高まることを実感した取材でした。

『英語情報』編集部一同



『英語情報』専用アプリで動画が見られます。
(アプリの詳細は表紙の裏面へ)

英語情報 2017 冬号

2017年1月1日発行

発行 公益財団法人 日本英語検定協会
総務部 総務課
〒162-8055
東京都新宿区横寺町55

編集統括 株式会社モアカラー
アートディレクション・制作 株式会社モアカラー
印刷 日新印刷株式会社
製本 有限会社穴口製本所

©無断転載、複製を禁じます。

©2017 公益財団法人 日本英語検定協会

英検試験問題と解答のウェブサイト公開のご案内

公益財団法人 日本英語検定協会は、より広範な情報公開と、サービスの質的向上を図るべく、一次試験問題を英検ウェブサイトにて公開するサービスを行っております。**一次試験日から約1週間後に問題を提供いたします。**英検ウェブサイトのURLは、下記の通りです。

英検試験問題 <http://www.eiken.or.jp/eiken/exam/>

一次試験の「解答速報」は、毎回一次試験日の翌月曜日13時以降に英検ウェブサイトにて公開いたします。

英検解答速報 <http://www.eiken.or.jp/eiken/result/>

本誌について

お問い合わせ先 英検サービスセンター TEL 03-3266-8311

本誌は以下、英検ウェブサイトよりPDFにてダウンロードしていただくことが可能です。

<http://www.eiken.or.jp/eiken/group>

お問い合わせ電話案内

電話番号はお間違えのないようお願いいたします。

● 英検申込受付に関すること
(出願、検定料など) **英検サービスセンター** (個人) **03-3266-8311**
(団体) **03-3266-6581**
(受験票、会場、合格通知など)

● 英検 Jr. に関すること **英検サービスセンター** (英検 Jr.) **03-3266-6463**

● 研究助成に関すること **英語教育研究センター** **03-3266-6706**

● BULATS に関すること **BULATS 事務局** **03-3266-6366**

● IELTS に関すること **IELTS 事務局** **03-3266-6852**

● TEAP に関すること **TEAP 運営事務局** **03-3266-6556**

● 英検留学に関すること **英検留学情報センター** **03-3266-6839**

● 通信講座に関すること **通信教育課** **03-3266-6521**

● その他のお問い合わせ **英検サービスセンター** **03-3266-8311**

※全国の英語教育に関する研究会、セミナーなどのウェブへの情報掲載については、英検のウェブサイトのフォームより申し込みください。

お知らせ

「英検」研究助成制度のご案内 ～第30回(2017年度)研究テーマ募集について～

「英検」研究助成制度は1987年に発足し、2017年に30周年を迎えます

公益財団法人 日本英語検定協会(英検協会)の「英検」研究助成制度は、全国の小・中・高等学校・高等専門学校
の先生方、大学院の方から研究テーマを募集し、英語教育やテストングの専門家による選考を経て、入選者に助
成金を交付して研究を援助する助成事業です。実用英語の普及・発展と英語能力検定試験の質的向上を目的に
1987年に発足し、今回で30回目を迎えます。

「英検」研究助成制度の応募総数は、累計で1,400点を超えました

これまでの応募総数は1,400点を超え、そのうち350点以上が助成対象テーマとして選考されました。選考を経
て入選し研究期間後に提出された論文は、英検協会発行の研究報告書『EIKEN BULLETIN』および英検ウェブサ
イト等で広く公表され、教育現場をはじめ、関係者の間で活用されています。

第30回(2017年度)の研究テーマを募集しています

募集テーマ

A 研究部門…英語能力テストに関する研究
B 実践部門…英語能力向上を目指す教育実践
C 調査部門…英語教育関連の調査・アンケート
の実施と分析

※研究テーマ(企画内容)はほかの団体から委託されていないもの、過去に発表されていないものとします(修士論文
なども含む)。

※D部門(CAN-DOに関する研究)は、今回よりA,B,Cいづ
れかの部門でご応募いただけるようになりました。

応募資格

●小学校・中学校・高等学校・高等専門学校で英語教育
に携わる先生
●英語教育に関わる研究を専攻する大学院に在籍する方

※応募者は「研究」を主たる生業としていない方に限ります。
※第28回および第29回で入選された方は応募できません。

応募期間

2月上旬～4月上旬
(詳細は英検ウェブサイト上で公表)

研究助成金交付額

各部門30万円以内

詳細につきましては、英検ウェブサイトまたは「英検研究助成」で検索してください。

http://www.eiken.or.jp/center_for_research/

英検研究助成

検索

英語教育研究センターウェブサイトでは、過去の「英検」研究助成
報告書を論文ごとに検索・閲覧できます。ぜひご利用ください。

「英検」研究助成制度に関するお問い合わせ

〒162-8055 新宿区横寺町55 公益財団法人 日本英語検定協会 英語教育研究センター「英検」研究助成係

TEL : 03-3266-6706 / FAX : 03-3266-6740

Email : center@eiken.or.jp

英語教育や英語能力テストに関わる多くの皆様からの独創的かつ有用な企画のご応募をお待ちしております!

2017年度 実用英語技能検定 試験日程

2017年度から「英検」は受験の機会をより増やすことができるよう二次試験を2日間(「A日程」、その1週間後に「B日程」)設定いたします。
申し込みにあたり一定の制限を設けておりますので、詳しくは英検ウェブサイト(<http://www.eiken.or.jp>)をご覧ください。

第1回検定

申込受付 **3/10金～5/12金** **協会必着**
【書店締切 : 5/8日】

一次試験 **6/4日**
(筆記・リスニング)

準会場 **すべての団体** **6/3日・4日**

中学・高校のみ **6/2日**

二次試験 (面接形式のスピーキング)
A日程 **7/2日** **B日程** **7/9日**

第2回検定

申込受付 **8/7日～9/15日** **協会必着**
【書店締切 : 9/8日】

一次試験 **10/8日**
(筆記・リスニング)

準会場 **すべての団体** **10/7日・8日**

中学・高校のみ **10/6日**

二次試験 (面接形式のスピーキング)
A日程 **11/5日** **B日程** **11/12日**

第3回検定

申込受付 **11/21日～12/20日** **協会必着**
【書店締切 : 12/13日】

一次試験 ^{2018/} **1/21日**
(筆記・リスニング)

準会場 **すべての団体** **1/20日・21日**

中学・高校のみ **1/19日**

二次試験 (面接形式のスピーキング)
A日程 ²⁰¹⁸ **2/18日** **B日程** ²⁰¹⁸ **2/25日**

※4級・5級のスピーキングテストの受験日は申し込みまれた各回次の一次試験合否開覧日から受験が可能です。各回次の二次試験日(1級～3級)から1年間の受験資格があります。
詳しくは英検ウェブサイト内4級・5級スピーキングテスト特設サイトをご覧ください。

